許六私考
晩年時代の許六
許六雜考
俳人許六の死
許六年表
各務支考及び美濃派に就て
元祿甲戌の支考
東花坊支考
文星觀を本とした支考終焉記
杉風論
杉風居士
奇人惟然坊
俳人惟然の稱呼（四川巢によりいぜんと推定す）につきて
惟然の研究
越人の研究
ほとゝぎす〔二二、二三〕 二、一 安立白峰
國語國文の研究〔・〕 二一 一〇 鈴木重雅
懸葵〔二五〕 四 二 鈴木重雅
黑潮〔三二〕 三 三 鈴木重雅
ほとゝぎす〔二二〕 九 二 安立白峰
國語と國文學〔三〕 三一 九 黑田鑛一
國語國文の研究〔・〕 八、九 四六 各務虎雄
國民之友〔八〕 二〇、二二 五 不知庵主人
國語と國文學〔三〕 一一 二一 各務虎雄
ほとゝぎす〔二〇〕 一 二〇 村上鬼城
ほとゝぎす〔二一〕 六 三 安立白峰
祇園〔二〕 七 八 野田別天樓
藝文〔八〕 一二 二 藤井乙男
國語と國文學〔三〕 八、九 四四 鈴木重雅
國文教育〔六〕 四 二九 鈴木重雅

凡兆小論
作家としての凡兆
凡兆研究
加生と凡兆とは別人歟
丈草と史邦
浪化上人乃事ども
浪化桃化兩上人に就て
浪化上人乃事
浪化上人に就て乃斷片
浪化について
浪化上人と越中の鄕土色
浪化と涼菟後記
浪化と涼菟附記
浪化年譜
ほとゝぎす〔二六〕 一二 三 高濱虛子
石楠〔一〇〕 一 八 大河寥々
石楠〔九〕 一—八 八六 大河寥々
にひはり〔・〕 一七 ・ 伊藤松宇
懸葵〔二四〕 五 七 顯原退藏
懸葵〔二〇〕 九 三 山口花笠
懸葵〔二〇〕 五 一 木津螢雪
懸葵〔一八〕 一〇 三 釋臣炎涼
うづえ〔四〕 一一 二 霞峰生
懸葵〔一七〕 一一 五 木津螢雪
ほとゝぎす〔六、七〕 八、一〇、二 三六 碧梧桐
ほとゝぎす〔六〕 一〇 四 碧梧桐
卯杖〔二〕 四 二 牧野望東

杜國に就て
流人杜國のこと
杜國を中心として
曾良の墓
薄命俳人曾良
河合曾良
嵐蘭の家系
生駒萬子の家系
路通の研究
路通の剃髪と還俗
乞食路通

ホ、正風

同人〔九〕一、二・柴田笥浦
ひむろ〔昭三〕五月・河本正義
ほとゝぎす〔二五〕一二六勝峰晋風
うづえ〔四〕一〇一三澤素竹
倦鳥〔一一〕一三西村白望
國語と國文學〔五〕四八二四荻原藤吉
ほとゝぎす〔二五〕一二勝峰晋風
三昧〔・〕三六・殿田良作
國語と國文學〔五〕五三、五六八七鈴木重雅
木太刀〔二六〕二・・鈴木重雅
にひはり〔昭四〕八月・・頴原退藏

俳人桃花上人　わか竹〔一一〕三三志田義秀
桃花上人　懸葵〔二〇〕四一二志田素琴
補稿桃化上人　懸葵〔二〇〕六五志田素琴
義士大高源吾書牘　東洋學藝雜誌〔六〕九四四編者
秋の坊の事ども　石楠〔七〕七六小松砂丘
祇空より角上へ　懸葵〔昭三〕九月・西村燕々
安藤冠里侯　木太刀〔二〇〕一二二西村燕々
竹青堂正秀　木太刀〔二〇〕一—三二八勝峯晋風
聽雨窓百話（旅人、我物、杜宇、作り宇、杜若一）　卯杖〔六〕七四角田竹冷
俳人雲鈴の研究　國文教育〔五〕六、七三〇鈴木重雅
聽雨窓百話（三千風に就て）　卯杖〔六〕五六角田竹冷
鳴立庵歴代（大淀三千風の系統）　卯杖〔一〕二二二宮松汀
太祇の研究　國語國文の研究〔・〕二、三六頴原退藏
偉大なる作家太祇　同人〔昭三〕五月・宮田戊子

俳人太祇（傳記）　獺祭書屋主人　六八
炭太祇と其の俳句　晋風、柳々嶋見、華外　七—九一六
大魯の主觀　西田勢之介　二五一一三
俳人大魯　西田勢之介　二五一一四
釋大魯　若尾瀾水　五五
飯島吐月とその俳句　勝峰晋風外四名　五九
梶良管見　紅雨　七四
信濃と蓼太　小林郊人　一三一
俳人蓼太　松田竹嶼　三一五
大島蓼太の出身地に就いて　樋畑雪湖　三二
蕪村と几董　獺祭書屋主人　三六
上田に遊んだ几董について　伊藤松宇　八月
几董一代年表
也有の琵琶裸と手紙
横井也有の號に就て

ほとゝぎす　〔二〕
にひはり　〔一五〕
早稲田文學　〔・〕
ほとゝぎす　〔五〕
にひはり　〔一五〕
卯杖　〔一〕
石楠　〔一三〕
新小說　〔一一〕
江戸時代文化　〔二〕
ほとゝぎす　〔二〕
同人　〔昭四〕
卯杖　〔一〕
にひはり　〔一四〕
にひはり　〔一四〕

横井也有の片鱗　石楠　〔一一〕　一四　高木蒼梧
也有年譜　卯杖　〔一〕　一二　梅本鹿山
也有と六林　藝文　〔一〕　七七　藤井紫影
也有遺文　典籍の研究　〔・〕　五二　石田元季
横井也有の書簡　帝國文學　〔四〕　九・　雜誌社同人
佐々木宇考と佐々木宇喬　京鹿子　〔昭三〕　五月・　鈴鹿野風呂
塚本如舟の事　門　〔一〕　二・　新村出
白梵庵馬　木太刀　〔二〇〕　六五　市橋鐸
俳諧大乘の納谷一堂　懸葵　〔一八〕　一一　島田王工
湖白庵浮風　俳三昧　〔一〕　四四　晋風
上田秋成が俳諧　太陽　〔四〕　二三五　岡野知十
泰里の上京と蕪村一派　懸葵　〔二三〕　四四　乾木水
既日は閑更の影武者か　木太刀　〔昭三〕　一月・　木村架空
蜀山人と堀田六林　黒潮　〔三二〕　三四　石田元季
戯洋篇と堀田六林　藝文　〔一一〕　一〇・　花見朔巳

天野信景と堀田六林　紙魚〔昭三〕九月・石田元季
實相寺嘯山の墓　木太刀〔一九〕二　西村影武者
鳥羽の實相寺　祇園〔二〕三　和田秋蒼
秋の實相寺を訪ふの記　木太刀〔一九〕一一　伊東史州
白雄論　早稲田文學〔・〕二五六　西谷勢之介
二夜菴貞松　卯杖〔三〕一　野崎柴兮
倉田葛三　卯杖〔三〕八　一四　柴兮
青雲居騏道　三昧〔昭四〕八月・　西村燕々
原田樗堂と其の俳句　にひはり〔一五〕四　九　勝峰晋風外六人　松原地藏尊、川嶋露石女、吉田冬葉、勝峰晋風
藤森素檗とその俳句　にひはり〔一四〕一一　八
酒落俳人西村定雅　石楠〔一〇〕九、一〇　一五　高木蒼梧
楳窓布席とその俳句　にひはり〔一四〕九　八　地藏尊、冬葉、蒼梧　鶯池、石女、晋風
兒島大梅と其の俳句　にひはり〔一五〕六　八　勝峰晋風外四人
花長老春樹と其俳句　にひはり〔一五〕一　八　冬葉、蒼梧、晋風外二人
松平四山公　うづえ〔四〕五、九、一〇　一六　内藤訥堂

松平四山公補遺　卯杖〔五〕二　五　内藤訥堂
惺菴西馬と其の俳句　にひはり〔一四〕一〇　七　垣上鶯池、松原地藏尊、相澤露一、吉田冬葉、勝峰晋風
曲齋瓢子（七部集註釋家）　帝國文學〔二五〕五、六、八　七　萩原蘿月
俳人藤兮の研究　ひむろ〔昭三〕五月・　鈴木重雅
伊那の乙食俳人井月　早稲田文學〔・〕二六〇　六　黒澤隆信

〈、女流俳人（正風の内）

題目及備考　雜誌名・卷數・號數　揭載頁數　作者
度會園女について　木太刀〔一九〕九　三　池田三烏子
園女小傳　むさしの〔二〕八　三　曙の舍
良寛の句と千代の句　現代佛教〔一〕七　五　相馬御風
千代女寸考　倦鳥〔一六〕五　四　井上麥秋
我が國平民詩人としての千代女　國語教育〔九〕七　五　德本正俊
女六歌仙と捨女　黒潮〔三二〕一　五　勝峰晋風

軒端の梅と紅蓮尼の清操　俳三味〔三〕二　三　牛坂青葉
鶏と宮女とについて　わか竹〔四〕六　四　まがね
天明俳壇の姉妹（星布と菊舎とについて）　石榴〔一四〕二、三、五　一九　田淵十風
田上菊舎小傳　短冊〔・〕六　一　福井正満
菊舎の俳句生活　石榴〔昭三〕十一月　・　藤本かをり
柳女と賀瑞　懸葵〔二一〕一一　六　乾木水

ト、蕪村

題目及備考　雑誌名　巻数　號数　掲載頁数　作者
與謝蕪村（本願寺人傳）　中央公論〔四〇〕四　三七　村松梢風
俳人蕪村（日本に掲載せのもの）ほとゝぎす〔一〕七—五　二九　獺祭書屋主人
俳人蕪村拾遺　ほとゝぎす〔一〕一八　四　獺祭書屋主人
蕪村の生涯　懸葵〔二一〕一、二　一四　穎原退藏
谷口蕪村小傳　むさしの〔二〕七　二　齋藤栗花
蕪村について　國語教育〔一一〕一、二　一一　齋藤清衛
余の見たる與謝蕪村　卯杖〔三〕一一　四　野口米次郎
與謝蕪村と宗鑑法師　祇園〔二〕八　六　乾木水
蕪村の一瞥　境地〔昭三〕三月　・　田中青牛
我適集（子規、一茶、蕪村）　むさしの〔一〕一、二、五　八　風清月白樓主人
蕪村雜考　懸葵〔二一〕九　八　穎原退藏
蕪村の煩悶時代　典籍の研究〔・〕三　七　乾献平
宮津時代の蕪村　懸葵〔二一〕一二　二　乾木水
蕪村とは誰か　三味〔一〕二—九　一一五　河東碧梧桐
蕪村と其の周圍を讀む　懸葵〔二三〕一一　二　名和三韓竹
滑稽の一面より見たる蕪村と一茶　卯杖〔二、三〕九、一〇、四　六　井上秋劍
蕪村新史料二　三味〔・〕三六　・　河東碧梧桐
蕪村俳句異同考に就いて　同人〔九〕二　・　青木月斗
蕪村と潭北　明星〔五〕三　六　岩田準一
蕪村と芝居　卯杖〔七〕三　五　伊藤松宇

蕪村と漢學　俳味〔四〕二、四、五　久保天隨　一九
蕪村の文臺（松宇翁より受けた印象）　俳三味〔三〕一〇　小原迂外　三
蕪村と讃岐回游　國語と國文學〔五〕五三　乾木水　九
蕪村の金比羅詣り　蕪〔三二―三三〕九、一〇、七　乾木水　二七
再び蕪村の西汲入都の軍時について　蕪〔一二〕一二　乾木水　六
蕪村の幻住庵訪問　にひはり〔一四〕九　西村燕々　三
畫家としての蕪村概觀　蕪〔二二〕七、八　星野空外　九
蕪村の書畫戲の記　蕪〔二三〕六　中野羊我　一
蕪村妖怪繪卷餘說　蕪〔二四〕五　乾木水　五
蕪村の戲畫　卯杖〔七〕二　田南岳璋　一
蕪村結城時代の繪畫　蕪〔二二〕二　乾木水　六
蕪村の短冊　短冊〔・〕四　伊藤松宇　二
蕪村書簡考證　想〔・〕八二　小宮豐隆　三一
蕪村の手紙　蕪〔二一〕四　穎原退藏　一三
蕪村の書翰　三味〔一〕五―七、一〇、一七　碧梧桐　一九
蕪村の書翰　卯杖〔六〕四　中島綠也
蕪村尺牘　寶船〔四〕一　三蜃樓
蕪村の手紙と正岡子規氏　手紙雜誌〔三〕四　竹の屋主人
霞天宛の蕪村四書簡　蕪〔二二〕六　乾木水
蕪翁遺墨　寶船〔五〕一二　秋星

チ、一茶

題目及傳考　雜誌名　卷數　號數　掲載頁數　作者
俳人一茶の生涯　早稱田文學〔四四〕六二　一一　會津八一
一茶の生涯　早稲田文學〔・〕二四六　四　島崎藤村
一茶の生涯　文藝〔四〕一一　四　小林鶯里
一茶の生立　雄辯〔五〕四　六　里の火
一茶の江戸生活　石楠〔一二〕三　六　高木蒼梧
江戸時代の一茶　早稲田文學〔・〕二四六　一六　川島つゆ

一茶と女性再考　石楠〔一四〕四　栗生純夫　三
一茶の義弟　石楠〔一〇〕一一　栗生純夫　三
一茶の門人　石楠〔一一〕六　栗生純夫　六
一茶　文藝〔四〕一一　大鹿卓　三
俳諧寺一茶翁　國學院雜誌〔三〕四　宮澤義　四
俳諧寺一茶　文章世界〔三〕九　佐々醒雪　一〇
俳人一茶　文藝〔四〕一一　金子迷羊　五
「野人一茶」小觀　中央公論〔四〇〕一一　相馬御風　二四
田園の俳人一茶　懸葵〔二一〕二—四　沼夜濤　一四
俳傑一茶　新聲〔二〇〕一〇　内藤鳴雪　二
一茶の偉大さ　石楠〔五〕九　臼田亞浪　一三
一茶私論　懸葵〔二五〕二　宮田戊子　五
一茶小研究　改造〔五〕八　近江益代　一〇
一茶のことゞも　にひはり〔一四〕一〇　栗生純夫　五
俳人一茶の事ども　文藝〔四〕一一　雜誌社同人　三
一茶雜記　石楠〔九—一〇〕六—一〇、一—二　栗生純夫　六〇
一茶雜感　文藝〔四〕一一　星川周太郎　四
一茶の生活と文學　にひはり〔一五〕九　勝峰晋風　八
一茶の藝術と人　國語教育〔一一〕一　木枝増一　七
人間としての一茶　草上〔昭三〕十一月　村瀨新吉
一茶生活と現代生活　枯野〔大一五〕十一月
愛に甦つた一茶　石楠〔一〇〕一　大野林火　四
六十歳になつた一茶　早稲田文學〔・〕二四六　萩原井泉水　一五
一茶の半面　懸葵〔二〕六　鱸　六
一茶の性格と其俳句　卯杖〔一〕六　紫竹　七
一茶の生涯と彼の藝術　國語教育〔八〕七、八　德本正俊　一二
「一茶の性格と其俳句」をよみて紫竹子に與ふる書　卯杖〔一〕八　丁生　一
一茶の藝術を通じて見たる彼の思想的展開　文藝〔四〕一一　小林操　四
一茶の童心　國學院雜誌〔三二〕七　宮澤潔久　二八
一茶斷片　早稲田文學〔・〕二四六　島田青峯　六

詩人一茶　明星〔三〕九　四　暉
近代藝術家としての一茶　文藝〔四〕一一　八　三枝幸雄
一茶といふ人のこと　早稲田文學〔・〕一九八　八　荻原井泉水
一茶を想ふ　文藝〔四〕一一　四　白崎繁彦
一茶の句境　早稲田文學〔・〕二一五　一一　荻原井泉水
一茶の表現　早稲田文學〔・〕二一六　八　荻原井泉水
一茶の句作振り　石楠〔一二〕八　四　栗生純夫
一茶坊の特調　卯杖〔一〕八、九　一一　福原雨六
一茶と子規　早稲田文學〔・〕二一八　一三　荻原井泉水
一茶研究眼の變遷　文章世界〔五〕一四　八　會津八朔郎
一茶と啄木と自分　にひはり〔一四〕五、六　一三　樋口不知雄
或日の一茶　文藝〔四〕一一　四　巣々木春湖
山懷に入る（一茶に關して）　石楠〔一三〕一　五　栗生純夫
彌爾頓と一茶　むさしの〔五〕二　三　樹下石上庵主人
國語上から觀た一茶　早稲田文學〔・〕二四六　四　安藤和風

信州どころどころ
一茶をたづねて　大調和〔一〕九・荻原井泉水
一茶と一休　層雲〔一三〕一　二　内島北朗
一茶一見の旅　俳味〔四〕一一　六　箕作南亭
一茶拜見　中央公論〔大一五〕十一月・荻原井泉水
一茶と柏原　黄橙〔大一五〕十一月・勝峰晋風
一茶の記念號に　文藝〔四〕一一　四　赤堀又次郎
紙袋にかいた一茶遺稿　早稲田文學〔・〕二五一　八　川島つゆ
一茶書簡抄　早稲田文學〔・〕二四六　一一　山口剛

9　近松門左衛門附淨瑠璃作者（人物評傳の内）

題目及備考　雜誌名　卷數　號數　掲載頁數　作者
近松門左衛門　文章世界〔四〕六　五　小山内薫
近松門左衛門（傳記）　早稲田文學〔三九〕六　三五　水谷不倒
近松門左衛門　日本之文章〔一〕二三　二　唇氣樓主人

近松門左衛門　國語國文の研究〔・〕一〇—一五、二〇　一〇二　草部了圓
解放の詩人近松門左衛門（藝術の文化史的意義について）　文章世界〔一二〕　一〇　一二　本間久雄
愛の人近松　東亞の光〔一七〕　一　九　藤村作
近松門左衛門逸事　わか竹〔一三〕　一　四　瀧川生
巢林翁の逸事　義太夫雜誌〔・〕　四　二　服霞峰
近松門左衛門逸事附小傳　國民之友〔三〕　三〇　二　瀧川龜太郎
筆のすさび（澤庵和尚、近松門左等につきての逸話）　しがらみ草紙〔・〕　一六　二　半顏居士
近松についての新發見　歌舞伎〔・〕　一六五　五　伊原青々園
小發見（浮世花鳥風月、浮世柴薪一代男及近松の書簡）　藝文〔七〕　一二　六　藤井乙男
近松門左衛門の所出に就いて　國語と國文學〔二〕　八　五　田邊密藏
巢林子の歿した時刻に就いて　雜波津〔・〕　一〇　二　秋浦學人
なぐさみ（なぐさみと近松）　國文教育〔五〕　五　一二　守隨憲治
巢林子雜話　趣味〔四〕　一一　四　饗村篁村談
巢林子雜感　大東文化〔三〕　八　八　木村秀吉
巢林子雜攷（巢林の語義と歌舞伎）　帝國文學〔一〇〕　一　九　藤井乙男
近松の新研究　新小說〔六〕　二　八　後藤宙外
近松の研究　史學界〔三〕　一　一　史學界同人
近松門左衛門について　東亞の光〔七〕　六　五　佐々醒雪
近松巢林子に就て（同郷人村田氏の研究發表）　淨るり雜誌〔・〕　二二九　四　淨るり雜誌同人
近松門左衛門の學識　早稲田文學〔・〕　二五〇　五　樋口慶千代
近松の二方面（アプラとアクヌケ）　早稲田文學〔・〕　二五〇　六　幸田露伴
近松覺書（作品の構成要素）　早稲田文學〔・〕　二五〇　六　藤村作
宮崎三昧先生の近松談（「名流談海」一同）　浪華名物　淨瑠璃雜誌〔・〕　六二、六三　三三　道樂散史
近松の發展に就て（巢林子著作表（塚越停春著）の紹介）　浪華名物　淨瑠璃雜誌〔・〕　七三　四　中村柳雨
近松著作考　新小說〔一三〕　四　九　高野斑山
近松しらべ　新小說〔七〕　四　・　伊原青々園
伊原青々園氏の近松しらべ（「近松と上方吹」、「近松の材源」等）　浪華名物　淨瑠璃雜誌〔・〕　六四—六七　一四　道樂散人
修辭より見たる近松　早稲田文學〔・〕　二五〇　一八　五十嵐力
近松巢林子の人生觀　帝國文學〔一〕　二　一九　高齋林良
近松より得たる印象　早稲田文學〔・〕　一四〇　一六　五十嵐力

夕霧劇の發展（近松と元祿歌舞伎の關係）　早稲田文學〔・〕二五〇　九　黑木勘藏
近松研究の一手引（近松當時の大坂の遊里及び遊女）　新小說〔一一〕五　三三　高野斑山
近松の弄語　新小說〔・〕八　三　佐々醒雪
近松と西鶴との比較　文章世界〔五〕一四　六　正宗白鳥
近松巢林が事につきて（命日、墳墓、後にきて菅原道堯君に寄す（爺等につきて））しがらみ草紙〔・〕二一　三　好尙
近松の苦笑（著作年代の考證正本の類推について）　早稲田文學〔・〕二五〇　九　高野辰之
巢林子の面影（庭前八景の發見）　趣味〔一〕二　一〇　水谷不倒
近松と馬琴　太陽〔五〕一五　二　グブリユー・チー・アストン
近松と時代（近松作物の變化と時勢の推移及び義太夫との關係なり）　國語と國文學〔一—二〕八—一　三四　田中辰二
巢林子の詩論（附元祿の活歷派）　中央公論〔二一〕五　五　佐々醒雪
近松門左衛門と竹田出雲　國民之友〔六〕七一　四　饗庭篁村
大近松と竹本政太夫　早稲田文學〔・〕二五〇　一三　木太蓬吟
近都翁と密敎の高僧　早稲田文學〔・〕二五〇　一四　宇田川文海
近松文學祭　趣味〔四〕一一　九　紅蓮洞
近松祭に就て（近松關係書册展覽に就て）　早稲田文學〔四二〕四八　五　水谷不倒
近松祭の記　新聲〔二〇〕一〇　四　原田春鈴
近松二百年紀念事業について　早稲田文學〔・〕二五〇　一八　坪內逍遙
近松巢林子の紀念碑について　太陽〔五〕一五　二　太陽同人
近松の墓（大阪法妙寺に於ける新發見）　淨るり雜誌〔・〕一九五　六　木谷蓬吟
近松巢林子の墳墓に就て　淨瑠璃雜誌〔・〕二二二　四　社說
文豪近松の碑に就て　難波津〔・〕四　一　船越生
近松門左衛門の絕筆より（大阪の大火にからむ因緣物語）　黑潮〔三二〕一　・　木谷蓬吟
竹田出雲小傳　義太夫雜誌〔・〕四　一　峰の家霞
近松半二の逸事（戲文紹介）　國民之友〔六〕七二　二　關根吟風
伊勢音頭と其作者近松德叟　淨るり雜誌〔・〕一九六　四　藤井呂先

10　脚本作者附默阿彌（人物評傳の內）

題目及備考（波が自作の目標とした當時の劇境及び俳優）　雜誌名　卷數　號數　揭載頁數　作者
脚本作者として の近松　早稲田文學〔・〕二五〇　六　伊原青々園

並木正三・義太夫雜誌〔・〕四一　一　柳霞樓和洲
並木五瓶・しからみ草紙〔・〕一　六　森篤太郎
五版南北その時代・早稲田文學〔・〕二五八　一六　近藤忠義
鶴屋南北傳・日本之文章〔一〕二四　二　寂深隱士
鶴屋南北・早稲田文學〔・〕二五八　三　長田秀雄
私の南北觀・早稲田文學〔・〕二五八　二八　池田大伍
初期の南北・江戸時代文化〔一〕二　四　渥美清太郎
鶴屋南北とその作風・早稲田文學〔・〕二五八　一八　沼波守
南北の諸作に反影する辰巳情調・早稲田文學〔・〕二五八　一二　西村眞次
四谷怪談作者としての南北・早稲田文學〔・〕二五八　七　畑耕一
四世鶴屋南北傳・早稲田文學〔・〕二五八　一七　坪內逍遙
南北以後默阿彌以前・早稲田文學〔・〕二五八　三八　渥美清太郎
並河五一翁墓及び傳記・歷史地理〔三六〕六　四　田代善吉
南北以後默阿彌以前・早稲田文學〔昭二〕七月　・　渥美清太郎
默阿彌研究・歌舞伎研究〔二〇〕・　・　河竹繁俊氏其他

默阿彌研究・新小說〔二四〕九　・　青々園、成義、八雄、萬太郎、糸女
默阿彌は三世新七か・歌舞伎研究〔・〕一二　二二　松本龜松
松江出雲守（默阿彌と雲州侯の關係）・歌舞伎研究〔・〕二〇　三　伊原青々園
默阿彌是非（作品の是非論）・歌舞伎研究〔・〕二〇　五　笹川臨風
默阿彌の書いた小說・演劇新潮〔・〕二　四　河竹繁俊
默阿彌の散切物（散切物初期の解說）・早稲田文學〔・〕一五四　六　河竹繁俊
默阿彌の散切物・早稲田文學〔・〕二二九　六　河竹繁俊
默阿彌の世話狂言・新小說〔二二〕六　一〇　小山內薰
江戸末期の通人生活（津藤と默阿彌との交誼）・早稲田文學〔・〕一五八　二四　河竹繁俊
默阿彌の人物・新小說〔二三〕六　一二　河竹繁俊
最後の狂言作者・歌舞伎研究〔・〕二〇　三　川尻清潭
種員及び種清と默阿彌・早稲田文學〔・〕二六一　六　河竹繁俊
治助・如皐・默阿彌・早稲田文學〔・〕二五八　一一　河竹繁俊
愛の人默阿彌・早稲田文學〔・〕二五八　六　守隨憲治
默阿彌翁の事ども・歌舞伎研究〔・〕二〇　一〇　關根默庵

默阿彌と淨瑠璃所作事　歌舞伎研究〔・〕二〇　七　若狹萬次郎
默阿彌略年譜　歌舞伎研究〔・〕二〇　三　河竹繁俊
默阿彌著作解題　歌舞伎研究〔・〕二四―二七　毎號約六　河竹繁俊
脚本鑑定書（默阿彌）　歌舞伎〔・〕三八、三九　一六　坪内逍遙
默阿彌に於ける江戸趣味　歌舞伎研究〔・〕二〇　六　高安月郊
圓服と默阿彌其他　心の花〔三一〕九　二　平山晋吉
沙翁と默阿彌（默阿彌のハムレット の疑案に就て）　早稲田文學〔大五〕一二五　二五　吉村繁俊
默阿彌とスクリーブ（時代位置、性格より の比較）　早稲田文學〔大五〕一三一　一〇　鳥村民藏
默阿彌と櫻痴　新小説〔一七〕三一　三　本間久雄
故默阿彌翁と私　歌舞伎研究〔・〕二〇　六　坪内逍遙
先代小國次と默阿彌との新劇動　早稲田文學〔大三〕一〇七　二六　河竹繁俊
書翰抄と引札（默阿彌）　歌舞伎研究〔・〕二〇　四五　河竹繁俊

（人物評傳の内）

題目及備考　雜誌名　卷數　號數　揭載頁數　作者
文學者年表　帝國文學〔一〕一より連載　約一五〇　赤堀又次郎
德川家康本姓考　國學院雜誌〔一〇〕九―一　五〇　阿部愿
安井道頓に就て　難波津〔・〕九　二　秋浦學人
道頓堀開鑿者安井道頓に關する一疑問　難波津〔・〕四　二　希有三
一疑問に就ての疑問―安井道頓に對する―　難波津〔・〕五　二　木崎豐吉
花屋舊次郎（實説の俳書を賣った 商店の主人）　高瀨〔・〕一　二　三面子
江戸時代の通人　新小説〔一一〕三　八　久保田米遷
柳里恭のこと　倦鳥〔一五〕五　三　井上麥秋
抱一雜事　うづみ〔四〕一、三　七　小泉迂外
司馬江漢の世界觀　國民之友〔一五〕二三三　一八　大西祝
昭和の女史家　心の花〔八〕二―四　一四　長壽吉
風流名橋競風流（浪華諸文人番附）　しがらみ草紙〔・〕四三　・　磯野秋渚校訂
噂の噂　難波津〔・〕四、五　四　楓處子
木村兼薛堂　國民之友〔六〕七九　三　關根吟風
曉鐘成附目磨粉の功能書

馬琴父子が仕へし松前藩主　文の友〔・〕一八　八　岡野知十
文晁と華山　ほととぎす〔九〕四　四　中村不析
松平不昧侯　獅子頭〔二〕一〇　一〇　島田筑波
奇人太申と傳九郎染（和泉屋茜助）　此花〔・〕二　一　此花社同人
高杉晋作　大正公論〔三〕九、一〇　一三　中原鐵蕉
王堂漫話　俳三昧〔二〕七　四　東海王道人

二〇、文學地理

題目及備考　雜誌名　卷數　號數　掲載頁數　作者
芭蕉翁遺蹟めぐり　中央公論〔四〇〕一〇　二六　荻原井泉水
黒羽附近の事（奥の細道の一節に就いて）　層雲〔一三〕四　一二　荻原井泉水
幻住庵のあと　ほとゝぎす〔八〕三　五　虚子
幻住庵を訪ふ　早稲田文學〔・〕二三六　一〇　山口剛
芭蕉翁見返りの櫻（伊賀上野の「さまざまの事思ひ出す櫻」）　しがらみ草紙〔・〕九　二　磯野秋渚
花屋考　同人〔昭三〕一月　・　南木萍水
上野公園名物秋色櫻物語　中央公論〔三七〕三　一〇　澤田撫松
落柿舍の舊蹟　卯杖〔一〕五　二　服部霞峯
落柿舍と金福寺　俳三昧〔二〕一〇　四　松田竹の島人
丈草遺蹟二三　木太刀〔二〇〕九　四　市橋鐸
時代人物の辭世と遺詠（東京府内のもの）　俳三昧〔二〕七　二　室田老壽齊
姥捨山は小長谷川だといふ　俳三昧〔二〕八　三　臼田亞浪

宜竹の吉野山　卯杖〔二〕　六　二　牧野望東
水雞塚　木太刀〔一九〕　六、八　五　玉置蕉雨
一茶の歌つた大沼　俳味〔四〕　二　四　山木銀杏
淡々紀行　しがらみ草紙〔・〕　五七　一三　半時庵淡々
清涼寺雜記　木太刀〔一九〕　二、三　二〇　明草生
江東名所　柴又帝釋天の起源　俳三昧〔二〕　一二　四　舟野源五郎
大近松の遺跡から（高野山、久々知）　改造〔九〕　一　一三　木谷蓬吟
春の摘草（遺蹟巡禮覺書）　義太夫雜誌〔・〕　四一　一　愛花仙史
浪華土產（遺跡巡禮覺書）　義太夫雜誌〔・〕　四四　三　內田茂文
諸國にある夕霧の墓　難波津〔・〕　一四　二　後藤捷一
お夏の家　俗鳥〔一三〕　三　二　森古泉
江戸の地理　國民雜誌〔三〕　九　一〇　塚越停春
江戸の地理沿革概觀　俳三昧〔二〕　七　三　玉江隱士
江戸名所と狂歌　浮世繪の研究〔・〕　九、一〇　五　野崎左文
抱一と江戸名所　卯杖〔六〕　一二、三　一四　小泉迂外

和學講談所の舊地　學燈〔一一〕　四　八　黑川眞道
高麗橋　なにはづ〔・〕　二　三　近畿鄉土研究會
船場の稱呼に就て　難波津〔・〕　八　二　秋浦學人
淀川水系文學地理（德川文學と大阪）　わか竹〔六〕〔八〕　五、七、一〇、一三　九、一〇、三　五一　水田恭太郎
「朝顏日記」と長崎文學　新小說〔九〕　八　六　伊原青々園
四谷區の史蹟並變遷の概要　江戸文化〔三〕　一　八　山下重民
江戸史蹟（墓及ひ名木について）　國民雜誌〔三〕　九　七　戸川殘花
江戸の地理沿革概觀　俳三昧〔二〕　一一　二　玉江隱士

二、書史

古版奥附集解說（元和木活本貞觀政要奥附）　書史〔・〕　一、二　三　雜誌社同人
江戸作者部類の稿本　典籍の研究〔・〕　三　三　高安吸江
德川文學類（假名草紙、浮世草紙評判記、淨瑠璃本に就て）　早稻田文學〔四〇〕　二五　六　水谷不倒
難波に因める古よ書り（好色難波男、伊達髮五人男等）　書史〔・〕　一、二　六　雜誌社同人
聚珍堂活版と天龍開山御歌（江戸時代木活字版、丹羽喜言）　藝文〔一九〕　一一　二二　日下無倫
吉原本二種（吉原不殘記と交代繁榮記の解題）　江戸時代文化〔二〕　一　六　尾崎久彌
花街文献考（細見、評判記）　東京新誌〔一〕　四—八　四八　石川巖
鯰公必要猫名本（大阪南地細見記解題）　東京新誌〔一〕　二　三　忍頂寺務
細見記考　此花〔・〕　一五—二四　毎號約三　此花社同人
天保癸卯の軟派版本　浮世繪〔・〕　一三　三　宮武外骨
播州巡り旅枕浦（髮梳毛擬作の最初）青海解題　典籍の研究〔・〕　四　二　川島三狐

滑稽膵梨毛解題　典籍の研究〔・〕　三　二　尾崎久彌
田舍源氏未刊本の序　此花〔・〕　一　一　此花社同人
物語草紙解題（泥江龜壽作）　帝國文學〔四〕　一、三、五、七　約四〇　平出鏗二郎
世に隱れたる上田秋成の著書　學燈〔一一〕　五　八　龜田次郎
遊古世（伴信友遺著）　學燈〔一一〕　七　三　幸田成友
源氏袖鏡について　書史〔・〕　一　一　青木平七
正德刊本三國遺事に就て（朝鮮古代史）　典籍の研究〔・〕　五、六　九　今西龍
「第五淺草文庫古板書目」と其由來　東京新誌〔一〕　二　二　耽奇老人
慶長板倭玉篇の系統及其總刷本　典籍の研究〔・〕　一　三　龜田次郎
洗心洞劄記の初刊本に就て　典籍の研究〔・〕　三　四　古矜子
新井白石の遺文　典籍の研究〔・〕　四　二　高安月郊
秋成自筆の膽大小心錘　藝文〔五〕　九　九　藤井乙男
中西石繪翁遺稿春風抄　あさみどり〔五〕　二、三　五　錦織雅太郎
藤堂梅花と共著「潮來絶句」の絶板について　奇書珍籍〔・〕　二　六　石川巖
契冲阿闍梨六歌仙贊　帝國文學〔五〕　三　六　三上參次

鈴屋文集初稿　帝國文學〔六〕　一〇　二　堀田次郎
玉あられ論の作者について　心の花〔一五〕　六　五　龜田次郎
千蔭遺稿　帝國文學〔五、六〕　一二、一　六　大野酒竹
香川景樹詠草の奥書　しがらみ草紙〔・〕　九　二　越俎道人
桃澤夢宅詠草奥書　しがらみ草紙〔・〕　五〇　一　香川景樹遺書
珍書「打聞集に就いて」　書物禮讃〔・〕　二　二　有川生
はなくらべさうしの奥書　あさみどり〔七〕　二　一　青木清高
戸澤正令侯の歌學書について　わか竹〔一一〕　六　四　福井久藏
歌川漫筆（青木菅根と萬葉考、貫之の自筆と定家卿）　短冊〔・〕　六　四　品田太吉
古筆の歌合　わか竹〔五〕　八、九　一八　大野木克豐
「高ねおろし」について（穂井田忠友が「茅窓漫錄」を批判せるもの）　學燈〔一一〕　三、四、八　六　二酉生
俳書漫讀　卯杖〔三〕　八、九　四　紙魚堂主人
蒐玖集の寫本に就いて　にひはり〔一五〕　四　三　岩城準太郎
古川柳異體出版に就て　大正川柳〔・〕　一六一　六　井上鼠花坊

我田書志（貞徳文集、毛吹草等について）　典籍之研究〔・〕　六　五　新村出
芭蕉に關する俳書研究　倦鳥〔七—九、二、三〕（七）一—六、（八）二—六、（九）一—三、（一一）一—三、（一二）三—三　六　毎號約六頁　野田別天樓
奥の細道の種類　にひはり〔一五〕　六　伊藤松宇
後の奥の細道　にひはり〔一五〕　八　七　伊藤松宇
新釋奥細道の由來　にひはり〔一四〕　一一　三　木村架空
五元集の書入本をよみつゝ　懸葵〔一五〕　七　七　大須賀乙字
嵐雪の「その濱ゆふ」（紹介）　にひはり〔一五〕　六　三　酒井柳々
盆踊都風流考證（惟然坊について）　新小說〔一一〕　八　二　高安月郊
俳書「千宣理記」の紹介（廣岡宗信編）　國語國文の研究〔・〕　一　四　能勢朝次
綠竹集と雲母集　殘魚〔・〕　一七　・　石田元季
「新花摘」刊行年月並文言訂正に就て　書物禮讃〔・〕　四　二　白水生
一茶旅日記に就て　にひはり〔一四〕　七　九　勝峯晋風
大阪の俳書と俳諧　難波津〔・〕　二〇　三　翁堂澤の井華舟
伊賀俳書乃發見　俳味〔五〕　一　一三　岩本震五子

俳諧の二僞書（歴代滑稽傳と有也無也の關係）　卯杖〔一〕　五　一　内藤刺栗
女流俳人の俳書「俳諧姫の式」について　奇書珍籍〔・〕　一　六　島田筑波
「ぬれほとけ」に就て　浮世繪〔・〕　四二　四　石川巖
吉原淩行小唄惣まくり私考　東京新誌〔一〕　二　四　鳴弦齊
吉原流行小唄惣まくり私考拾遺　東京新誌〔一〕　三　三　鳴弦齊
世志古濃圖會より秦平面白草紙迄（幕末の大阪俚謡小册子解題）　東京新誌〔一〕　一　五　山崎金男
元祖義太夫の教訓と門弟連盟狀　典籍之研究〔・〕　四　四　木谷蓬命
集林子筆菊花堂記（紹介）　典籍之研究〔・〕　一　二　藤井紫影
夕霧の命脈と文献　書史〔・〕　一　三　南木萍水
「菅原寺小屋」の粉本について　國語國文の研究〔・〕　一一　二　岡田希雄
芝居百人一首懐舊話　書史〔・〕　二　二　木村旦水
「岩井半四郎最後物語」の想出　書史〔・〕　一　三　石割松太郎
外題年鑑及び操年代記の異版　典籍之研究〔・〕　六　二　藤井紫影
連城亭の役者評判記目録　典籍之研究〔・〕　一、二　八　石田元季
小寺玉晁の自著目録　典籍之研究〔・〕　三　六　石田元季
鸚鵡石について（發生及挿繪について）　典籍之研究〔・〕　五　一　陶村閑人
「鸚鵡石」考（芝居狂言聲色附繪双紙）　典籍之研究〔・〕　四　五　尾崎久彌
文學者の國籍　心の花〔二六〕　一二　四　石川秋骨
三昧道人の綾足傳を讀む　國民之友〔六〕　七六　三　太華山人
菘翁研究資料書　典籍之研究〔・〕　五、六　五　島田伊兵衛
文化十一年版　浪花人名録に就て　典籍之研究〔・〕　五　一　橋本耕之介
浪花人物誌の類書　典籍之研究〔・〕　四—六　一〇　玉樹蘆城
國それ〳〵の人物誌　典籍之研究〔・〕　一　五　小竹園主人
錦繪木曾街道六九次　三田文學〔七〕　九　二二　小島烏水
大阪町名古鑑に就て　典籍之研究〔・〕　一　二　玉樹蘆城
文祿舊譯伊曾保物語解説　藝文〔一〕　一　八　新村出
天草出版の平家物語拔書及び其の編者について　史學雜誌〔二〇〕　九、一〇　三四　新村出
彰考館所藏の切支丹關係圖書　典籍之研究〔・〕　三　二　新村出
德川時代における朝鮮の書籍考　古界〔六、七〕　一〇、三　二五　古谷清

再び德川時代に於ける朝鮮の書籍について	學燈	〔一二〕	六	古谷清
德川時代に於ける朝鮮の書籍	學燈	〔一一〕	一〇、二	古谷清
アストン等の舊藏日本書のことなど	書物禮讃	〔昭三〕	八月	新村出
横山由清の魯敍遜漂行紀略	典籍之研究	〔・〕	一	新村出
西洋古文書學の由來	史學雜誌	〔六〕	五	坪井九馬二
群書類從について	大八洲	〔二〕	六	赤堀又次郎
宣胤卿記の斷片	書物往來	〔・〕	一五	飯島花月
將棋雜書蒐集（上下）	書物禮讃	〔・〕	二、三	大容堂主人
我衣と其著者	此花	〔・〕	三—三	幸田成友
寫本衛生秘要抄に就て	書物禮讃	〔・〕	九	中野三千夫
弘治五年活字版朝鮮本「伊路波」に就て（朝鮮の日本語學習書）	典籍之研究	〔・〕	三	神原甚藏
松平記と家忠日記の批評	史學雜誌	〔八〕	九	史學雜誌同人
彩色繪本考	東京新誌	〔一〕	五、六	大典駒村
源義經の異國逼塞（奈良繪本「しまわた」解說）	東京新誌	〔一〕	六	神原甚藏

二二、風俗

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
德川時代の風俗	皇典講究所講演	〔二〕	二七、六五	三四	關根正直
江戸風俗の變遷（大宰春臺著紹介）	日本之文華	〔一〕	一三	二	雜誌社同人
江戸風俗瑣談	國民雜誌	〔三〕	九	三	久保田米齊
編年江戸風俗拾要考	考古學雜誌	〔一二〕	四—七	一三	伊藤赳
江戸趣味の變遷	日本美術	〔一七〕	四	四	戸川殘花
江戸趣味と近代文藝	國民雜誌	〔三〕	九	八	滑疑生
德川家年中行事に就て	國文學	〔・〕	八四	四	藤岡繼平
旗本氣質	國民雜誌	〔三〕	九	六	塚本澁柿園
世内御旗本客氣	彗星	〔昭三〕	九月	・	三田村鳶魚他三人
德川の大奥	彗星	〔昭三〕	九月	・	山中共古
お伽役の話	彗星	〔昭三〕	九月	・	伊藤景明
江戸時代に於ける武家婦人の社會及家庭的地位	歴史地理	〔二七〕	三、六	一〇	櫻井秀

彌次喜多と江戸ッ兒　國民雜誌〔三〕九六　藤村作
京坂より江戸に及ぼせし流行一斑（鰤船、大佛餅等）　此花〔・〕一九二　此花社同人
江戸趣味　趣味〔五〕五四　内藤鳴雪
江戸は江戸　江戸文化〔昭三〕九月・　尾佐竹猛
見世物研究　中央公論〔大一五〕十一月・十二月　朝倉夢聲
振賣風俗圖說　此花〔・〕二―七　毎號約二　此花社同人
昌平黌（樹下し）　江戸時代文化〔一〕三七　今泉雄作
德川幕府刑罰の法　六合雜誌〔・〕二六六五　山形東根
昔の交番　此花〔・〕一〇一　鈴木南陵
關所と船番所の高札　川柳鯱鉾〔一三〕五四　今井卯木
姦夫の代償　此花〔・〕四一　此花社同人
寺小屋の起原論について質疑（石川謙氏に益を請ふ）　哲學研究〔一一〕一二九九　高橋俊乘
江戸時代の防火制度　國民雜誌〔三〕九四　太田贅雄
舊江戸の收稅法　文〔四〕六三　石水迂人
舊幕府の兵制沿革に就ての起想錄　江戸文化〔三〕二八　鈴木經勳

江戸時代の新年　ムラサキ〔三〕一七　雪中庵雀志
江戸新年の生業　此花〔・〕四二　江馬務
近世に於げる年始の典禮及風俗に就て　考古界〔八〕一〇、二一四　櫻井秀
吉原の松飾りと彈初　江戸文化〔三〕一四　廣田星橋
雛遊考（中世以後）　考古學雜誌〔一〕一、二一〇　櫻井秀
花の上野晦日の薄暮　江戸時代文化〔一〕九一四　華亭我醉
江戸座談會（端午の節句について）　江戸文化〔二〕七六　樋畑雪湖等八氏
土用と鰻鱺　彗星〔昭三〕九月・　山下重民
納涼船の變遷　此花〔・〕一一六　此花社同人
江戸菊細工の變遷　上下　此花〔・〕一、三三　此花社同人
風の神送り　此花〔・〕五二　此花社同人
厄拂　江戸文化〔三〕二三　山下重民
元祿前後の元服　考古界〔八〕一二九　宮本摺衣
元祿前後の元服　考古學雜誌〔一〕一一二　宮本摺衣
服飾史上より見たる近世の公家と女官（下）　考古學〔八〕九六　櫻井秀

武家女房裝束抄考　考古學雜誌〔一〕八　四　櫻井秀
舊幕府時代の衣服　太陽〔七〕五　四　石川治平
衣服の上に表れたる近世趣味の變遷（衣裝上の影響）　趣味〔二〕一　六　齋藤隆三
江戸時代染模樣の變遷　此花〔・〕一　一　此花社同人
慶安模樣雛形の圖　此花〔・〕二　一　此花社同人
元祿模樣の誤解　白百合〔三〕一　一　春潮
元祿模樣復活に關する私見　明星〔巳年〕一一　一〇　林田春潮
京羽二重と江戸鹿子　歷史地理〔五〇〕二、三　一八　岩橋小彌太
親和染　此花〔・〕三　一　此花社同人
寶永模樣雛形　此花〔・〕五　一　此花社同人
近世女史結髮の淵源　史林〔一一〕一　二二　高橋健自
引扱髮に就て　此花〔・〕一　一　あかひも
德川時代櫛笄の沿革　考古學雜誌〔一、二〕一一、三、一四　一四　黑川眞道
江戸時代社寺行政の一局面（丹波國日置八幡について）　歷史と地理〔一〇〕三　一三　渡邊多仲
江戸の祭さまゞ〳〵　江戸文化〔一〕七—九　八　山下重民
江戸の天下祭　國民雜誌〔三〕九　八　三田村鳶魚
神明祭の生姜市　此花〔・〕一二　三　此花社同人
壯觀を極めたむかしの神田祭　俳味〔二〕九　五　有山麓園
饗宴神事のことゞも　同人〔昭三〕五月　・　宮田戊子
饗替へ神事と山姥　江戸文化〔三〕一　一〇　折口信夫
水祝　此花〔・〕四　三　宮本摺衣
浪華民間信仰誌　なにはつ〔・〕二—五　七　近畿鄕土研究會
江戸時代の迷信　此花〔・〕三　三　此花社同人
江戸時代の俗信　國民雜誌〔三〕九　六　土屋詮教
託宣と祭（巫女考）　鄕土研究〔一〕三　九　川村香樹
觀音堂の奉納物　江戸文化〔二〕一〇　三　羽生久安
三河國刈谷町の萬燈祭　江戸文化〔二〕九　五　鈴鹿二十一生
江戸の祇園會　此花〔・〕九　一　菊池廣重
踏繪考（きりしたん史稿資料）　歷史地理〔一九〕二　一二　佐藤獨嘯
江戸時代に於ける天草の切支丹　史學雜誌〔昭三〕一月　・　長沼賢海

江戸の交通機關　國民雜誌〔三〕九　今井卯木
飛脚の話　手紙雜誌〔七〕二　四勝部登良
雲助の話　手紙雜誌〔四〕二　八黑板勝美
東海道五十三次　中央公論〔三六〕八　二〇笹川臨風
江戸時代の旅費調べ　中央公論〔三七〕一二　一六松川二郎
江戸の土木建築　國民雜誌〔三〕九　八大熊喜邦
金座銀座　國民雜誌〔三〕九　八山下重民
江戸の通人　國民雜誌〔三〕九　四笹川臨風
江戸の俠客　中央公論〔三四〕一一　八笹川臨風
通人の石神問答　此花〔・〕七　一品川生
西鶴の草子に見えし男達　此花〔・〕七　二紅紐生
江戸時代の殉死について　史學雜誌〔昭二〕十二月　・三上參次
公の切腹と私の切腹　國民雜誌〔三〕九　五太田贊雄
てんほや（語義について）　俳三昧〔二〕一〇　二廣田星橋
江戸町人氣質　國民雜誌〔三〕九　三饗庭篁村
江戸時代の廣告法　此花〔・〕一四　六此花社同人
江戸時代の行商廣告法　此花〔・〕一五　一此花社同人
物の賣聲　國民雜誌〔三〕、九　三宮崎三昧
安永年間振賣の呼び聲　此花〔・〕一　一此花社同人
十九文店　藝文〔六〕一一　七龍待生同人
十九文見世　此花〔・〕八　二此花社同人
下市の釣瓶鮓屋　此花〔・〕二〇　一此花社同人
蛇足記（下市釣瓶鮓屋について）　此花〔・〕二〇　三此花社同人
江戸の市　江戸文化〔二〕一一　一三鈴木經勳外七氏
ういらう問答　浮世繪之研究〔・〕三　一〇島田筑波　井上爾後
江戸の錦繪店　浮世繪〔・〕一　六小島烏水
洗湯手引草（風來山人）　江戸文化〔二〕九　一九雜誌社同人
質屋雜談（瀧亭鯉丈作　滑稽笑談紹介）　江戸時代文化〔一〕一、三、五　二三雜誌社同人
寄席の今昔　俳三昧〔三〕一　二鴻巣歌吉
大駄ボッチと道場法師（上下）　此花〔・〕一三、一四　三此花社同人

節季候と婆等　此花〔・〕一五　一　此花社同人
江戸の芝居　國民雜誌〔三〕九　三　伊原青々園
江戸時代の檢材句當座頭　國民雜誌〔三〕九　六　和田千吉
歌舞妓若衆の頭髪　此花〔・〕三、三四　四一　摺衣子
風流踊（寛永風流踊）　家庭文藝〔一〕四　三　東儀鐵笛
江戸のお夏清十郎　此花〔・〕一〇　一　此花社同人
吉原の俄狂言　此花〔・〕一二　一　此花社同人
吉原の仁和賀　江戸文化〔二〕九　八　廣田星橋
大阪俄（起原と發達）　新小說〔五〕七　八　水口薇陽
江戸時代の醫者　國民雜誌〔三〕九　四　富士川游
江戸時代の圍碁　國民雜誌〔三〕九　一七　廣月絶軒
江戸の銅燈臺と鑄物師　國民雜誌〔三〕九　六　香取秀眞
寛政以前の居候　川柳鯱鉾〔一三〕六　三　木枯庵樫風
近世琵琶法師について　わか竹〔一二〕二　七　櫻井秀
配當座頭　此花〔・〕五　一　此花社同人

江戸時代相撲雜談　國民雜誌〔三〕九　五　無名氏
幇間考　東京新誌〔一〕三　七　大曲駒村
「幇間考」補遺　東京新誌〔一〕四　四　大曲駒村
江戸講釋誌上　此花〔・〕二三、二　紙魚堂主人
人形師の話　江戸文化〔二〕七　五　高村光雲
佐渡の傀儡師について　歌舞伎研究〔・〕四　・　笹川臨風
新春の嘉例に古典的な「萬歳」の由來　俳三昧〔三〕三　二　東雲庵石山翁
萬歳考　此花〔・〕四　二　春月部雪後
鳥追の變遷　此花〔・〕一六　八　此花社同人
三人盧屋　此花〔・〕四　三　三田村鳶魚
スタスタ坊主の畫と人形とスタスタ坊主に就て　難波津〔・〕九　一　敷田景足
十三香具師考　難波津〔・〕九　一　田中居庸
江戸花街代表年代　此花〔・〕九　四　此花社同人
江戸藝者の話　國民雜誌〔三〕九　九　堀江東花
江戸文化〔二〕一一　五　梅川主人

江戸藝者の研究　中央公論〔四一〕五　六〇　三田村鳶魚
江戸の女藝者　此花〔・〕一〇　二　此花社同人
木戸藝者　此花〔・〕五　一　此花社同人
引手茶屋　江戸文化〔三〕三　三　廣田星橋
江戸の隱れ廓と古川柳（一、二）　川柳鯱鉾〔一五〕七、八　・　瓠村痴史
廓の春京の島原　中央公論〔三五〕一　一二　澤田撫松
仲の女中　俳三味〔三〕一　五　廣田星橋
太夫道中の研究　中央公論〔四〇〕四　二〇　三田村鳶魚
傾城氣質　國語と國文學〔一一〕四　一三　麻生磯次
遊女の手紙　江戸文化〔二〕九　四　鈴木經勳
懸想文賣　此花〔・〕五　三　此花社同人
歌比丘尼（一）　此花〔・〕一六、一七　七　此花社同人
私娼史料唄比丘尼　此花〔・〕二、三、五　八　此花社同人
十三小町　此花〔・〕八　一　雲突山人
風呂屋者　此花〔・〕九　六　此花社同人

びね艾　此花〔・〕二二　一　鳶魚
茶釜女　此花〔・〕一二　一　兼葭子
白人　此花〔・〕一〇、一一　五　此花社同人
江戸賣笑記　改造〔九〕一　二〇　宮川曼魚
飯盛女値段付（附「江戸軟派雜考」補遺）　新小說〔三〇〕一二　九　尾崎久彌
遊女說（浩革）　俳三味〔四〕二　四　夜琴庵
遊女勝山と勝山髷　此花〔・〕一三　三　此花社同人
名妓玉菊細見（新吉原年中行事の一）（「燈籠」の起原）　俳三味〔二〕九　二　蝸牛庵矢田夜琴
遊里の禁呪　此花〔・〕一八　一　此花社同人
江戸時代の呪（呪文のいろ〳〵）　此花〔・〕一九　二　此花社同人
女褌論　歌舞伎研究〔・〕一六　五　三田村鳶魚
芝遊山場今昔談　此花〔・〕二一、二三　四　蘆の葉散人
二十軒茶屋　此花〔・〕二　二　此花社同人
東西淫藥屋　此花〔・〕一　一　此花社同人
江戸の鞠歌　浮世繪〔・〕一二　四　若年寄

櫻田事件の流行歌　史學界〔二〕九　三蓬萊
江戸文化に現はれた階級闘爭　新潮〔大一五〕十一月　高須梅溪
柱暦に就て　歌舞伎〔・〕二七　三錦隣子
江戸式食道樂　趣味〔三〕六　七近藤逸山人
食道樂（東京の飲食店）　俳三味〔二〕一一　二矢田夜琴
鶏庖丁考（説明と投人）　考古學雜誌〔一〕五　三櫻井秀
觸穢と肉食の補説　皇典講究所講演〔九〕八三　一六本居豊穎
日暮里考　韻文學〔・〕三　四小笠原日毅
むかしの根岸（根岸の由來）　俳三味〔二―三〕七―二、一　三たねかず
あはしま　此花〔・〕六　二此花社同人
岡場所研究　比花〔・〕一三―三　毎號約三此花社同人
根岸夏話（「石尊」「はたごや」「ちきちんやど」等の考證）　江戸文化〔二〕七　・大槻正二
太左衛門橋　難波津〔・〕四　三近畿郷土研究會
玉江橋　なにはづ〔・〕二　一藤里好古
二つ井戸　なにはづ〔・〕二　一近畿郷土研究會

浪華年代記　なにはづ〔・〕一―一〇　八〇近畿郷土研究會
大阪名物「文樂座」　なにはづ〔・〕三　二近畿郷土研究會
浪花の布有　なにはづ〔・〕二　二藍徹塵
難波津の「蘆」について　なにはづ〔・〕四　二近畿郷土研究會
難波津の「梅」か「櫻」か　なにはづ〔・〕三　二近畿郷土研究會
江戸に二つない物　江戸文化〔二〕九　四鶴岡春蓋樓
江戸自慢花名物　我觀〔・〕四　・山口剛
延寶年間の江戸名物　此花〔・〕一三　一此花社同人
江戸の月影　俳三味〔一〕一　一小泉迂外
江戸名物志　此花〔・〕二―一四、一八　一〇此花社同人
文化八年版の進物　書物禮讃〔・〕五　六禿氏祐祥
便覽と三都の名物　此花〔・〕三　一此花社同人
寛政の二美人　俳三味〔二〕八　三柳鴨居有明德阿
江戸時代の遊船　江戸文化〔二〕一〇　二〇鈴木經勳外八氏
江戸座談會（江戸の見世物）　此花〔・〕一―三　一一此花社同人
日本畫に現れたる南蠻人の服飾並本邦へ傳來せし狀態に就いて

辻君細見　浮世絵〔・〕　三九　三　廣瀬菊雄
千年飴賣り　浮世絵研究〔・〕　三　二　雜誌社同人
十四屋の事　木太刀〔昭三〕　一月　・　西村燕々
十二挑灯考　此花〔・〕　二　一　此花社同人
食後　俳三昧〔二〕　七　三　河竹繁俊

二三、浮世絵

1 總記

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
浮世絵概論	改造	〔六〕	一〇	六	田中喜作
浮世絵我觀	浮世絵	〔・〕	八	三	堀江東華樓
浮世絵とは何ぞや（定義と説明）	浮世絵研究	〔・〕	一	一二	一郎、研堂、朝國、和雄、充、貞成、三郎、虎之助
浮世絵の名稱について	浮世絵	〔・〕	五	三	武田醉霞
浮世絵手引草	浮世絵	〔・〕	六	二	浮世絵同人
浮世絵主義（浮世絵の發達概説）	浮世絵の研究	〔・〕	七、八	一〇	澁井清
天明寛政期の錦絵概觀	浮世絵の研究	〔・〕	五	一五	市原一郎
文化時代の浮世絵	大帝國	〔二〕	七	七	林田春潮
衰頽期の浮世絵	三田文學	〔五〕	六	一七	永井荷風
三都新浮世絵	浮世絵	〔・〕	七	四	權田保之助

浮世繪の審美的本質に就て　思想〔七〕　四一　三三　岸田劉生
浮世繪の鑑賞について　浮世繪〔・〕　二四　五　小林文七
浮世繪の趣味　浮世繪〔・〕　二〇　五　市原一郎
浮世繪と江戸趣味　浮世繪〔・〕　一六、一七　六　高安月郊
浮世繪は畫聖金岡に勝るの說　浮世繪〔・〕　九　三　武田醉霞
貴族藝術としての浮世繪　浮世繪〔・〕　一三、一四　七　小島烏水
歐米の浮世繪研究　三田文學〔五〕　二　一一　永井荷風
浮世繪に於ける洋畫趣味と北齊派の活躍　早稲田文學〔・〕　二二八　一五　織田一磨
浮世繪に關する外人の研究　燈〔二一〕　一九　二　A. Doya
浮世繪西洋畫に與へる影響　浮世繪〔・〕　一六—一八　一〇　中井宗太郎
ヨーロッパ藝術に於ける浮世繪の意義　改造〔九〕　七　六　エヌ・ブーニン
純日本美術としての浮世繪　東亞の光〔一四〕　一一　四　藤浪由之
初期浮世繪の畫格　浮世繪〔・〕　二五　四　谷朱冠

2 版畫

題目及備考　雜誌名　卷數　號數　掲載頁數　作者
古代版畫考　此花〔・〕　一二　二　此花社同人
木版畫の發達と人文　浮世繪〔・〕　二、三、三　一〇　中井宗太郎
原版と復刻との識別　浮世繪〔・〕　一　二　雜誌社同人
現存せる最古の版畫　浮世繪〔・〕　八　三　藤懸靜也
版畫の社會的機能と藝術的價値　浮世繪〔・〕　八　五　菅原敎造
版畫に殘されたる江戸名所　浮浮繪の研究〔・〕　九、一〇　五　織田一磨
江戸名所に關せる版本　浮世繪の研究〔・〕　九、一〇特　五　漆山天童
江戸名所圖會編纂始末　此花〔・〕　一四、一五　二　此花社同人
繪草紙版元堂號一覽　浮世繪の研究〔・〕　三　三　雜誌社同人
上方繪版元一覽（アイウエオ順分類）　浮世繪の研究〔・〕　一一　八　黑田源次
見世物版畫年表　浮世繪〔・〕　四三—三五　一二　朝倉無聲

3 種類

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
彩色摺繪本の濫觴	浮世繪	〔・〕	一三	二	漆山天童
日本版畫類纂浮繪考	此花	〔・〕	一九	二	此花社同人
浮繪に就て	此花	〔・〕	二二	二	はらさかえ
日本版畫類纂文字繪考	此花	〔・〕	一五	一	此花社同人
日本版畫類纂藍繪考	此花	〔・〕	一六	一	此花社同人
日本版畫類纂紙鳶繪考	此花	〔・〕	一七	一	此花社同人
日本版畫類纂封筒繪考	此花	〔・〕	二四	一	無聲
日本版畫類纂疱瘡繪考	此花	〔・〕	一四	一	此花社同人
日本版畫類纂略暦繪考	此花	〔・〕	一三	一	此花社同人
浮世繪類纂丹繪考	此花	〔・〕	一〇	一	此花社同人
草繪考	此花	〔・〕	二	一	此花社同人
浮世繪類纂薄墨繪考	此花	〔・〕	一一	一	此花社同人
浮世繪類纂惡摺繪考	此花	〔・〕	九	一	此花社同人
浮世繪類纂紫繪考	此花	〔・〕	六	二	此花社同人
江戸の錦繪	國民雜誌	〔三〕	九	五	小泉迂外
錦繪と文明政策	浮世繪	〔・〕	一、二	一〇	菅原敎造
大津繪（起原、沿革）	浮世繪の研究	〔・〕	一一	八	藤懸靜也
歌繪あし手水手といふものゝ別	心の花	〔九〕	六	六	小杉楫郎
役者繪の順序	浮世繪	〔・〕	一	三	梅堂豐齋
役者似顔繪師系譜	浮世繪	〔・〕	一三	二	東叡隱士
芝居繪雜考	我觀	〔・〕	六	一五	藤本秀吉
浮世繪と花居の看板	浮世繪の研究	〔・〕	七、八	二	湯淺吉郎
錦繪に於ける木版刻彫師	浮世繪	〔・〕	四三	三	廣瀨菊雄
手遊繪と芳藤	浮世繪	〔・〕	五	三	松村翠山
源氏繪について	浮世繪	〔・〕	一二	三	仁木喜代之助
「風流祇園櫻」に就て（彩良繪本について）	東京新誌	〔一〕	六	七	田中喜作
浮世繪類考の底本を作れ	浮世繪	〔・〕	六	三	林若樹

4 繪師

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
浮世繪師實名錄	此花	二	一	一	初心生
浮世繪師評判記	浮世繪	四	二	三	朝倉無聲
浮世繪師草子	浮世繪	四	三	二	嵐光軒
浮世繪師住宅考	浮世繪	四		三	小島烏水
浮世繪師作畫年表	浮世繪	三	五	六	雜誌社同人
浮世繪落欵集	浮世繪	二	七	一四	同人
浮世繪師忌辰日表（德川時代より明治大正に至る）	浮世繪の研究			三	雜誌社同人
繪師の墓	趣味	三	二	九	山口曲陽
菱川師宣が傳の一說	太陽	四	五	四	水谷不倒
菱川師宣論	改造	九		一	田中喜作
菱川師宣に就て	浮世繪の研究			一	藤懸靜也
師宣研究の斷片（師宣繪本年表その他）	浮世繪の研究			一五、一六	田中喜作
菱川師宣繪本年代（萬治三年「吉原鑑」より貞享年間「花の木かくれ」まで）	書物往來		二	七	田中喜作
「三國筆海堂」といふ號に就きて	書物往來			一四	森潤三郎
菱川師宣筆夷子講宴飲の圖	此花	二	一	一	此花社同人
菱川師宣寄進の鐘	浮世繪		二	三	三村竹清
古山師重に就て	浮世繪之研究			四	藤懸靜也
英一蝶略傳	浮世繪			一四	武田醉霞
英一蝶謫居中の源氏畫	浮世繪			一、三	武田醉霞
英一蝶附朝妻船のこと	日本之文華			一三	岸上質軒
芝居繪としての鳥居派	早稲田文學			二五〇	樋口二葉
浮世繪師鳥居清信	三田文學			六	野口米次郎
鳥居清信と清倍	浮世繪之研究			七、八	井上和雄
鳥居清信筆市村龜藏扮猪早太圖	此花			二	此花社同人
羽川珍重繪の評判記	花			一二	水谷不倒
西村重長筆丸山遊女道中の圖	此花			二〇	此花社同人
志道軒の紅繪につきて	浮世繪			三九	梨花庵主人
ヨネ、ノグチ氏の春信觀	浮世繪			四	北野京二
鈴木春信の繪	浮世繪			一—五	橋口五葉

鈴木春信筆十二挑灯の圖　此花〔・〕二　一　此花社同人
勝川春章　歌舞伎研究〔二〕一〇　四　木村莊八
春章と其時代の江戸劇壇　浮世繪の研究〔・〕一三、一四　三　伊原青々園
圓正應擧の眼鏡繪に就て　浮世繪之研究〔・〕六　一二　黑田源次
ゴンクウルの歌麿傳　三田文學〔四〕九　二二　永井荷風
ゴンクール氏の歌麿　浮世繪〔・〕七　三　井上敬之
歌麿作風の變遷　浮世繪〔・〕三一　八　橋口五葉
歌麿と彼の戲曲　浮世繪〔・〕三八　二　矢田千九郎
歌麿と燕十とは別人　浮世繪〔・〕五　三　林若樹
歌麿小論　浮世繪〔・〕二　三　植村英一
偉大なる哉歌麿　中央公論〔三二〕一一　一三　野口米次郎
町人思想文化と歌麿の藝術　東亞の光〔一〇、一一〕二一、二二、二三　二六　中井宗太郎
歌麿の繪に現れた寛政美人　新小說〔三一〕八　九　仲田勝之助
烏居清長小傳　浮世繪〔・〕五五　四　榎本慧村
清長畫本目錄（英文）　浮世繪之研究〔・〕五　四　澁井清

司馬江漢の生寫について　浮世繪〔・〕三七　二　翠陰舍主人
人としての初代豐國　浮世繪〔・〕九　四　植村英一
ズッコの豐國　浮世繪〔・〕二〇　三　高安月郊
初代豐國の價値　浮世繪〔・〕五　二　秦豐吉
豐國の「役者舞臺之姿繪」　浮世繪之研究〔・〕五　六　井上和雄
豐國が初期の似顔繪小說　歌舞伎研究〔・〕二一　七　水谷不倒
「芝居繪と豐國及其門下」合評　早稻田文學〔大九〕一八〇　五　西村眞次　島村民藏
名所圖會と竹原春朝齋　日本美術〔一七〕八　四　林田春潮
浮世繪化されし抱一の俳味　浮世繪〔・〕八　三　小泉迂外
二代目歌川豐國論　早稻田文學〔・〕二三九　一七　七戸櫻洲
二代目豐國は國重か豐重か　浮世繪〔・〕二　三　小島烏水
渡邊崒山翁の錦繪　浮世繪〔・〕二　一　酉水
北齋研究　太陽〔一四〕二、三　一四　齋藤信策
丁子屋と北齋　高潮〔・〕五　二　四葩山人
北齋の畫風について　新聲〔二〇〕四　三　中村不折

北齋の春朗期に（黄表紙に表れたる畫風の變遷）について　浮世繪〔・〕　五三、五四　一二　黒田源次
北齋の肖像について　浮世繪之研究〔・〕　五　一　井上雨石
北齋の肖像及北齋畫漫　浮世繪之研究〔・〕　六　三　井上和雄
歌川廣重　帝國文學〔二〕　三　四　巨浪生
歌川廣重補遺　帝國文學〔二〕　五　八　巨浪生
廣重事蹟考　浮世繪〔・〕　三七　五　小島烏水
一立齋廣重　中央公論〔三二〕　一〇　一一　野口米次郎
廣重の江戸名所畫　浮世繪の研究〔・〕　九、一〇　六　内田素心
廣重の色彩と時代文化　懸葵〔一六〕　四　七　岩見護
廣重晩年の狂歌繪本（上下）　浮世繪〔・〕　九　五　小島烏水
廣重と街の情趣　浮世繪〔・〕　六、七　六　市原一郎
廣重の東海道五十三次　浮世繪〔・〕　五　三　小島烏水
廣重英泉木曾街道六十九次について　浮世繪〔・〕　五　三　佐藤章太郎
歌川豊重筆美人木偶遣の圖　浮世繪〔・〕　二〇　一　此花社同人
寫樂の究研　浮世繪〔・〕　六—一〇　二〇　中井宗太郎

クルトの寫樂　浮世繪〔・〕　一九　二　高安月郊
歌川國芳の小傳　しがらみ草紙〔・〕　一〇　一　半顔居士
國芳の東海道　浮世繪〔・〕　一四　四　高畠和雄
國芳の大津繪　浮世繪〔・〕　三　二　三田村鳶魚
役者から繪師となつた歌川國春　浮世繪〔・〕　四　五　齋藤ひろ麿
三代目豊國の書について　浮世繪〔・〕　一〇　四　市原一郎

5　浮世繪と草子

題目及備考　雜誌名　卷數　號數　揭載頁數　作者

稗史原稿より見たる戯作者と浮世繪師との關係　浮世繪〔・〕　八　五　林若樹
德川末の出版界に於ける繪師と作者　浮世繪〔・〕　三二　四　藤懸靜也
戯作者と浮世繪　此花〔・〕　一　一　此花社同人
浮世繪師兼戯作者　浮世繪〔・〕　二二　一　浮世繪社同人
繪師と作者一覽　浮世繪〔・〕　五三、五四　二　浮世繪社同人

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
繪入本の詞書	浮世繪〔・〕	一八		一	浮世繪社同人
西鶴本の挿繪に就ての新說	浮世繪〔・〕	五一		二	浮世繪社同人
戀川春町の追善會	浮世繪〔・〕	一		一	浮世繪社同人
細見の標題とその繪畫	浮世繪〔・〕	三、三		六	堀江東華樓
草雙紙の外題袋其他	浮世繪〔・〕	三九		八	尾崎久彌
双紙類の袋繪	浮世繪〔・〕	五〇		三	浮世亭如夢

6 雜

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
浮世繪に關する著書	浮世繪〔・〕	一三		二	金田芳水
浮世繪の山水畫と江戸名所	三田文學〔四〕	七		二九	永井荷風
江戸座の俳書と浮世繪	浮世繪〔・〕	四八		四	島田筑波
江戸時代風俗の研究と浮世繪	此花〔・〕	一		一	此花社同人
浮世繪研究用年表	浮世繪〔・〕	一五、一六		三	浮世繪社同人
浮世繪と國々	浮世繪〔・〕	四		四	水酉
浮世繪と歌舞伎との關係に關する疑問	浮世繪〔・〕	一七、一八		六	坪内逍遙
最初の諷刺畫	浮世繪〔・〕	一九		二	澤田花斧
浮世繪の幽靈	此花〔・〕	一四		一	此花社同人
千社札と浮世繪	浮世繪〔・〕	二、三		八	扇のひろ麿
風景畫の三人	浮世繪〔・〕	三—五		八	宮澤朱明
浮世繪師の畫いた動物	浮世繪〔・〕	七		二	藻透堂老人
七福神と寶船	浮世繪〔・〕	二〇		二	鳥居庫吉
戀慕の男繪	此花〔・〕	八		一	可笑子
錦繪に現れたる田之助	早稻田文學〔大五〕	一二六		五一	秦豐吉
淺草寺の古繪馬	此花〔・〕	七		二	此花社同人
山田右衞門七作帝王騎馬の圖に就いて	趣味〔二〕	二		五	中村不折
浮世繪に諷刺される壽姫の肖像	此花〔・〕	一		一	此花社同人
鍬形蕙齋會式造花賣の圖	此花〔・〕	二		一	此花社同人
來朝唐人の圖	此花〔・〕	三		一	此花社同人

文化初期の檢印について　浮世絵〔・〕　四〇　井上和雄
昔日出版禁命に就て　浮世絵〔・〕　三八、三九　六　武田醉霞

二四、雜

題目及傳考　雜誌名　卷數　號數　掲載頁數　作者

江戸評判女とそ（毒妖狂女）の戀愛寸見　江戸時代文化〔二〕　二　九　薄隆
江戸のゴシップ　書物禮讃〔昭三〕　八月　・　鈴木馨
江戸城建置考（文學及史的考察）　學藝志林〔一四〕　一、三　四〇　小宮山綏介
伊蘇普物語の抄譯　本道樂〔四〕　四　・　飯島花月
鈴木主水の傳說　此花〔・〕　八　二　今關天彭
夕霧伊左衞門（事實と作物）　趣味〔四〕　三　二　飯臺散夫
扇屋夕霧　難波津〔・〕　四　一　鳴田茅亭
諏訪神社にまつはる遊女と貴理支丹　倦島〔一五〕　八　三　池田螢都
遊女薄雲の傳說　帝國文學〔一五〕　・　五　栗原武一郎
小三金五郎　早稲田文學〔四〇年〕　二二　七　水谷不倒
古本書畫雜談　獅子頭〔二〕　一一　六　村田幸吉
ジャガタラ文　倦鳥〔一四〕　一　四　松瀨青々

礎茂左衞門の直訴狀　早稲田文學〔・〕二四七　七　浦野芳雄
堀尾忠晴森賴次兩人に關する古文書　史學雜誌〔八〕一二　三　史學雜誌社同人
富森麥帆討入狀　倦鳥〔一〕三　四　松瀨青々
大日本史解題　史學界〔一〕九　三　雨峽
大日本史の三大特筆　史學界〔二〕二　一　史學界同人
元祿時代に於ける書法　史學雜誌〔九〕七　一三　山崎藤吉
雜文二章（「非海堂」の號、陽名遺稿について）　書物往來〔・〕一五　三　田中喜作
藏書印譜（常山、榜亭、容齋）　集古〔昭三〕五月　・　三村清三郎
續近世花押藪（學川信友）　集古〔昭三〕五月　・　大和寶輯
同名異人集（正臣、高雅の二人）　短冊〔・〕七　一　芬香洞
木食僧と語る　中央公論〔三二〕八　一一　田中貢太郎
御紋康繼（越前刀匠）　江戸文化〔二〕一〇　六　本間順治
喜多村筠庭の人物　歷史地理〔四九〕六　五　森銑三
Goresは琉球人である　國學院雜誌〔昭三〕三月　・　秋山鎌藏
伊達騷動　新小說〔一〇〕七　六　伊原青々園

義士史實（略歷）　大國民〔・〕三三、三四　二　福本日望
義士討入の眞相　雪晴の晨（上）　俳三昧〔二〕一二　五　南岐佐藤松垂
赤穗義士に就いて　東亞の光〔五〕六　一五五　井上、加藤、久米、三上等
佐倉新助より不破數右衞門に贈る手簡　史學雜誌〔九〕八　五　橫井時冬
江戸時代の勤王論について　東亞の光〔九〕五、六　二五　三上參次
武士に對する諒解の根柢（默阿彌作品に現はれたる武士の取扱）　歌舞伎研究〔・〕二〇、二一　一七　立田村鳶魚
百姓一揆物語　中央公論〔四〇〕三　二六　小野武夫
天正兵燹以來の根來山　加持世界〔一〕一、三　六　富田古堂
德川時代の諸本寺の格式　加持世界〔一〕五　五　富田古堂
正史野棄に見えたる牧の方　歌舞伎〔・〕六一　五　坪內逍遙
こほろぎ（おいらん虎の指とこほろぎの話）　俳三昧〔二〕一一　四　廣田金松
籠の鳥（一人の女に二人の男）　俳三昧〔二〕一二　四　廣田星橋
桂園叢話（京都臨淵社相撲番附）　しがらみ草紙〔・〕五五　四　龜田俊夫
百字文なるものにつきて　文庫〔二七〕三　三　樂童
鄙三處の賣笑記錄　早稲田文學〔昭二〕五月　・　尾崎久彌

根本仕立の艶本　歌舞伎研究〔・〕二・尾崎久彌
江戸文學に現れたる河童　江戸文化〔二〕九五山崎麓
昔の原稿料（松亭金水の書林に宛てた書簡紹介）　藝文〔一〕九五藤井紫影
幕末の文藝批評家　此花〔・〕二一此花社同人
修善寺に二つある範頼の墓　俳三昧〔二〕一二六野鶴樓主人
「江戸作者部類」の一資料　江戸文化〔三〕三五山口剛
戯作者者述書目　帝國文學〔四〕四、六約二〇平出鏗二郎
異學禁（樂翁公のこと）　東京學士會院雜誌〔一六〕二、三四四重野安繹
切支丹懺悔錄　改造〔一〇〕二、三二三吉野作造
古筆手鑑に就いて（講演速記）　考古學雜誌〔二〕九一一今泉雄作
「英雄百人一首」及その類書　璃世繪〔・〕四四五內藤鳴雪

——國語國文研究雜誌索引　第一輯終り——

國語國文研究雜誌索引

浪速高等學校編

國文學の部

現代

一、總記

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
明治文學の概觀	文章世界	〔七〕	一三	一〇	田山花袋
明治文學の概觀	日本主義	〔六〕	四二	七	芳賀矢一
明治文學愚抄（新體詩抄その他）	東京新誌	〔一〕	三・五	一六	耿奇郎
明治文學小史	明星	〔・〕	一八	一	少微星

明治文壇側面史（自二十一年至三十七年 吾「文庫」の歴史）文庫〔二七・二八〕六・二 三・五 二一四 一記者
明治文學史手引草 改造〔九〕六 三 佐藤春夫
私の明治文學觀 改造〔九〕六 三 野口米次郎
明治時代の文學（日本と云ふ題材の中に 明治三十三年）太陽〔六〕八 四 木寺柳次郎
明治文學昔話 早稲田文學〔昭二〕六月・ 佐藤義亮
國民文學（明治四十三年） 國民評論〔・〕一三 五 影隈郎
明治文壇印象記（文人の運不運、川上眉山、上田柳村、若松賤子） 改造〔八〕一二 八 高須芳次郎
明治文學の回顧 改造〔八〕一二 八 阿部次郎
明治文學の回顧 國語と國文學〔五〕五二 一六 藤村作
明治文學遠眼鏡 書物禮讃〔・〕一 五 道彦
明治文學史上の新發見 新潮〔二四年中〕五・六 一三 高須芳次郎
當代の讀書趣味（明治時代） 早稲田文學〔・〕二五五 一〇 日夏耿之介
明治趣味 帝國文學〔一五〕九 五 笹川臨風
本邦文學說略（本居氏を中心として 明治二十七年） 帝國文學〔一〕七 一四 黑川眞頼
明治文章界の事業とその感化（研究） 文章世界〔七〕一四 一〇 秋海棠

草雙紙と明治初期 早稲田文學〔・〕二六一 八 野崎相文
草雙紙極盛時代と維新後 早稲田文學〔・〕二六一 二〇 三品蘭溪
明治初期 早稲田文學〔・〕二二九 六 幸田露伴
明治初期文學斷片（文學界回顧） 國語と國文學〔四〕三 五 藤田德太郎
新舊過渡期の回想（明治初期の文藝） 早稲田文學〔・〕二二九 一四 坪內逍遙
明治文學初期の追憶 早稲田文學〔・〕二三三 一八 市島春城
明治初期の大衆文藝 早稲田文學〔・〕二五五 六 服部嘉香
明治初期の劇壇 早稲田文學〔・〕二二九 四 伊原青々園
最近の感想（外國文學飜譯と本邦文學（大正二年）） 帝國文學〔一九〕九 三 山田檳榔
明治混沌期の政治文學 早稲田文學〔・〕二二九 一五 宮島新三郎
明治初期國語國文の見取圖 早稲田文學〔・〕二三三 七 窪田空穗
外國文學の輸入（上代より外國文學の輸入影響を說く 明治二十六年） 國文學〔・〕七三 六 上野紀士
歐化主義國粹主義の硬文學 早稲田文學〔・〕二三二 一〇 高須芳次郎
明治過渡期の筆禍文藝 早稲田文學〔・〕二三二 四 齋藤昌三
落合直文の國文詩歌新運動 早稲田文學〔・〕二三二 一二 金子薫園

硯友社文學運動の追憶　早稲田文學〔・〕二三二
硯友社亡ぶ　新聲〔一六〕四　二三三　一・六　一八　丸岡九華
日清戰後の文壇（明治文壇における幾多の光景の七）　文章世界〔七〕一四　二　破天公子
文學上の流行（明治四十年）　うづえ〔五〕八　三　記者
日本現代文學の變態的發展　早稲田文學〔・〕二三〇　八　森無黃
新興文學の意義（明治四十年）　太陽〔一四〕四　八　大槻憲二
時代の精神と大文學（明治三十二年）　太陽〔五〕四　一一　片上天弦
今と昔（今と昔の文學）　改造〔八〕一二　八　太陽同人
海には遠し（明治文壇の評論）（大正十五年）　太陽〔三二〕一〇　九　廣津柳浪
明治文壇の曉星（明治文壇に於ける幾多の光景の一）　文章世界〔七〕一四　三　江見水蔭
文學の種類に就いて（明治三十五年）　太陽〔八〕一五　三　記者
明治文壇雜學問答　新潮〔四二四三〕六・一・三三・四・五　四五　柱濱月下漁郎
明治前後の厭世觀　中央公論〔二二〕一一　六　木村毅
明治文學の二大疑問　文藝〔二〕九　三　戸川殘花
明治文學に現れたる道德的事實　六合雜誌〔・〕二二〇　七　松本胤恭
明治時代研究の動機　懸葵〔一三〕六　五　本吉武三
明治文壇と大阪　難波津〔・〕一八　一九・三　三　橋川正
當時の大阪と東京の文壇　早稲田文學〔・〕二五五　四・二　一二　船越政一郎
大阪に於ける文學隆盛の第一期　早稲田文學〔・〕二三二　五　三品蘭溪
日本廣告史　二十世紀〔二〕二　六　河井醉茗
日本現今の文學（西村直樹氏の演說批評）　國民之友〔二〕一九　二　宮武外骨
早稲田文學時代の思ひ出（昭和二年）　新潮〔二四年〕一〇　九　同社記者
明治大正文學の社會的考察　文章倶樂部〔昭二〕一月　・　田中純
大正時代の文學　學校教育〔昭二〕十二月　・　木村毅
現代文學研究（主知的色彩）　國文教育〔昭二〕四月　・　鈴木敏也
現代文學の諸相　女性〔昭二〕一月　・　湯地孝
一角から見たこと（日本の文學と哲學）（大正十五年）　三田文學〔一〕五　四　片上伸
現代文學の問題（日本文學に足りないのは意志（大正十一年））　新潮〔四〇〕一　八　島原逸三
日本文學の歐米紹介（論說　附英譯「パラと星女」）（大正十二年）　解放〔五〕五　三六　片上伸
文學の事（大正十四年）　文藝春秋〔三〕六　二　吉岡青村
　　岡田三郎

當世文事鑑　新潮〔四二〕二—六　七二　三上於菟吉
文壇の現狀に對する感想　新潮〔四三〕二—六　一〇　正宗白鳥以下四名
現代文學研究（九）（截斷面諸相の解剖、主知的色彩）（一〇）（二）（三）　國文教育〔五〕一・三・三　四・七　一〇二　湯地孝

二、小說

1 總記

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
明治の小說を論ず（明治二十三年）	日本之文華	〔一〕	七・九	三四	川島純軒
小說管見	文	〔四〕	六・九 一〇	一五	佐藤寬
明治小說作家の處女作	東京新誌	〔一〕	三	五	各作家回答
小說研究の斷片	文藝	〔五〕	一	三	渡邊左次馬
小說の世界（明治四十一年）	中央公論	〔二三〕	七	五	刀尺生
小說の分類（明治二十三年）	日本之文華	〔一〕	一三	三	孤峰外史
小說の題材（明治四十四年）	ほととぎす	〔一五〕	一一	四	石坂養平
明治小說壇の革新（批評創作の關係より明治小說と今後の小說の革進へ）（明治四十一年）	帝國文學	〔九〕	四	二八	高木敏雄
露國文學と日本現代文學との交渉	趣味	〔三〕	四	一〇	馬場孤蝶 昇曙夢
小說に於ける女性の三大變遷（御臺姫君の時代、傾城遊女時代、海老茶式部女學生時代の三期）（明治三十九年）	趣味	〔一〕	五	九	水谷不倒

小說の三方面（明治三十六年）　明治小說文庫〔・〕七編　一　文庫記者
所謂田園文學　早稻田文學〔・〕二七二　五　藤森成吉
文藝運動として の大地主義（吉江喬松一派の運動）　早稻田文學〔・〕二二三　七　中村星湖
第一人稱現在小說　文藝春秋〔三〕三　三　井光彌
日本プロレタリヤ文學の三四の作品（黑島傳治・里村欣三・林房雄諸氏の作、その他（大正十二年））　中央公論〔四三〕一　一八　片山伸
義捐小說（正太夫の義捐小說についての評）　しがらみ草紙〔・〕二八　四　森鷗外

2　論議

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
小說の品格（明治二十三年）	日本之文華	〔一〕	三	四	松井廣吉
文士の狹量とは何ぞや（論說）	新小說	〔四〕	六	八	宙外
曲筆阿世の小說を排す（明治三十二年）	文庫	〔二八〕	五	四	松原至大
現代教育と文學との交涉	文庫	〔二五〕	一	三	高須梅溪
教育家の觀察せる文學（明治三十年）	明治評論	〔六〕	一・二	六	久津見息忠
宗教文學の意義及び批評	東亞の光	〔一八〕	三	九	鳴澤寡愆
家庭と文學（明治三十八年）	心のはな	〔八〕	九	七	巖谷小波
文學非奬勵、文士鞭撻論（明治三十六年）	日本主義	〔七〕	五一	七	木村鷹太郎
文學亡國論（明治三十年）	明治評論	〔六〕	三	三	時文記者
文學の狂的分子（明治四十二年）	太陽	〔一五〕	四	八	長谷川天溪
國民の文學趣味を養ふ方法（明治三十二年）	太陽	〔五〕	一一	一	大阪朝日新聞社說
天然（天然と文學との關係交渉（明治二十七年））	帝國文學	〔一〕	六	一〇	建部水城
文學の試驗的方面（明治三十八年）	太陽	〔一一〕	五	三	長谷川天溪
文學上に於ける西歐崇拜の殘夢（明治二十八年）	國學院雜誌	〔二〕	二	一	田岡嶺雲
文學に於ける西歐崇拜の殘夢（明治二十九年）	明治評論	〔五〕	一	四	田岡嶺雲
國民文學の興隆を望む	大日本	〔三〕	八	一	山口葉吉
創作家の主戰熱	文學	〔三一〕	六	二	橋本江村
新派は衰へるがよい	新小說	〔一六〕	八	五	田中掬汀
小說家の好む小說（四人の好む小說（明治四十年））	趣味	〔二〕	九	三	小栗風葉、鳥崎藤村、德田秋聲、長谷川四迷
小說界の新生命	太陽	〔五〕	一六	一	堺枯川

文學雜感（劍南の國民文學論、無用な事、佐々木信綱氏の答辯（明治卅八年））　明星〔巳年〕　五・六　一〇　平出修
文學瑣談（明治二十五年）　精華〔・〕　七・一六　三　一溪閑人
小說的人物（明治四十年）　中央公論〔二二〕　二　四　三宅雪嶺
小說と俳句（文學と臺灣の歴史及地理）　太陽〔一〕　九　四　紅葉
小說と脚本（二卷以後四卷まで大正十二年前後の作品を品評して各卷未にのせたるもの）　三田文學〔三―四〕　毎號　毎號約二　三田文學同人
小說と脚本（明治四十四年）　歌舞伎〔・〕　一〇二　四　小杉天外
小說の審査に就いて（高點を得る三要素（明治四十年））　趣味〔二〕　四、六　四　芳賀矢一
明治小說の現狀を論ず　天鼓〔・〕　一一・一二　一三・一四　二二　佐藤芝峰
現代小說根柢の誤解（中村星湖に對する反駁、描寫論に就いて（大正元年））　早稲田文學〔大元年〕　八五　九　岩野泡鳴
小說の諸問題（大正十五年）　新潮〔一二三年中〕　五　一一　宇野浩二
來るべき大阪文藝の性質　文章世界〔八〕　一　一二　岩野泡鳴
何ぞ創作家多きや　文庫〔二九〕　二　三　烏水
明治文藝史の一區劃（明治三十七年―明治三十九年）　新聲〔一五〕　六　六　時評子
明治今日の文章　國民之友〔一三〕　二〇四―二〇八　一五　福地源一郎

明代の文學と明治の文學（明治二十年初期と十年代との比較及び明代文學との對照）　しがらみ草紙〔・〕　五　八　市村瓚次郎
現代文學　國民之友〔九・一〇〕　一三七―一四一　一一　不知菴主人
墮落文學退治（近代小說の墮落を論じその改正を望む）　大日本〔三〕　四―一三　七一　劍書老人
墮落文學退治の四法（法律、家庭の父母、學校、書物等で墮落文を責む）　大日本〔三〕　八　二　蜷川新
俗惡文學退治の六方面（爲政者、出版者、教育者、家庭社會の改善）　大日本〔三〕　一一　三　新井誠夫
小說の通俗化、評論の雜文化（大正十年）　新文學〔一六〕　三　六　小島德彌
法の文藝（文藝の墮落救濟に對する法の文藝の高唱）　現代佛教〔一〕　一　五　高楠順次郎
最近の歴史文學と史實の考察　新潮〔四三〕　五・六　一六　高須芳次郎
歴史小說の主人公としての古英雄　國民雜誌〔三〕　一　六　塚原澁柿園
歴史小說について　新小說〔一三〕　七　五　塚原澁柿園
家庭文學の變遷及價値（明治煽情文學概論の結語）　中央公論〔第四一年〕　九　三五　日夏耿之介
告白文學と道德的反省　新小說〔二〇〕　九　一一　生田長江
內心獨自小說に就いて（大正十四年）　新潮〔四三〕　三　四　三井光彌
飜譯不可能論（大正五年）　三田文學〔七〕　七　一二　戸川秋骨

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
飜譯文學雜考	早稲田文學	〔・〕		二三三	木村毅
小説界覺書	早稲田文學	〔・〕		二五一	上司小劍
散文藝術の位置	新潮	〔四一〕		三	廣津和郎
再び散文藝術の位置に就いて	新潮	〔四二〕		二	廣津和郎
濫讀者の手帳（三富朽葉詩集や探偵小説に就いて）	新潮	〔二四年上〕		一・二	三上於菟吉
連作長篇小説について	文藝春秋	〔四〕		六	菊池寛
通俗小説の作者に與ふ	新潮	〔四三〕		三	藤森淳三
現代文藝の史的研究とその方法	早稲田文學	〔・〕		二六二	武藤直治
實現せらるべき文壇（現文壇の傾向と批判）	文章世界	〔一五〕		二・三	江間道助
下町的文學の價値（明治三十九年）	文章世界	〔一〕		五	山路愛山
可笑味のなき文學（明治四十年）	中央公論	〔二二〕		九	光風子

3 解説

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
小説について	文藝〔六〕			一	小林鶯里
小説の本領	文陽〔一一〕			一一	長谷川天溪
具體的批評としての小説	太陽〔一一〕			三	長谷川天溪
小説と脚本との違ひ（文話明治四十年）	文章世界〔一一〕			一一・三	坪内逍遙
世界文學の搖籃としての本生文學（古代印度に於ける寓話、お伽噺、小説、稗史、格言の一大寶庫、世界現行の寓話の根源なるジャータカ文學について大正十三年）	現代佛教〔一〕			一	長井眞琴
東西文學の關係について（明治四十一年）	火柱〔一〕			九	畔柳芥舟
支那小説の飜譯飜案	太陽〔一四〕			一	饗庭篁村
合卷式純明治の草双紙	東京新誌〔一〕			三	山崎金男
明治時代合卷物の外觀	早稲田文學〔・〕			二二九	三田村鳶魚
明治以降最初の飜譯小説は何か（大正十四年）	典籍之研究〔・〕			二	大俗中樓主人
西洋文學飜譯の嚆矢（明治四十三年）	太陽〔一六〕			五	新村出
明治初期の英國飜譯小説	東京新誌〔一〕			三・三・四	柳田泉
明治初期飜譯文學年表	東京新誌〔一〕			二・三	石川巖
現代の小説を論じて飜譯文學に及ぶ（明治二十九年）	文庫〔二五〕			一	鳥水

飜譯界の亂調（明治三十八年）　天鼓〔・〕一三　四佐藤芝峰
飜譯、味ひ、名文（文談）　文章世界〔三〕七　四新渡戸稻造
飜譯難（沙翁の和譯二種を比較す。（明治三十九年））　太陽〔一二〕一一　六長谷川天溪
政治文學（明治四十二年）　帝國文學〔一五〕四　一二戸川秋骨
政治小說、其時代的背景　早稻田文學〔・〕二二九　八高須芳次郎
政治文學社會の短評（明治二十九年）　明治評論〔五〕二・一二　一〇同人
新聞小說の變遷（起原「平假名繪入新聞」發達）　早稻田文學〔四〇年〕一六　一〇伊原青々園
明治初期の新聞小說　早稻田文學〔・〕二二九　三五野崎左文
新聞小說の發育期　早稻田文學〔・〕二三二　四半井桃水
新聞小說（明治二十七年）　帝國文學〔一〕一　二編輯者
文藝新聞（新聞批評、小說評（明治三十一年））　文庫〔二九〕三　三立聞生
新聞文學（明治四十一年）　明星〔四一年〕一　四惠美志乃武
新聞懸賞小說と私見（要點を記す（明治四十年））　趣味〔二〕四ノ附　八浩々歌客
新聞小說と余（明治四十一年）　趣味〔三〕四　六須藤南翠
近時の新聞小說（明治四十一年）　趣味〔三〕九　七德田秋聲

新聞小說への意見書（昭和二年）　新潮〔二四年上〕二　一〇今東光
戀愛小說（他の小說との差異及びその功）　太陽〔一〕八　三水谷不倒
吾社會と戀愛小說（明治三十二年）　帝國文學〔六〕一一　三不生
日本の短篇小說（短篇小說過重の餘弊）　新潮〔四二〕二　三加藤朝鳥
何故に長篇の作は出でざる乎（明治三十二年）　太陽〔五〕七　一幸田露伴
短篇小說と長篇小說（明治三十六年）　明治小說文庫〔・〕七　一同人
短文の流行（明治三十七年）　史學界〔六〕一一　一史學界同人
講談本と短篇　東亞の光〔一〕一　三果山
近代的短篇小說（明治四十一年）　帝國文學〔一五〕四　一三厨川白村
短篇小說について　文藝〔五〕一　六文壇諸名家
短篇と長篇との差異　文藝〔五〕一　四花房晃示
短篇と長篇（談叢）　文章世界〔二〕一二　一四江見水蔭、廣津柳浪、柳川春葉、田山花袋
現時の短篇小說（明治三十八年）　天鼓〔・〕一一　二佐藤芝峰
短篇に就いて（東西短篇の時代と作家（明治四十年））　趣味〔二〕一　二西本翠蔭
短篇小說の價値（明治四十年）　中央公論〔二二〕一　五野逸閑人

長篇短篇の差別を論じて（論說（明治四十二年））　新小說〔一四〕　一二　一〇　生田長江
小說界近時の通弊に及ぶ
小品の研究（水野葉舟、吉江孤雁、小川未明、夏目漱石、永井荷風、秋田雨雀、島崎藤村、田山花袋、島村抱月、高濱虛子、森鷗外（明治四十四年））　文章世界〔六〕　一四　二〇　記者
短小なる文學（明治四十五年）　層雲〔二〕　二　七　荻原井泉水
ホトトギス派の小說　文庫〔三五〕　五　一　都鳥
所謂餘裕派小說の價値（明治四十一年）　太陽〔一四〕　四　八　長谷川天溪
有目的小說を論ず（明治三十四年）　明星〔・〕　一〇　二〇　千葉掬香
純內容主義の作物（明治四十年）　中央公論〔二二〕　七　二　磯のや
非寫實小說（明治四十一年）　中央公論〔二三〕　一　四　佐々政一
歷史小說の一材料（歷史小說の好材料　英雄の逸話）　新小說〔・〕　八　五　黑虛心
澁柿園一夕話（小說の歷史について（明治四十一年））　趣味〔三〕　一〇　六　塚原澁柿園
英雄文學（明治四十三年）　帝國文學〔一六〕　六　一一　大町桂月
通俗世界文學と少年世界文學（明治三十五年）　明星〔三〕　四　二　瀧澤秋曉
家庭小說の功能　文庫〔二九〕　一　三　烏水
戰爭と文學（兩者の關係（明治二十八年））　太陽〔一〕　一・二　六・二　坪內雄藏

戰時文藝の衰微（明治二十九年）　文庫〔二五〕　六　五　高須梅溪
戰爭と文學（論評・明治三十八年）　心のはな〔八〕　一　三　長井行
戰爭と文學（講演・明治三十七年）　帝國文學〔一〇〕　一二　一四　三宅雄二郎
所謂戰爭文學を排す（明治三十七年）　明星〔辰年〕　六　三　平出露花
戰後文學（時論、日清戰爭後ス（ゲノ著））　國學院雜誌〔一〕　九　一
戰爭と吾が作物（明治三十八年）　文庫〔三四〕　一　二　松田秀峯
光明小說（明治三十四年）　明星〔・〕　一七　二　平出露花
宗教文學とは何ぞや（論文・明治四十年）　文章世界〔二〕　四　五　佐々木望彥
文章より見たる現代の小說　文章世界〔六〕　一四　二三　記者

4　作品評論

題目及備考　雜誌名　卷數　號數　揭載頁數　作者
明治文學研究と（南翠の「綠笠談」その他に就いて）　讀書人〔一〕　三　二　宮島新三郎
その資料
三人冗語（明治小說合評）　めさまし草〔三・四・五　六・七〕　七・一五・一九　七・一〇　脫天子、登仙坊、鐘禮舍

雪中語（明治小說合評）　めさまし草〔八―三六〕　毎號連載　毎號約四〇頁　露伴、紅葉、鷗外、思軒、村、紅葉、鷗外、思軒、學海、蓋
現代諸家の小說を讀む（雙評）　しがらみ草紙〔・〕　二　一九　森林太郎
歐洲小說哲烈禍福譚の追憶　東京新誌〔一〕　四　二　飯島花月
山房論文（逍遙子の新作四當合評、梅花詞集評、梓神子）　しがらみ草紙〔・〕　二四　二八　森鷗外
「書生氣質」の發行方法　早稻田文學〔・〕　二三三　六　三田村鳶魚
「小說神髓」及「書生氣質」の解題　早稻田文學〔・〕　二三二　二九　神代種亮
西洋小說の讀み始めと書生氣質の材料　早稻田文學〔昭二〕　六月　五　高田早苗
回憶漫談（「書生氣質」「小說神髓」に就いて）　早稻田文學〔・〕　二三三　九　坪內逍遙
「花街膝栗毛」其の他　早稻田文學〔・〕　二三三　一四　生方敏郎
近時出色の小說（矢沼龍溪の「報知異聞」評）（明治二十三年）　日本之文華〔一〕　五　二　甕外生
「夏木立」合評　明星〔三〕　六　四　森しづか、村羊
「あひびき」を讀むで　國民之友〔三〕　三〇　二　石橋思案
藪鶯の細評（明治二十一年）　國民之友〔三〕　二五　五　石橋忍月
藪鶯の細評を讀む（忍月の細評讀後感）　國民之友〔三〕　二七　二　石橋思案
舞姬細評（鷗外漁史の舞姬の評）　しがらみ草紙〔・〕　四　五　山口虎太郎
舞姬を讀みて（鷗外漁史の「舞姬」の評）　しがらみ草紙〔・〕　四　四　諭天怡仙
氣取半之丞に與ふる書（「舞姬」を中心にしての論爭）　しがらみ草紙〔・〕　七　三　相澤謙吉
うたかたの記を讀んで鷗外を罵り不知庵を笑ふ　しがらみ草紙〔・〕　一三　二　澤水島
うたかたの記を讀む（批評）　しがらみ草紙〔・〕　一三　三　松東
うたかたの記を讀みて（批評）　しがらみ草紙〔・〕　一三　二　賽婆須密
讀罪過論（忍月の「罪過」に就いての批評）　しがらみ草紙〔・〕　七　八　鷗外漁史
「うたかた」を讀む（評論）　しがらみ草紙〔・〕　三　三　志田義秀
風流魔に引す（露伴の風流魔に就いて）　しがらみ草紙〔・〕　一七　一　思軒居士
風流魔記　しがらみ草紙〔・〕　一七　二　露伴
風流魔をよみて　しがらみ草紙〔・〕　一七　二　學海老人
「風流佛」其の他と其の時代　早稻田文學〔・〕　二三三　八　千葉龜雄
一葉茶屋「色戲悔」（明治四十一年）　中央公論〔二八〕　二一・三　三四　下山京子
硯友社の「江戸紫」　早稻田文學〔・〕　二五五　六　河井醉茗
綠雨の雨蛙を讀む　明治評論〔五〕　四　六　佐々醒雪
「多情多恨」の柳之助　文章世界〔五〕　三　三　德田秋江

一葉女史のにごりえ　明治評論〔五〕一六　小湘庵主
一葉女史の「にごりえ」　もしほ草紙〔・〕六三　白眼尊者
評釋「たけくらべ」　國語國文の研究〔・〕一五八　鈴木敏也
たけくらべ（評釋）　國語國文の研究〔・〕八・一一三・一五三八　鈴木敏也
二葉亭作「其面影」合評　早稲田文學〔四〇年〕二五一二　秋聲、銀漢子、藪蔓生、糸川子、雨雀、星月夜
「青春」合評（小栗風葉作「青春」の批評）　早稲田文學〔四〇年〕一六一〇　片上天弦、相馬御風、中村星湖、C・M生、島村抱月、玉水生、酔夢、彈琴、白楡
江見水蔭の「女房殺し」　國民之友〔一七〕二六八二　内田魯庵
水蔭の「女房殺し」　明治評論〔五〕二七　田岡小湘庵
似而非惡魔主義（明治初期の毒婦物の考察）　早稲田文學〔・〕二二九一三　本間久雄
「水彩畫家」の主人公　中央公論〔二二〕一〇四　丸山晩霞
風葉の「一本杉」（明治三十一年）　文庫〔二九〕四二　松原至大
金色夜叉（事實と作物につきて）（明治四十二年）　趣味〔四〕三五　大槻孤影
續々金色夜叉を讀む　帝國文學〔九〕七・　里の子
「濱子」を讀む（明治三十五年）　明星〔三〕三三　内山懷天
「さゝにごり」を讀む（明治三十五年）　中央公論〔二二〕三二　野邊道人
小說「白羽箭」短評（明治三十六年）　白百合〔一〕二二　沙雲雀
「惡魔」と「山靈」（國木田獨歩と三島霜川の作）　新著文藝〔一〕一三　白浪生
「雞頭」を讀む　新聲〔一八〕三三
小說「不如歸」の劇的價値（明治三十七年）　白百合〔二〕八六　吉田白甲
事實と作物　ほとゝぎす　趣味〔四〕二六　山口悅雄
「源九郎義經」合評（明治三十五年）　明星〔三〕六五　露花、翠溪、御風
讀稿本石田三成　中央公論〔二三〕一四　松井柏軒
「微溫」の女主人公　趣味〔五〕四四　千曲野
「かこひもの」と「びはうた」（明治三十八年）　明星〔巳年〕六二　山崎紫紅
悲戀悲歌を讀む（評論）　明星〔巳年〕八二　武田木兄
小說「紅塵」批評　明星〔未年〕一一五　深井天川
土に就いて（節の「土」の讀後感）　アラ、ギ〔一九〕四五　正宗白鳥
不刊の書「土」（長塚節の「土」の批評）　新小說〔三〇年〕一二五　小島政二郎
「土」について　アラ、ギ〔一九〕四六　正宗白鳥

「破戒」をよむ（明治三十八年）　白百合〔三〕　七三　のぼ流
「運命」と「破戒」（獨歩の運命、藤村の破戒（明治三十九年））　中央公論〔二一〕　六六　烟霞生
小說「破戒」其他（批評）　明星〔午年〕　五四　與謝野晶子
小說「破戒」を評す（諸家批評集載）　早稻田文學〔三九年〕　五二四　大塚楠緒子、柳田國男、正宗白鳥、中島孤島、小川未明、清田秋江、鳥村抱月
破戒の論（藤村出世作の讀後感）　國語と國文學〔三〕　九二一　湯地孝
田山花袋氏の「蒲團」　明星〔未年〕　一〇五　同人
「蒲團」合評（田山花袋の「蒲團」合評）　早稻田文學〔四〇年〕　二三一七　風葉、秋江、白鳥、葉舟、天弦、星湖、至大、御風、抱月
花袋氏の作品「蒲團」に現はれたる事實　新聲〔一七〕　一〇五　中山蕗峰
新著三種（田山花袋「花袋文話」、谷崎潤一郎「刺青」、徳田秋聲の「微」）　文章世界〔七〕　四一〇　片上伸、小宮豐隆、小野葉舟
花袋氏の「村の人」　文庫〔三六〕　六一　哀鳥
「別れた妻」を書いた時の文學的背景　早稻田文學〔・〕　二五七九　近松秋江
「浦のしほ貝」に見出したる「自然」（國文學研究（明治四十三年））　文章世界〔五〕　一四七　田山花袋
花袋集合評　趣味〔三〕　五八　蒲原有明等、生田長江等
「草枕」評釋　國語教育〔一〇〕　四七一〇二　鈴木敏也

「草枕」評釋　國語教育〔一〇〕　六一〇　鈴木省吾
草枕を讀む　新聲〔一三〕　二三　楚歌生
漱石「草枕」小論（昭和二年）　國語國文の研究〔・〕　七三〇　木枝增一
中村星湖氏の「漂泊」　早稻田文學〔大三年〕　九六　本間久雄
新著四種（相馬御風の「黎明期文學」、正宗白鳥の「白鳥小品」、竹越三叉の「惜春雜話」、二葉亭主人の「二葉亭全集」第三卷）　文章世界〔七〕　一五一五　中澤臨川、本間久雄、千葉龜雄、前田晁
藤村の「春」と芭蕉の俳諧（昭和二年）　潮音〔九〕　一四　大井廣
救ひない人生（「血で描いた畫」をよむ（大正八年））　文章世界〔一四〕　三四　加能作次郎
「世の中へ」の印象（加能氏の創作集「世の中へ」評論（大正八年））　文章世界〔一四〕　四八　岡田三郎
白石實三氏の作品（「姉妹」と「曠野」（大正十年））　早稻田文學〔・〕　一八三六　小島德彌
「人間苦」からの反省（吉田絃二郎作品より）　大觀〔三〕　一四　畑耕一
春雨の「姫小松」　明星〔三〕　一一一　山崎紫紅
「坑夫」の作意と自然派傳奇派の交渉（文談）　文章世界〔三〕　五七　夏目漱石
「それから」をよむ　新小說〔一五〕　三六　小宮豐隆
明暗の二面　青樹〔一〕　六七　山崎敏夫

惡魔の曲（小說）　文章世界〔一一〕　一二　二二　小野美智子
加藤君の「無明」（加藤一夫作品批評）を評す　早稻田文學〔大九〕　一七八　四　原田實
「或る男」に就いて（大正九年）（大正十年）　新潮〔三九〕　五　五　武者小路
土岐善麿氏初夏作品を評す　詩歌〔九〕　二　三　矢代東村　大熊信行
「愛憎」を讀む（大正十年）　新文學〔一六〕　三　二　中村孤月
國島氏の「衰頽時代」その他　新潮〔二四年〕　一〇　八　片岡鐵兵
「不幸な戀人」の印象（小川作品より）　大觀〔三〕　一　四　加藤武雄
「大阪」とその作者（水上瀧太郎の「大阪」について）　三田文學〔一四〕　八　一九　三宅周太郎
大阪の宿を讀む（水上瀧太郎新著の評）　三田文學〔一〕　八　四　三宅周太郎
大阪の宿の裁判所にて（水上瀧太郎新著の評）　三田文學〔一〕　八　二　西脇順三郎
隨筆的心境（水上瀧太郎新著「大阪の宿」評）　三田文學〔一〕　九　二二　勝本清一郎
プロムナアド（大阪の宿、大都、天の魚の評）　三田文學〔一〕　八　一二　井汲清治
プロムナアド（寂しければ、笑の王國、氷る舞踏場）　三田文學〔二〕　二　一二　井汲清治
小島政二郎氏著「新居」評　三田文學〔一〕　七　四　原奎一郎
堅實で克明だが然し　三田文學〔一〕　七　五　井汲清治
小島政二郎氏著「新居」評　三田文學〔一〕　七　七　井汲清治
プロムナアド

久保田萬太郎氏の「寂しければ」を讀みて　三田文學〔二〕　二　二　岡田八千代
傑作「寂しければ」（萬太郎新著評）　三田文學〔二〕　二　四　飛田角一郎
一つの創作（昭和三年）　三田文學〔二〕　八　四　野村兼太郎
青いガス燈（中河與一の「恐ろしき私」について）　三田文學〔二〕　九　六　久野豐彥
「夜鴉」評ならぬ萬太郎論　三田文學〔三〕　二　八　大江良太郎
この作品を見よ（中村能二の「默示」を讀む（大正十四年））　新潮〔四三〕　四　三　木蘇穀
廣、和郎氏作「彩路」合評（國語演習（大正十五年））　國語國文の研究〔一〕　九・一一　一八　木枝增一
志賀直哉氏の「和解」　三田文學〔八〕　一一　七　南部修太郎
下村春花の遺稿白罌粟に就て（昭和二年）　懸葵〔二三〕　二　四　伊藤松洋
「嵐」に於ける和歌俳諧の味（座談）　潮音〔一三〕　一　一四　潮音同人
藤村の近作「嵐」より「分配」へ（昭和三年）　國語國文の研究〔・〕　三〇・二　四八　木枝增一
藤村氏の「嵐」　國文教育〔昭二〕　十一月　六　湯池孝
芥川氏の「河童」について　大調和〔一〕　二　一六　犬養健
「まごころ」の表見（里見弴の「多情佛心」）　新潮〔四一〕　六　五　木蘇穀
「夜ひらく」を讀みて　新潮〔四一〕　四　四　伊東祐大

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
新進諸家の創作を評す	人間	〔三〕	八	七	廣津和郎以下四名
新しき明日を信ずる一個の精神（今野賢三の「闇に闘ゆる」に就いて）	潮	〔四二〕	二	九	武藤直治
「地主」の手記（藤森成吉の「地主」に對する諸問題（大正九年））	新潮	〔三八〕	五	三	武野藤介
「死」（「早稲田文學」に出た堀切茂雄の死ぬ迄の日記をよんで（大正六年））	文章世界	〔一二〕	一二	六	田山花袋

5 文藝時評(一)

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
日本文學批評の發生（昭和三年）	國語と國文學	〔五〕	五四	三五	久松潛一
文藝批評の根本義	東亞の光	〔一〇〕	五	五	半田良平
明治批評史緒論	早稲田文學	〔・〕	二三三	六	本間久雄
近世批評史論	趣味	〔四〕	六	六	太田水穂
今日の評論（評論及評論家の使命）	新小說	〔・〕	八	八	上田敏
俗史文學論（明治二十九年）	文庫	〔二五〕	三	三	久田二葉
ヂンキンス氏がジャバニーステッキストを讀む（明治三十五年）	中央公論	〔二二〕	四	五	佐々醒雪
批評論（明治四十年）	文庫	〔三六〕	三	五	松原至大
鷄冠掻（帝國文學太陽その他の雜誌に載りたる小說又は評論に對する評論）	めさまし草	〔一・二・三 四・五・六〕	・	一三二	歸休菴
國文學の批評について（明治二十三年）	國本	〔・〕	二〇	二	小田清雄
魔書「文壇照魔鏡」について	明星	〔・〕	一二	五	與謝野鐵幹
近代文藝の研究を讀む（明治四十一年）	ホトトギス	〔一二〕	一一	一二	安部能成
批評心	中央學術雜誌	〔二〕	一	二	大西祝
批評家の腐敗	明星	〔・〕	一六	二	木村鷹太郎
出でよ批評家	もしほ草紙	〔・〕	五	一	骨仙瘦
文藝復興と古典研究（論議）	時代思潮	〔二〕	一六	五	笹川種郎
明治十年前後（小說界回顧）	早稲田文學	〔・〕	二二九	六	淡島寒月
明治二十年代の文壇	早稲田文學	〔・〕	二三二	一四	巖谷小波
方内齋主人に答ふ（氏の小說評に對する質疑についての答）	しがらみ草紙	〔・〕	三	六	北邨散士
明治二十二年及二十三年の文壇	早稲田文學	〔・〕	二三二	一二	坪内逍遙
近代文學の弊（實例をあげて近代文學の弊を論ず）	大日本	〔三〕	一一	三	川田鐵彌
小說家の責任（人生說明及び社會批評眞理發揮について）	しがらみ草紙	〔・〕	二	四	北邨散士

二六

二七

明治二十五年前後の文壇　文章世界〔一一〕五・六　一〇　武田鶯塘
文學界の時弊（明治二十六年）　浪華文學〔・〕二　一三　天囚生
新刊小說（明治二十七年）　文庫〔二五〕三　三　高須梅溪
文學上の新事業（文章文學の改良變遷）（明治二十八年）　太陽〔一〕一　五　大西祝
明治の文學界（文士名・明治二十八年）　太陽〔一〕一　三　YR生
文海叢談（二十八年）　國民之友〔八〕一〇六　二　野外堂主人
非閑是非（文壇の不振ならざる事を祈る）（明治二十九年）　文庫〔二七〕五　二　雷光
文壇總まくり（明治二十九年）　文庫〔二七〕四　二　斬虹
文壇屠蘇奇語（明治二十九年）　文庫〔二七〕一　四　△○□生
明治二十九年の文學界（時文）　國學院雜誌〔三〕三　七　編輯同人
世界文藝發展の基礎上下（明治二十九年）　明治評論〔五〕四・五　一〇　畔柳芥舟
明治二十九年の文學界（明治三十年）　明治評論〔六〕二・三　六　時文記者
文壇言（明治三十年）　文庫〔二八〕四　七　小島烏水
明治三十年代の青年文壇（明治文壇に於ける幾多の光景の十三）　文章世界〔七〕一四　九　記者
明治三十年の文藝界概評（思想小說戲曲俳句等に亘りて）　帝國文學〔四〕一　約二五　編輯者

新進作家に告ぐ（明治三十年）　明治評論〔六〕一　四　時文記者
文學界の近況に就きて所感を述ぶ（明治三十一年）　帝國文學〔五〕一　一一　井上哲次郎
文界四方山話（明治三十一年）　文庫〔二九〕三　三　石菖洞
猫鳴鼠語（近代文學界を誡む）（明治三十一年）　文庫〔二九〕四　三　紫劍
小說界の趨勢（明治三十一年）　明治小說文庫〔・〕三編　五　文庫同人
時文（明治三十一年の文界概觀評論）　新小說〔四〕一　二　後藤宙外
明治三十一年文學界雜評（雜報）　帝國文學〔五〕一　三二　編輯同人
懸賞小說家の末路（明治三十一年）　文庫〔二九〕四　二　松原至大
近時の輕文學（明治三十二年）　太陽〔五〕九　一　太陽同人
友人某に與へて昨今の文壇を論ずる書（明治三十二年）　太陽〔五〕一五　八　太陽同人
一國文野の標準（明治三十二年）　太陽〔五〕一五　一　太陽同人
文學美術近時の論壇（明治三十二年）　太陽〔五〕五　七　太陽同人
文壇の近時（明治三十二年）　太陽〔五〕五　一　太陽同人
文藝界時事評論（明治三十二年）　太陽〔五〕三　四　太陽同人
新年の文學（明治三十二年）　太陽〔五〕二　一　太陽同人

昨年の文壇の回顧（明治三十二年）　太陽〔五〕　二　二　太陽同人
月評（うつほの詩海洋文學）（明治三十二年）　文庫〔三〇〕　一　六　松原至大
土井晚翠に與へて當今の文壇を論ずる書（明治三十三年）　太陽〔六〕　二　五　高山林次郎
新春の創作界　外三篇（明治三十三年）　文庫〔三一〕　一　五　月評子
不知菴の小說論をよみて浪六の爲に寃を雪ぐ（三十三年）　國民の友〔一三〕　一九六　三　石橋忍月
今日の小說及び小說家（三十三年）　國民之友〔一三〕　一九五　七　不知菴主人
文明批評家として（本邦文壇の側面評）（明治三十四年）　太陽〔七〕　一　八　高山林次郎
ての文學者
廿世紀劈頭の我文壇（明治三十四年）　太陽〔七〕　二　一　大町桂月
文壇目下の缺點（明治三十四年）　太陽〔七〕　五　二　大町桂月
文壇詩壇（明治三十四年）　文庫〔三二〕　五　四　石取當
諸家と作品（明治三十四年）　文庫〔三二〕　一　七　烏水
文壇外道觀（明治三十四年）　明星〔二〕　六　二　指玉
群雄割居時代—（雜報欄中のもの）（明治三十五年）　帝國文學〔八〕　一二　八　竹風
製作難
吾人の要求と現今の文學界（明治三十五年）　帝國文學〔九〕　一〇　一五　天壇
過去の大阪文壇（明治三十五年）　文藝〔一〕　一　四　梧葉生
文壇褄楊枝（明治三十五年）　文庫〔三三〕　六　二　胡碌石
觀言側語（明治三十五年）（當時の評論）　小舟〔一〕　四　八　未奇庵
回想記（明治三十六年）　文庫〔三四〕　二　二　山野邊浮草
文藝同好會の記（諸文士の文學に關する論（明治三十六年））　文庫〔三四〕　一　五　幹事同人
文藝時評（明治三十六年）　太陽〔九〕　四・五　一八　大町桂月
文藝時評（明治三十六年）　太陽〔九〕　八　八　大町桂月
文藝時評（藝術宗博識病引用病雜遊病大學病）（明治三十六年）　太陽〔九〕　一一　一一　大町桂月
文藝時評（明治三十六年）　太陽〔九〕　一〇　一〇　大町桂月
三十六年の評論界（明治三十六年）　白百合〔一〕　三　六　落々石仙
文壇不振の二原因（明治三十六年）　新著文藝〔一〕　一　五　桐生悠々
近時の地方文壇（明治三十七年）　文庫〔三五〕　三　三　薩摩隼人
明治三十七年文藝時評（明治三十七年）　太陽〔一〇〕　三・四・七・一〇　一二・一三・一四　毎號約二　大町桂月
藝苑偶話（明治三十七年）　文庫〔三五〕　二・三・四・五・六　三五　衰鳥生
後斷文壇人について（明治三十八年）　文藝〔四〕　七　五　高山輝雄
近時の地方文壇（明治三十八年）　文庫〔三六〕　二　二　薩摩隼人

文界雜感（明治三十八年）　明星〔巳年〕　二
新たなる藝術家の態度（明治三十八年）　文庫〔三六〕　四
プロ文壇私觀（明治三十九年）　文藝〔五〕　五
既成文壇へ向けての不滿（明治三十九年）　文藝〔五〕　三
既成文壇の破壞（明治三十九年）　文藝〔五〕　三
既成文壇打破（明治三十九年）　文藝〔五〕　三
職業的文壇の否定（明治三十九年）　文藝〔五〕　三
眞摯ならざる文壇（明治三十九年）　文藝〔五〕　三
本邦文學美術に新意匠の注入を促す（田園文學、美術の高唱（明治三十九年））　國民之友〔一九〕　三一八
過去二十年間の文章の變遷（明治二十年以來）　文章世界〔二〕　七
地方文壇雜感（明治四十年）　文庫〔三八〕　一
四十年の小說界　文庫〔三六〕　二
文藝調の飜譯（明治四十年）　中央公論〔二二〕　四
近代の小說（明治四十年）　中央公論〔二二〕　一一
近時の小說に就いて（明治四十年の小說評論）　太陽〔一三〕　一四
現代我國に於ける藝術界の危機（明治四十年）　太陽〔一三〕　二
明治四十年文藝史（詩壇歌壇俳壇より演劇小說思潮宗教美術地方文壇等の狀況）　詩人〔・〕　八
明治四十年文壇の回顧（談叢）　文章世界〔二〕　一四
文藝と表情（明治四十年）　ムラサキ〔三〕　一
近代文學の鳥瞰景（評論飜譯（明治四十年））　明星〔未年〕　六
四十一年小說界の概觀　新潮〔二〇〕　一
日本文學の中心移動（明治四十一年）　文章世界〔三〕　一四
何故に現代我國の文藝は國民的ならざるか（明治四十一年）　太陽〔一四〕　二
平凡なる小說（明治四十一年）　中央公論〔二三〕　二
近時小說壇の傾向（文藝時評（明治四十一年））　太陽〔一四〕　二
注目すべき近刊小說六種（明治四十一年五月發表）　中央公論〔二三〕　五
文藝上の二問題（生田葵山「都會」の發賣禁止とすべう興行問題に就て（明治四十一年））　中央公論〔二三〕　七
不知庵主の文學の範圍及び定義を異む　城南評論〔・〕　九
日本文學の前途（明治四十二年）　新聲〔二〇〕　四

小栗風葉、長谷川天溪、正宗白鳥、高濱虛子、岩野泡鳴、田山花袋　齋藤信策　七星　川　三輪田元道　戸川秋骨　樗樹生　尾上柴舟　齋藤信策　佐々醒雪　長谷川天溪　樗蔭生　上田萬年　上田萬年

明治四十二年の創作界	新聲〔二〇〕	一一	三	三島霜川
四十二年文壇の回顧	文章世界〔四〕	一六	四〇	内田魯庵、長谷川天溪、蒲原有明、徳田秋江、窪田空穂、片上天弦、小山内薫、後藤宙外、島村抱月、松根東洋城
文壇の趨勢（明治四十二年）	趣味〔四〕	一	四	夏目漱石
文壇に生きんとする努力（明治四十二年）	帝國文學〔一六〕	四	一七	岩城準太郎
文藝批評の抱負（明治四十三年）	新聲〔二〇〕	七	四	川島風骨
四十三年文壇の回顧（明治四十三年）	文章世界〔五〕	一五	一〇	相馬御風
文壇に黨派の要ありや（明治四十三年）	文章世界〔五〕	一	一五	内田魯庵、後藤宙外、山路愛山
四十四年文壇の回顧	新小説〔一七〕	一	一二	宮本和吉
明治四十四年の小説と脚本（二卷の卷末に各卷各前月の發表創作につき批評す）	三田文學〔二〕	・	毎號約二	三田文學同人
現文壇の平面圖（明治四十四年）	文章世界〔六〕	一	三〇	A B C
余の文藝道德教育に關する最近の感想（明治四十四年）	日本雜誌〔一〕	一	三	下田次郎
文藝委員會に對する疑問（明治四十四年）	中央公論〔二六〕	六	三	紅萱生
文藝委員會の眞價如何（明治四十四年）	中央公論〔二六〕	六	二四	白鳥・藤村外十氏
四十四年文壇の記憶	文章世界〔七〕	一	一二	片上伸

5 文藝時評(二)

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
四十四年文界の事實	文章世界〔七〕	一	一四	記	者
最近文壇の記錄（明治四十五年三月中旬より四月中旬まで）	文章世界〔七〕	六	一〇	時評記	者
六月の小説及び戯曲（評論・大正元年）	東亞の光〔七〕	七	五	西澤富則	
七月の文壇（大正元年）	東亞の光〔七〕	八	四	西澤富則	
八月文壇の概觀（大正元年）	東亞の光〔七〕	九	二	西澤富則	
最近文壇の傾向（明治四十五年六月一日發行）	文章世界〔七〕	八	七	山路愛山	
明治四十五年の文壇	文章世界〔七〕	八	一〇	雜誌社同人	
明治四十五年の文壇の記錄	文章世界〔七〕	九	一一	時評記	者
新秋の文壇（大正元年）	東亞の光〔七〕	一〇	三	西澤富則	
十月文壇の印象評	文章世界〔七〕	一五	六	破天郎	
新春の小説及び戯曲（大正二年）	東亞の光〔八〕	二	一〇	東亞の光同人	

一月文壇の概評　文章世界〔八〕　二　六　千葉龜雄
新年の文壇（大正三年の文壇に就て）早稲田文學〔大三〕　九九　二三　加能作次郎
新年の文壇（評論・大正三年）　文章世界〔九〕　二　七　中村星湖
文藝他山の石（批評）　文章世界〔九〕　二　六　德田秋聲
三月の文壇（時評・大正三年）　帝國文學〔二〇〕　四　六　山田檳榔
四月の文壇（時評・大正四年）　帝國文學〔二〇〕　五　八　石坂養平
五月の文藝（時評・大正三年）　帝國文學〔二〇〕　六　三　石坂養平
七月の諸雜誌から（文藝時評・大正三年）　帝國文學〔二〇〕　八　九　石坂養平
八月の文藝（文藝時評・大正三年）　帝國文學〔二〇〕　九　五　大澤貞吉
九月の文壇（評論（大正三年十月一日發行））　文章世界〔九〕　一一　七　本間久雄
十月の創作と評論（文藝批評・大正三年）　帝國文學〔二〇〕　一一　六　大澤貞吉
十月の文藝　文章世界〔九〕　一二　六　石坂養平
十一月の文壇（文藝評論（大正三年十一月））　帝國文學〔二〇〕　一二　五　綾川武治
大正三年文壇概觀　中央公論〔二九〕　一二　三　相馬御風
新年の文藝評論（新年號諸雜誌の中から（大正四年一月））　文章世界〔一〇〕　二　四　三井甲之

三月の文壇（大正四年四月）　文章世界〔一〇〕　四　八　山田檳榔
四月の文壇（文壇近事、諸作家の短評）　文章世界〔一〇〕　五　五　木下杢太郎　柴田勝衛
文壇觀戰記　文章世界〔一〇〕　五　七　生方敏郎
六月の文壇　文章世界〔一〇〕　七　四　本間久雄
最近文藝思潮（七卷一號より每號續けて七月號に至る（大正五年））　三田文學〔七〕　一—七　每號約三　野口米次郎　廣瀨哲士等數氏
十年の回顧　文章世界〔一一〕　七　七　田山花袋
七月の文壇（大正五年一月）　文章世界〔一一〕　八　五　中村孤月
文壇現狀論　文章世界〔一一〕　八　一六　近松秋江、武林無想庵　柴田勝衛、木下杢太郎
創作界の現狀を論ず（小說界の種々相創作界の現狀に對する疑ひ、近頃の創作界（大正六年））　文章世界〔一二〕　七　五　石坂養平、田中純　古野泡鳴
所謂新技巧派觀（時評（大正六年））　文章世界〔一二〕　九　六　西宮藤朝
大正六年文壇の回顧（創作界の一年、傳統主義其他）　文章世界〔一二〕　一二　五　石坂養平　加能作次郎
新年の創作を評す（大正七年）　文章世界〔一三〕　二　一四　豐島與志雄、吉田絃二郎、濱津和郎　本間久雄、西宮藤朝　岩野泡鳴、久米正雄
文壇の印象（ケーベム博士の警告眞愛と戲曲偏輕の文壇（大正七年））　文章世界〔一三〕　三　一〇　田中純、柴田勝衛　加能作次郎
文壇の印象（ヨヤアナリズムの問題、體驗と實感批評問題（大正七年））　文章世界〔一三〕　四　一二

文壇の重心と詩壇の重心（大正七年）　詩歌〔八〕　四七　福士幸次郎
文壇の印象（文章の民主々義問題、新しい時代の作家、二三の作について、大正七年）　文章世界〔一三〕　五一四　加藤一夫、中村孤月、加藤作次郎
近代文學の現實的基礎（附けて、文學の比較研究法の必要（大正七年））　文章世界〔一三〕　一〇八　近松秋江
思潮を離れた創作壇（大正七年）　文章世界〔一三〕　一一六　加藤朝鳥
底力のある作品（大正七年十一月の創作をよんで）　文章世界〔一三〕　一二八　宮島新三郎
近年文壇の印象（大正七年）　文章世界〔一三〕　一二六　前田晃
師走の文壇の印象（大正八年一月）　文章世界〔一四〕　一七　江口渙
死と生の影（新年創作の讀後感）（大正八年）　文章世界〔一四〕　二七　岡田三郎
二月の創作（大正八年三月）　文章世界〔一四〕　三四　濱内廣介
時代の變化と今後の創作（評論・大正八年）　文章世界〔一四〕　六五　中村孤月
改造期と現文壇の歸趨（大正九年）　太陽〔二六〕　一九　宮島新三郎
千篇一律を排したい（文壇新進登用と私意（大正九年））　新潮〔三八〕　一三　伊藤貴麿
文藝評論（諸作家に對する評論（大正九年））　大觀〔二〕　二六　片山伸
劇壇と文壇（大正九年）　人間〔二〕　二一　三宅周太郎

プロレタリヤ女士の邪道（大正九年）　新潮〔三八〕　三四　新居格
人間に還れ　大觀〔二〕　三六　片山伸
此世の意志（正義・正當）　大觀〔二〕　四三　長與善郎
一人の力（一人即多數、多數即一）　大觀〔二〕　四八　片山伸
當來の文藝と社會問題（生活興味を表現する文藝）　大觀〔二〕　四五　片山伸
文藝家と社會問題（廣く考へよ）　大觀〔二〕　四・　片山伸
四月の文壇（大正九年五月）　文章世界〔一五〕　五九　水谷勝
文壇の時勢と距離（大正九年）　文章世界〔一五〕　五五　石坂養平
もつと裸になれ（細田源吉君の「存在」を讀みて）　新潮〔三八〕　三一四　藤森淳三
文壇搖蕩時代（既成文壇の崩壞と新進作家（大正九年））　新潮〔三八〕　五一一　藤森淳三
日佛文壇幕無し記（フランス文壇との比較（大正九年））　新潮〔三八〕　五五　小牧近江
現文壇と祖國精神（大正九年）　懸葵〔一六〕　六三　白石哲二
最近の感想（現代文壇評）　雄辯〔九〕　一一八　廣津和郎
文學社會對一般社會（論・大正九年）　文章世界〔一五〕　一一六　石坂養平
文藝評論界の現狀を論ず（大正九年）　文章世界〔一五〕　一二七　小島德彌

新年の小説（志賀氏の「暗夜行路」その他（大正十年））　早稲田文學〔・〕一八三　五　宮島新三郎
無智な批評の横行（愚劣なる藤森淳三（大正十年））　新潮〔三九〕一　三　芳賀融
最近の批評と創作（大正十年）　新潮〔三九〕二　五　川端康成
專門化を排す（日常生活に伴ふ專門化を排す（大正十年））　大觀〔三〕三　四　田中純
新社會生活のために（魂の自由）　大觀〔三〕三　五　片山伸
文藝精神の社會的浸潤（離れすぎた文藝と社會との近接を論ず）　大觀〔三〕三以下　二　片山伸
もの及び人（人はものにより、ものは人による）　大觀〔三〕三　一　片山伸
一つの連想（ランソンの文學史攻究法より日本議會の言論の樣を改む）　大觀〔三〕三　二　片山伸
最近の文藝批評壇（大正十年度）　早稲田文學〔・〕一九三　五　本間久雄
風俗讀者に代辯して　大觀〔四〕一　一八　土田杏村
我が文壇に與ふる書（大正十一年）　大觀〔四〕一　二〇　土田杏村
風俗讀者に代辯して我が文壇に與ふる書（大正十一年）　大觀〔四〕三　三　山岸光宣
獨逸文壇の將來（日本文學の依る所（大正十一年））　大觀〔・〕三　六　吉江喬松
復興都市と文藝（災害と文藝との關係）　我觀〔・〕四　五　岡見進吾
未墾の日本文壇　我觀〔・〕四　四　江口渙
文藝時評（一プロレタリヤ文學運動に關する私見、二社會問題に對する文人の無理解）　我觀〔・〕四　四　江口渙

現代文學の背景（德川時代より世界主義の勃興に至るまで）　新潮〔四〇〕三　九　平林初之輔
吾は既成文壇を及び前景（既成文壇論、既成文壇觀）　新潮〔四一〕一　一三　横光利一以下八名
如何に見るか　新潮〔四一卷以下〕四—　一七一　尾崎士郎以下六名
文壇展望臺（大正十二年）　新潮〔八〕二・三　一一　小山正
我が文壇の「幽玄」について（幽玄の字義、幽玄文學上の意義に上つたのは、誠幽玄體の特色幽玄派出現の因、幽玄の類（大正十二年））　國語教育〔八〕二・三　一一　小山正
「新しい」「舊い」の問題（大正十三年）　新潮〔四二〕一　一〇　生田長江
文壇の新時代に與ふ　新潮〔四二〕四　一三　生田長江
文壇の現狀を論ず　新潮〔四二〕五　一七　藤森淳三
文藝時評（文學理論の確立、二月の評論、理論鬪爭の淨化（大正十三年））　解放〔六〕三　四　山内房吉
文壇今昔話（一）（二）（文壇ゴシップ式の短い話（大正十三年））　隨筆〔二〕八・一〇　一八　高須芳次郎
新しき文壇を見る（新進作家、通俗小說と非通俗小說（大正十四年））　新潮〔四三〕一　四　伊藤永之介
批評と批評家　新潮〔四三〕二　五　千葉龜雄
一般群衆と文壇的群衆と（大正十五年）　新潮〔四三〕三　一五　生田長江
無風帶の文壇（その現狀と由來と打開）　新潮〔四三〕五　一〇　木蘇穀
最近の文壇に現れた諸傾向（白樺派新思潮派人生派眞心尊重主義等々の考察（大正十四年））　國語と國文學〔一〕九・二—一三　六七　片岡良一

大正十五年の文壇及劇壇に就いて語る　新潮（三四年上）　一一五　諸家
現下文壇の大勢を論ず（大正十五年）　新潮（四四）　二七　堀木克三
最近の長篇小說に就いて（大正十五年）　新潮（四四）　二三　木蘇穀
過去四年（大正十五年）　三田文學（一）　三三　岡田八千代
二つの方面からの文壇改造（大正十五年）　新潮（四四）　一七　生田長江
過去三十年間を振返る（大正十五年）　三田文學（一）　四五　野口米次郎
小說界の現狀を論ず（大正十五年）　新潮（二三年中）　一四　平林初之輔
斷片的な文壇（大正十五年）　新潮（二三年中）　六七　宇野浩二
現文壇に就ての一考察（大正十五年）　東亞の光（二一）　七三　菅貞義
最近文壇の主なる問題四つ　新潮（二三年中）　八八　木蘇穀
今年小說壇回顧（大正十五年）　早稻田文學（一）　二五一　中村星湖
創作合評（後に新潮合評會と改む）（種々の創作に就いて諸氏の對話（大正九年——昭和二年））　新潮（三八年・三四年下）　三五二六　德田秋聲以下七名
現代文學論　新潮（二四年）　一二八　木蘇穀
藝術小說の將來に就いて語る（昭和二年）　新潮（二四年中）　八一九　鶴見祐輔以下十名
新人の觀たる既成文壇及既成作家（昭和二年）　新潮（二四年上）　一三〇　森本巖夫以下九名

最近の文學的散步（近來文學界に擡頭した內容主義論（昭和二年））　國文教育（五）　一三五　衣魚郎
文藝時論　黑潮（三）　二九　青野季吉
我が文壇觀　黑潮（三一）　一六　中村武羅夫
文藝時論（昭和二年）　黑潮（三二）　二二　青野季吉
文藝時評（昭和二年新年雜誌より）　解放（六）　二五　山內房吉
明日の文學　新潮（二四年上）　四四　宇野浩二
讀者としての大衆　新潮（二四年中）　七八　高島素之
文藝變形時評　新潮（二四年中）　六九　佐藤春夫
藤森成吉青野季吉兩氏に答ふ（昭和二年）　三田文學（一）　七七　勝本清一郎
現代文學の系統的批判　新潮（二四年中）　五七　岡澤秀虎
文藝時評　新潮（二四年中）　七・八　七八　藤森成吉
文藝時評（文藝家の生活）　新潮（二四年下）　九七　勝本清一郎
文藝時評（自敎私觀、藝術小說と通俗小說）　新潮（二四年下）　九五　岡田三郎
文藝時評　新潮（二四年）　一〇三　近松秋江
文藝時評　新潮（二四年）　一一三　德田秋聲

一九二七年の文藝評論　新潮〔二四年〕一二　勝本清一郎
昭和二年の小說壇を見る　新潮〔二四年〕一二　八　片岡鐵兵
主として同人雜誌の作品をよみて（昭和三年）　三田文學〔三〕二　七　加宮貴一
新派を語る（昭和三年）　三田文學〔三〕六　五　大江良太郎
現代思想評論家總覽　改造〔八〕四　二三　改造編輯局編

6　小說作法

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	揭載頁數	作者
小說作法	文藝春秋	〔三〕	三	三	伊藤永之介
小說作法十則（昭和二年）	新潮	〔二四年下〕	九	九	芥川龍之介
創作（明治三十一年）	文庫	〔二九〕	三	三	廣津柳浪
遊戲としての創作（明治四十年）	中央公論	〔二二〕	二	五	佐々醒雪
創作上の問題いろ〳〵（大正十五年）	新潮	〔四四〕	四	六	廣津和郎
短篇を書く時の心持と長篇を書く時の心持（明治四十三年）	文章世界	〔五〕	八	六	中村星湖

創作する者の心持（文章新語の六）（大正七年）　文章世界〔一三〕六　七　前田晁
小說の題のつけ方（談叢・明治四十年）　文章世界〔二〕一三　二三　宇野浩二
小說とモデル（大正十四年）　新潮〔四三〕五　五　宇野浩二
多讀多作主義（昭和元年）　ホトヽギス〔三〇〕一三　二　久米幸叢
文學の作品と實際の生活（文學的生活の側面觀）（大正八年）　三田文學〔一〇〕六　一〇　井汲清治
今の小說を讀む（大阪公會堂にて演說せるものの筆記）（明治四十一年）　趣味〔三〕一　二一　坪內雄藏
普通人の爲に
小說家文體評（明治二十三年）　日本之文華〔一〕八・九　三・四　甕外生
小說の文體（島村抱月の文體論紹介）（明治三十九年）　國民之友〔二二〕三〇七　二　同人
自然主義と客觀的態度（小說作法について）　文藝〔六〕三　七　小林鶯里
反自然主義と主觀的態度（小說作法）　文藝〔六〕四　四　小林鶯里
描寫の練習について（談叢・明治四十年）　文章世界〔二〕八　四　幸田露伴
小說に現はれた痴情描寫（大正十四年）　讀書人〔二〕二・　小島德彌

現代小說の描寫法（明治四十四年）	文章世界	〔六〕	三	一七	岩野泡鳴
描寫再論（秋聲「徹」に現はれ描寫に就て）	早稲田文學	〔四五〕	七五	一三	岩野泡鳴
所謂一元的描寫を論ず（岩野泡鳴氏の所謂一元的描寫（大正七年））	文章世界	〔一三〕	一二	七	土田杏村
文學上に於ける風景描寫の大體（大正三年）	東亞の光	〔九〕	九	四	松浦一
象徴と寫生の限界（昭和三年）	潮音	〔一四〕	一一・一二	三・四	太田水穗
寫生文について	ホトトギス	〔九〕	九	五	阪本四方太
寫生文壇	ホトトギス	〔一一・一二〕〔一二・一四〕	五―一二、一―一三 四―一〇、二―六	一一六	寒川鼠骨
經驗について（小說作法）	文藝	〔六〕	六	四	小林鷺里
人間を描かざる小說（明治四十二年）	中央公論	〔一一四〕	八	四	松井柏軒
自己表現（自己統一、自由表現、抵抗力を要す（大正九年））	大觀	〔三〕	二	七	片山伸
小說表現の四階段（大正元年）	文章世界	〔七〕	九	一〇	岩野泡鳴
新發想論（思想即人格、人格即發想）	文章世界	〔六〕	九	四	岩野泡鳴
文藝の創作に關して亦平社同人諸君に御相談	文藝春秋	〔三〕	一二	三	森田草平
勞働嫌惡の作品（勞働嫌惡の作品に對する批判と要求）	新潮	〔三八〕	一	三	新井紀一

7 作家評論（一）

イ、小說神髓以前

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
假名垣魯文（明治文學とその人）	改造	〔九〕	六	八	高須芳次郎
「名聞面赤本」の投吟者（假名垣魯文の作について）	東京新誌	〔一〕	四	一三	野崎左文
明治初期の戲作戲文（假名垣魯文と成島柳北）	早稲田文學	〔・〕	二二九	一〇	山口剛
成島柳北論	早稲田文學	〔・〕	二二九	九	木村毅
宮島春松について（歐洲小說哲烈禍福譯の記者について）	東京新誌	〔一〕	六	四	柳田泉
須藤南翠傳	早稲田文學	〔・〕	二三二	九	須藤眞金
報知異聞に題す（報知異聞「龍溪居士」に對する評）	しがらみ草紙	〔・〕	七	二	鷗外漁史

ロ、坪内逍遙

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
坪内逍遙論	中央公論	〔二七〕	四	二〇	白鳥藤村外七氏
坪内逍遙論（逍遙と明治演劇）	早稲田文學	〔・〕	一三四	一二	楠山正雄
坪内逍遙論	新小説	〔三一〕	六	四〇	鳥居清忠、宮森麻太郎、黒木勘義、伊原青々園
逍遙、四迷、美妙	新小説	〔三一〕	四	四	小島政二郎
逍遙子と鳥有先生（没理想の論について）	しがらみ草紙	〔・〕	三〇	二四	森鷗外
最近の坪内逍遙先生の印象	中央公論	〔三二〕	六	五	中村孤月
逍遙博士への非難	新潮	〔三八〕	二	一二	中島清
春廼屋主人の周圍（坪内逍遙の明治十八年代）	早稲田文學	〔・〕	二三二	一六	矢崎嵯峨の屋

八、二葉亭四迷、山田美妙齋宮崎三昧、石橋忍月

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
二葉亭四迷論（四迷の作品及びその人物）	早稲田文學	〔四三〕	五〇	一六	中村星湖
二葉亭四迷を論ず（自由なる思索家四迷）	早稲田文學	〔四三年〕	四三	四	内田魯菴
二葉亭追考	早稲田文學	〔・〕	二五五	七	堀川柳人
長谷川二葉亭について	趣味	〔四〕	六	二五	逍遙以下四名
露國に赴れたる長谷川二葉亭氏（二葉亭と一雨氏との關係）	趣味	〔三〕	七	一九	小栗風葉等
二葉亭主人の送別會（明治文壇に於ける幾多の光景の二三）	文章世界	〔七〕	一四	八	前田晁
二葉亭氏と獨歩氏（四迷の死後）	文章世界	〔四〕	八	五	吉江孤雁
故二葉亭氏追憶錄	新小説	〔一四〕	六	二三	坪内逍遙、夏目漱石、内田魯庵、太田黒重郎、山田美妙、横山天涯、矢崎嵯峨の屋
二葉亭について	改造	〔一〇〕	一〇	六	正宗白鳥
二葉亭の女性（四迷氏の浮雲、其の面影平凡中の女性考察）	國語と國文學	〔二〕	四	九	久松潛一

二葉亭とロシア文學　國語國文の研究〔一〕10・11・12　三八　金子無絃
山田美妙の侘住居（明治文壇における幾多の光景の二〇）　文章世界〔七〕一四　西村渚山
山田美妙のこと　早稲田文學〔・〕二三三　五　石橋思案
山田美妙評傳　早稲田文學〔・〕二五五　三〇　河井醉茗
逝ける三昧道人（宮崎三昧の傳記、一雨は三昧の子）　帝國文學〔二五〕五　七　宮崎一雨
宮崎三昧氏及その近作　國民之友〔一七〕二六七・一六八　四　八面樓主人
アリストォテレスと忍月居士（忍月居士の罪過說に對する駁）　しがらみ草紙〔・〕一〇　九　山口虎太郎

二、尾崎紅葉、幸田露伴

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
紅葉山人	中央公論	〔二二〕	八	二八	風葉露伴等十氏
紅葉（モミヂについて、ことばの上より）	新小說	〔一一〕	一一	七	前田曙山
尾崎紅葉について	中央公論	〔大一五〕	十一月	・	正宗白鳥
尾崎紅葉	中央公論	〔二二〕	九	四	塚原澁柿園
故尾崎紅葉	白百合	〔一〕	二	一	同人
尾崎紅葉（評傳）	心の花	〔二九〕	一〇	三	安藤直方
尾崎紅葉論（作品に現はれた道德的傾向及紅葉の人物）	早稲田文學	〔四三〕	五〇	一二	楠山正雄
尾崎紅葉とその作物	太陽	〔一八〕	九	八	田山花袋
紅葉訪問記（明治文壇における幾多の光景の三）	文章世界	〔七〕	一四	一一	田山花袋
紅葉先生の門下教授法	文章世界	〔一〕	六	八	小栗風葉
文章家としての尾崎紅葉を憶ふ	早稲田文學	〔・〕	二五九	一一	小倉德彌
紅葉と美妙（紅葉山人と美妙齋を記す）	改造	〔九〕	一一	八	江澤春霞
紅葉と露伴	太陽	〔五〕	一一	二	太陽同人
露伴	明治評論	〔五〕	六	五	田岡小湘庵
近時の露伴子（露伴子の詩眼）	太陽	〔二〕	九	五	荒川漁郎
露伴の近業	太陽	〔七〕	四	二	大町桂月
露伴と透谷	早稲田文學	〔・〕	二二三	四	本間久雄
露伴の作品（明治文壇における幾多の光景の四）	文章世界	〔七〕	一四	三	記者

ホ、齋藤綠雨、森鷗外

題目及び備考	雜誌名	卷數	號數	揭載頁數	作者
正太夫よ（正太夫の肇力を稱す）	しがらみ草紙	〔・〕	三一	四	子藏子
正直正太夫（月旦）	明治評論	〔五〕	五	四	不倒生
齋藤綠雨論	中央公論	〔二二〕	一〇	二〇	孤蝶秋水外七氏
故綠雨（明治文壇の拗ねもの齋藤綠雨について）	文庫	〔二六〕	二	四	不正太夫
齋藤綠雨（評傳）	文章世界	〔一〕	六	八	戸川秋骨
故齋藤綠雨	明星	〔辰年〕	六	五	上田萬年
故齋藤綠雨君	明星	〔辰年〕	六	八	坪內逍遙
齋藤綠雨の珍書簡（自著みだれ箱の廣告文について）	東京新誌	〔一〕	三	六	竹浦樓主人（菅竹浦）
綠雨の戀愛觀（明治文壇における幾多の光景の八）	文章世界	〔七〕	一四	三	記者
森鷗外	明治評論	〔五〕	九	五	田岡嶺雲
鷗外と逍遙	明治評論	〔五〕	一〇	三	田岡嶺雲
柵草紙と壯年の鷗外氏	早稻田文學	〔大五〕	一三二	七	堀江朔

森鷗外論（鷗外の文壇劇壇の功績）	早稻田文學	〔・〕	一三四	一六	島村民藏
森鷗外論	中央公論	〔二四〕	九	一四	藤村、外十一氏
鷗外の性慾小說（明治四十二年）	趣味	〔四〕	八	四	大町桂月
森鷗外氏の史觀	懸葵	〔一四〕	八	二	橋川正
森鷗外先生の思想	明星	〔二〕	三	五	桑木嚴翼
森鷗外氏の文章を評す	文章世界	〔五〕	一五	六	犀兒生
鷗外先生追悼號	三田文學	〔一三〕	八	一五〇	三田文學同人
森林太郎博士（評論）	心の花	〔二六〕	八	四	桑木嚴翼
森博士と心の花（心の花に寄せられた森博士の作品其他の目錄）	心の花	〔二六〕	八	五	佐々木信綱
森博士（評論）	心の花	〔二六〕	八	三	佐々木信綱
森先生を憶ふ（評論）	心の花	〔二六〕	八	二	濱野知三郎
學者としての森博士（評論）	心の花	〔二六〕	八	八	山田孝雄
森博士の追懷	心の花	〔二六〕	八	三	新村出
森鷗外先生（「女」の小感）	アラヽギ	〔一九〕	四—八	二〇	齋藤茂吉
森鷗外先生	アラヽギ	〔一八〕〔一九〕	七・三・四・五・六	一二	齋藤茂吉

国立国会図書館

永井荷風氏に答へて森鷗外の業績に關する我が所見を述ぶ　新潮〔第二五年〕　二八　中村武羅夫

へ、樋口一葉、川上眉山　廣津柳浪、泉鏡花

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
一葉の作品に現れた女性（女史の作品中の女性に就いて詳しく考察す）	國語と國文學	〔二〕	四	一五	湯地孝
樋口一葉に就て（一葉の生立環境）	雄辯	〔四〕	六	三〇	馬場孤蝶
一葉女史日記の後に	心の花	〔一七〕	一	二	幸田露伴
一葉女史と當時の歌壇の回顧（評論）	心の花	〔二六〕	一二	二	佐々木信綱
人間を透觀せる一葉女史	心の花	〔二六〕	一二	五	馬場孤蝶
樋口一葉論（作品に現はれたる人物及人生觀等）	早稲田文學	〔四三〕	五〇	一七	相馬御風
明治時代の閨秀作家（一葉に就いて）	早稲田文學	〔・〕	二三二	一五	馬場孤蝶
故樋口一葉	明星	〔三〕	一一	四	上田敏
一葉女史論	中央公論	〔二二〕	六	一六	桃水紅綠以下七氏

一葉女史の周圍（明治文壇における幾多の光景の一一）	文章世界	〔七〕	一四	六	小野葉舟
樋口一葉（一葉の文學と明治文學）	改造	〔九〕	二	四	露伴道人
一葉の作物と周圍	三田文學	〔二〕	一二	三二	馬場孤蝶
眉山の死（明治文壇における幾多の光景の三四）	文章世界	〔七〕	一四	七	田山花袋
誤まられたる先師川上眉山人	新聲	〔二〇〕	八	六	有本樵水
眉山君と俳諧	卯杖	〔六〕	七	三	巖谷小波
廣津柳浪	新聲	〔八〕	四	五	登坂北嶺
廣津柳浪論（作風、時代、作者の素質等）	早稲田文學	〔大六〕	三六	一二	村山勇三
泉鏡花氏の文章（氏の文章の型リズムと格調とその表現の態度考察）	國語と國文學	〔二〕	八	一六	片岡良一
鏡花君の小說（鏡花君の小說の多趣味を述ぶ）	趣味	〔二〕	九	二	喜多村綠郎
泉鏡花の小說（評論）	新小說	〔一六〕	六	二一	生田長江
泉鏡花論（自然主義運動以前の鏡花）	早稲田文學	〔・〕	一三四	一四	西宮藤朝
鏡花の注文帳（鏡花の注文帳は小說壇に注目すべきものなり）	太陽	〔七〕	五	二	大町桂月
泉鏡花と怪談	文庫	〔二九〕	四	四	時文子
余の見たる鏡花と銀月	文庫	〔三二〕	五	三	山下よしば

ト、小栗風葉、小杉天外、内田不知庵、德富蘆花

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	揭載頁數	作者
小栗風葉論	中央公論	〔二三〕	九	二四	青果外十氏
柳浪、天外、風葉（明治文壇に於ける幾多の光景の一六）	文章世界	〔七〕	一四	三	記者
小杉天外論	中央公論	〔二三〕	七	二〇	花袋外八氏
天外と風葉	新聲	〔一六〕	三	五	新聲同人
內田不知庵	明治評論	〔五〕	四	三	水谷不倒
評家及び作家としての不知庵	太陽	〔五〕	一四	四	太陽同人
德富蘆花氏に關する所感	改造	〔昭二〕	十一月		德富猪一郎外三氏
明治文學史上に於ける蘆花	中央公論	〔昭二〕	十一月		千葉龜雄
德富蘆花論（自然詩人蘆花）	早稻田文學	〔大六〕	一三四	一二	佐野袈裟美
德富蘆花の半農生活（明治文壇に於ける幾多の光景の二一）	文章世界	〔七〕	一四	二	記者
德富蘆花氏の思ひ出	大調和	〔一〕	八	七	賀川豐彥

チ、長塚節、高濱虛子、鈴木三重吉、森田草平

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	揭載頁數	作者
長塚節氏と我々（農民小說との土の藝術）	新小說	〔三〇年〕	一二	四	犬田卯
克明な寫生家（長塚節の寫生文に就て）	新小說	〔三〇年〕	一二	二	高濱虛子
小說に表れたる虛子氏の個性及び意識	ホトトギス	〔一三〕	四	一八	萩原蘿月
鈴木三重吉論	文章世界	〔九〕	三	一三	本間久雄
鈴木三重吉論（盧度の人としての三重吉、憧憬の苦悶の表現）	早稻田文學	〔四五〕	七八	二〇	本間久雄
人としての森田草平氏	新小說	〔一八〕	二	四〇	生田長江
藝術家としての森田草平氏	文章世界	〔一〇〕	五	五	中村孤月

7 作家評論(二)

リ、國木田獨歩

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
獨歩に關するAとB(欺かざるの記に於ける靈魂の成長)	國語と國文學	〔・〕	三九	二三	塩田良平
獨歩の小說	國語と國文學	〔五〕	四六・四七・五五	四〇	湯地孝
國木田獨歩君	聲	〔一九〕	一	二	岩野泡鳴
情に厚かりし獨歩君	聲	〔一九〕	一	四	齋藤弔花
僕の知れる獨歩君	聲	〔一九〕	一	七	草村北星
編輯長としての國木田君	聲	〔一九〕	一	二	山崎林太郎
獨歩君と僕	聲	〔一九〕	一	二	小栗風葉
國木田獨歩	聲	〔一六〕	五	六	新聲合評會
予が知れる獨歩君	聲	〔一九〕	一	四	蒲原有明
國木田獨歩論(獨歩の人生觀に就て)	早稲田文學	〔四三〕	五〇	一九	片上天弦
獨歩君の思出	早稲田文學	〔・〕	二五七	七	平塚篤
獨歩の追憶一二(獨歩との交渉、その他)	早稲田文學	〔・〕	一六三	二	中澤臨川 平塚斷水
煩悶の人としての獨歩(自らを欺かざる人)	早稲田文學	〔・〕	一六三	四	中桐確太郎
獨歩君の思ひ出	早稲田文學	〔・〕	一六三	三	平塚篤
獨歩最後の惱み	早稲田文學	〔・〕	一六三	三	中桐確太郎
茅ケ崎における國木田獨歩(明治文壇に於ける幾多の光景の二二)	文章世界	〔七〕	一四	一四	前田晃
作品と獨歩(獨歩の作品について)	文章世界	〔一二〕	一〇	八	潮青居
獨歩の思ひ出其の他(隨筆)	文章世界	〔一四〕	六	六	田山花袋
國木田獨歩——人、作品(評論)	文章世界	〔一四〕	六	一五	赤木桁平
獨歩論	中央公論	〔二一〕	五	一〇	沼波瓊音
國木田獨歩論	中央公論	〔二三〕	八	一七	青果外八氏
國木田獨歩論(獨歩の小說、人物に就いての意見)	趣味	〔二〕	四	七	白鳥、壽陽子、丁隈、生島、影浚人
獨歩の生涯	趣味	〔三〕	八	八	國木田收二
文學者、余の天職	趣味	〔三〕	八	八	國木田獨歩

獨歩の早稲田時代より（獨歩の傳記）　趣味〔三〕　八　七八　金子馬治外九名
茅ヶ崎時代まで　趣味〔三〕　八　一〇　岡落葉
獨歩の半生　趣味〔三〕　八　八　永田新之丞
少年時代（獨歩の傳記）　趣味〔三〕　八　二四　德富蘆花外六名
國木田獨歩についての諸家の感想　火柱〔一〕　一〇　三　火柱記者
獨歩と透谷　改造〔九〕　五　一七　放庵未醒
獨歩回顧

又、田山花袋、島崎藤村 德田秋聲、正宗白鳥

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
田山花袋論	中央公論	〔二三〕	五	一〇	新聲外四氏
田山花袋氏へ	中央公論	〔三一〕	四	五	中澤臨川
田山花袋論（懸賞論文）	文章世界	〔三〕	一〇	四	橋田濤聲
田山花袋論（花袋論の一端、自然をよく見ない人）	文章世界	〔一二〕	四	一三	正宗白鳥、岩野泡鳴、和辻哲郎
田山德田兩氏について（田山德田兩氏の五十年の誕生に當り）	文章世界	〔一五〕	一一	三	正宗白鳥
田山德田兩氏の生活と藝術の化合（田山德田兩氏の誕生五十年に當り）	文章世界	〔一五〕	一一	四	長谷川天溪
田山德田兩氏について（田山德田兩氏の誕生五十年に際して）	文章世界	〔一五〕	一一	五	中村星湖
田山花袋論（花袋、肉欲、女、自然觀）	早稲田文學	〔・〕	一三四	一一	秦豐吉
無題錄（花袋、水戰、桂月等の小說を論ず）	太陽	〔七〕	八	四	高山林次郎
現代藝術家評論（田山花袋氏）（大正十三年）	隨筆	〔二〕	一一	二	加藤武雄
花袋氏の小說（論說）	新小說	〔一六〕	三	二一	生田長江
田山花袋氏の近業	三田文學	〔八〕	四	一四	小島政二郎
花袋の法身觀	懸葵	〔一四〕	八	四	木村卯之
小說家としての島崎藤村（小主觀の藝術家藤村）	早稲田文學	〔四四〕	六八	一五	岩野泡鳴
島崎藤村論（人情の藝術）	早稲田文學	〔・〕	一三四	一五	森口多里
三つの長篇を書いた頃	早稲田文學	〔・〕	二五七	八	島崎藤村
藤村氏の小說	三田文學	〔一〕	六	二五	生田長江
島崎藤村論	中央公論	〔二三〕	一一	二九	風葉外八氏

島崎藤村氏と長篇物語　中央公論〔四三〕　五　四　吉江喬松
島崎藤村氏の小品　文章世界〔六〕　四　七　水野葉舟
藤村と漱石　新聲〔一六〕　四　五　合評會
島崎先生のこと　人間〔三〕　四　三　久保田万太郎
藤村氏の藝術　人間〔三〕　四　四　有島生馬
島崎さん　人間〔三〕　四　三　木村莊太郎
島崎藤村論（論遂）　新小説〔一六〕　四　一二　小宮豊隆
島崎藤村小論（藤村の諸作と作者の心）　改造〔九〕　四　一一　武藤直治
島崎藤村論　解放〔一〕　二　九　加藤朝鳥
破戒後日譚（事實と作物）（明治四十二年）　趣味〔四〕　四　九　啞峯生
島崎藤村論（藤村の小説に就いて）　趣味〔二〕　五　一〇　孤島、春風、醉夢、夏雄、丁蹊
島崎藤村の一面　隨筆〔二〕　八　一〇　中村星湖
作と人との印象（徳田秋聲とその傑作「何處まで」に就いて）　新潮〔三八〕　一　七　三宅周太郎
徳田秋聲氏と文藝と趣味を語る　新潮〔四三〕　六　一三　新潮社記者
わが文壇生活の三十年　新潮〔三年〔四年〕〕　一—六　五〇　徳田秋聲

人及び藝術家としての徳田秋聲氏　人間〔三〕　一　一三　近松秋江
徳田秋聲論（秋聲の拵へる世界、人間、生活）　早稲田文學〔・〕　一三九　一一　田中純
徳田秋聲氏の近作を評す（「或貴笑婦の話」「脈搏」に就いて）　早稲田文學〔・〕　一八〇　三　宮島新三郎
現代藝術家評論（一）（秋聲翁のことども）（大正十三年）　隨筆〔二〕　一一　二　佐々木味津三
正宗白鳥論（作品に現はれたる白鳥）　早稲田文學〔・〕　一三四　一九　村正勇三
正宗白鳥論　早稲田文學〔・〕　二一八　五　前田河廣一郎
正宗白鳥論　早稲田文學〔・〕　二四八　九　大槻憲二
正宗白鳥論　中央公論〔二四〕　二　一四　秋聲外八氏
正宗白鳥論　新小説〔一六〕　五　一五　本間久雄
作家としての正宗白鳥氏を論ず　新潮〔三四年中〕　八　一七　勝本清一郎
最近の正宗白鳥　新潮〔四一〕　六　一九　田山花袋外五名
正宗白鳥氏と思想と人生觀に就つて　新潮〔四四〕　一　七　新潮記者
正宗白鳥論　文章世界〔八〕　二　九　生田長江
正宗白鳥論（氏の藝術的境地、私の好きな白鳥氏、白鳥氏について、近作をよんで、氏の人生觀）　文章世界〔一二〕　一　一七　赤木桁平、廣津和郎、江馬修、柴田勝衛、近松秋江、

ル、岩野泡鳴、上司小劍、中村星湖

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
泡鳴五部作品論	國語國文の研究	〔・〕	三・三	一六・三	富倉二郎
岩野泡鳴氏の人生觀及び藝術觀を論ず	中央公論	〔二四〕	九	五二	田中喜一
岩野泡鳴論	中央公論	〔四三〕	八	二七	正宗白鳥
岩野泡鳴氏に答ふ（余が象徴主義及び描寫論に就て）	早稲田文學	〔大正元年〕	八二	一二	中村星湖
逝ける岩野泡鳴氏	文章世界	〔一五〕	六	一五	蒲原有明、長谷川天溪、中村星湖、野口米次郎、三井甲之、加能作次郎、中澤靜雄
上司小劍論（人として及び藝術家としての小劍）	早稲田文學	〔・〕	一四四	九	中村星湖
上司小劍論	文章世界	〔一二〕	五	八	岩野泡鳴、谷崎精二、近松秋江、中村星湖
中村星湖論	早稲田文學	〔・〕	二一八	八	戸川貞雄
中村星湖論	文章世界	〔一二〕	六	六	石坂養平、生方敏郎、小川未明

チ、夏目漱石

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
漱石先生の謠日記	能樂	〔一七〕	四	四	山崎樂堂
夏目先生を憶ひて	能樂	〔一五〕	二	二〇	坂元雪鳥
漱石先生の面影	能樂	〔一五〕	一	三	寶生新
漱石の早期作品に見えたる二傾向（虞美人草以前の漱石作品に横はれる傾向）	國語と國文學	〔二〕	七	一八	田村專一郎
漱石の思ひ出（四）	改造	〔一〇〕	一	一三四	夏目鏡子述、松岡讓筆錄
平凡化されたる漱石	改造	〔九〕	六	八	高濱虛子
漱石の思ひ出	改造	〔昭二〕	十月	・	夏目鏡子
漱石の作品についての感想	讀書人	〔一〕	四	二	加藤武雄
現代の文學と夏目漱石	國語教育	〔一〇〕	四	七	堀江與一
夏目漱石論（自然主義傍系の巨魁）	早稲田文學	〔・〕	一三四	一四	加藤朝鳥
僕の昔（先生の略傳）	趣味	〔二〕	二	四	夏目漱石

夏目漱石論（漱石の作品、俳句的小説と漱石）　趣味〔二〕　三　四　中島孤島、嶋陽子、東瀛、羽人
夏目漱石論　太陽〔一三〕　一四　六　大町桂月
漱石先生と門下　太陽〔一三〕　一　七　森田草平
夏目漱石論　中央公論〔一三〕　三　二〇　風葉外十三氏
漱石先生　中央公論〔一三〕　四　七　馬場孤蝶
漱石論　中央公論〔一三〕　四　三　柳川春葉
夏目漱石先生を弔す　中央公論〔三二〕　一　一　瀧田哲太郎
夏目先生と春陽堂と新小説其他　新小説〔一三〕　二　一九　本多嘯月
夏目漱石論　新小説〔一七〕　二　三七　生田長江
漱石の道義觀　讀書人〔一〕　四　三　木村毅
夏目先生を憶ふ（面目を窺ふによい思ひ出話）　帝國文學〔一五〕　二　四〇　浦潮白雨
夏目漱石氏の小品　文章世界〔六〕　一三　七　水野葉舟
漱石と二葉亭　文章世界〔一〕　一　六　正宗白鳥
漱石先生の思ひ出　文章世界〔一二〕　二　一二　森田草平
夏目君の文學論　文章世界〔一二〕　二　三　大塚保治
夏目先生の表現　文章世界〔一二〕　二　六　野上豐一郎
漱石先生の一面　ホトトギス〔一一〕　三　四　白石大
漱石氏と私　ホトトギス〔一〇〕　二—八　九六　高濱虛子
京都であつた漱石氏　ホトトギス〔一一〕　一　一二　虛子
夏目漱石論　ホトトギス〔一七〕　四　二二　赤木桁平

ワ、谷崎潤一郎、佐藤春夫

題目及備考　雜誌名　卷數　號數　揭載頁數　作者
谷崎潤一郎論　中央公論〔三一〕　四　一一　赤木桁平外七氏
谷崎潤一郎氏の作品　三田文學〔二〕　一一　一二　永井荷風
谷崎潤一郎氏（「AとBとの話」に就て）　早稲田文學〔・〕　一九四　一〇　堀江朔
最近の藝術思想　隨筆〔二〕　一一　二　小島政二郎
現代藝術家評論（谷崎潤一郎について）（大正十三年）　改造〔九〕　三　一七　佐藤春夫
潤一郎、人及び藝術　文藝〔五〕　三　二　加美仲野風　菅野德衛
谷崎潤一郎論

谷崎潤一郎論	文章世界〔八〕	三	八	本間久雄	
谷崎潤一郎論（現代作家論の中）	文章世界〔一〇〕	七	六	中村孤月	
谷崎潤一郎氏の藝術	新潮〔二四年〕	六	一二	新居格	
最近の谷崎潤一郎	新潮〔四〇〕	二	二〇	久米正雄外八名	
佐藤春夫の藝術	早稲田文學〔・〕	一九一	一二	堀江朔	
佐藤春夫論	早稲田文學〔・〕	二一八	六	古賀龍視	
佐藤春夫論	文章世界〔一四〕	四	一一	高木桁平	
作と人との印象（書齋の佐藤春夫氏及その作品）	新潮〔三八〕	四	七	赤松月船	
最近の佐藤春夫	新潮〔四〇〕	三	二〇	日夏耿之介外八名	
東西二詩人譜（佐藤春夫とアナストル・ダウスン）	新潮〔四一〕	二	八	渡邊清	
佐藤春夫氏との風流問答	新潮〔四一〕	五	一五	記者	
認識不足の美學（藝術に關する廣津佐藤二君の謬見）者二人	新潮〔四一〕	六	一二	生田長江	
佐藤春夫の歩んだ道	國語國文の研究〔・〕	九・一〇	三七	片岡良一	
田村俊子論	中央公論〔二九〕	八	一七	田村松魚外七名	

7 作家評論(三)

カ、武者小路實篤、有島武郎、里見弴

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
武者小路實篤の事	文藝春秋〔四〕		三	二	小宮山明敏
武者小路實篤論（危い道を歩む氏の作品に就いて）	解放〔三〕		五	七	平林初之輔
武者小路實篤論	文藝〔五〕		三	二	渡邊佐次馬
武者小路實篤研究（人及び作品批評）	新潮〔三九〕		四	一三	渡邊清
武者小路氏と生活と文學を語る	新潮〔四三〕		四	一九	新潮社記者
武者小路實篤論（「幸福者」を中心として）	早稲田文學〔大九〕		一七六	一七	堀江朔
武者小路實篤論	早稲田文學〔・〕		二一八	八	大槻憲二
武者小路實篤君の眞價	文章世界〔一五〕		五	九	江口渙
武者小路實篤論	文章世界〔八〕		五	八	野上臼川

武者小路實篤論（現代作家論の中）　文章世界〔一〇〕　六　四　中村孤月
生田、武者小路兩氏に（反駁）　文章世界〔一一〕　一二　六　廣津和郎
有島武郎論　帝國文學〔二五〕　一〇　七　石坂養平
有島武郎氏を思ふ　新潮〔三九〕　二　六　渡邊清
有島武郎論　文章世界〔一三〕　四　八　江口渙
有島武郎論（作品に現はれる人間的要素）　早稲田文學〔・〕　一五九・一六〇　一二　宮島新三郎
有島君の死について　東亞の光〔一八〕　八　六　吉田熊次
人としての有島武郎　改造〔九〕　八　五　秋田雨雀
最近の里見弴　新潮〔四〇〕　五　二一　菊池寛外八名
里見弴氏の作品（里見氏について「妻を買ふ」「經驗」「流暢なる技巧」「針と神經」）　文章世界〔一二〕　二　五　德田秋聲、岩野泡鳴、上司小劍、兒玉花外
里見弾論　文章世界〔一四〕　七　一三　宮島新三郎
里見弾氏の初期の作品に見られた諸傾向　國語と國文學〔五〕　五一・五二　五五　片岡良一
里見氏と「まごゝろ」　國文教育〔六〕　二　八　片岡良一

ヨ、葛西善藏、志賀直哉、長與善郎

題目及備考　雜誌名　卷數號數　揭載頁數　作者
死の前の葛西善藏　中央公論　四三　九　六　佐々木千之
葛西善藏の思ひ出（主として前期の彼について）　中央公論〔四三〕　九　一〇　廣津和郎
最近の葛西善藏　新潮〔四一〕　五　二三　谷崎精二外六名
葛西善藏との藝術問答　新潮〔四二〕　三　一三　新潮社記者
葛西善藏と「奇蹟」　新潮〔四二〕　一　七　廣津和郎
作家としての葛西善藏の一面　改造〔一〇〕　九　四　廣津和郎
志賀直哉氏の世界（氏の創作家としての活動）　國語と國文學〔二〕　三　一二　片岡良一
志賀直哉論　早稲田文學〔・〕　二二〇　五　武藤直治
志賀直哉氏の作品　文章世界〔一三〕　一一　七　菊池寛
志賀直哉と葛西善藏　中央公論〔四三〕　一〇　一四　正宗白鳥
志賀直哉論（志賀氏の創作心理に對する一面の洞察）　大觀〔四〕　一・二　一二　堀江朔
長與善郎論（評論）　文章世界〔一四〕　四　七　西宮藤朝

タ、永井荷風、久保田萬太郎
水上瀧太郎、小島政二郎

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
永井荷風論	中央公論	〔二四〕	一一	一一	相馬御風外七名
永井荷風先生	新潮	〔四一〕	三	九	小島政二郎
永井荷風論（現代文明に對する憤怒と諦の藝術）	早稲田文學	〔・〕	一三四	一二	本間久雄
永井荷風論	解放	〔一〕	一	・	江口渙
永井荷風の作品（讀後感）	明星	〔三〕	三	六	高倉輝
久保田萬太郎との赤裸々問答	新潮	〔四二〕	五	一二	新潮記者
最近の久保田萬太郎	新潮	〔四〇〕	六	二二	芥川外九名
文人合評（久保田萬太郎）	三田文學	〔六〕	一二	八	荷風荷後
水上瀧太郎氏の近業	三田文學	〔一〕	九	四	久野豐彥
バリトン小島政二郎氏	三田文學	〔一〕	七	九	勝本清一郎
貝殼追放（「含羞」の作者小島政二郎について）	新潮	〔三九〕	四	一四	水上瀧太郎

レ、近松秋江、廣津和郎
宇野浩二、長田幹彥

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
別れた妻をかいた時の文學的背景	早稲田文學	〔昭二〕	六月	・	近松秋江
近松秋江氏の作品（秋江氏作「疑惑」に就て）	早稲田文學	〔大正二年〕	九六	二	正宗白鳥
近松秋江論	早稲田文學	〔・〕	二五三	一八	平井程一
近松秋江論（論說）	文章世界	〔一四〕	九	一六	宇野浩二
最近の近松秋江	新潮	〔四一〕	四	一三	廣津和郎外四名
文學談議（近松秋江氏の近作）	新潮	〔二四年上〕	二	・	宇野浩二
近松秋江氏と政治と藝術を語る	新潮	〔四三〕	二	・	新潮社記者
私は生きて來た（文人として社會に立ち初めた氏の私見）	新潮	〔四一〕	二	九	近松秋江
作と人との印象（冷い頭と溫かな心の廣津和郎氏）	新潮	〔三八〕	五	八	渡邊清
最近の廣津和郎	新潮	〔四一〕	一	一七	武者小路外九名
廣津和郎氏と生活と藝術を語る	新潮	〔四二〕	六	一二	新潮社記者

廣津和郎論（評論）	文章世界〔一四〕	四	七	田中純
作と人との印象（宇野浩二と私）（大正九年）	新潮〔三八〕	二	八	藤森淳三
宇野浩二論	新潮〔三九〕	一	七	藤岡良三
最近の宇野浩二	新潮〔四一〕	二	二三	久米正雄外九名
「私小説」私見	新潮〔四三〕	四	六	宇野浩二
私の小説道（古き文學と生活の友廣津和郎に）	新潮〔二四年〕	一	一二	宇野浩二
長田幹彦論（無性格の人、幹彦氏の人情主義、その創作の態度、幹彦君）	文章世界〔一二〕	三	一二	和辻哲郎、本間久雄、中村孤月、近松秋江

ソ、吉田絃二郎、豐島與志雄、倉田百三、谷崎精二

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	揭載頁數	作者
吉田絃二郎論	早稲田文學〔・〕		二五四	一二	鍵田研一
吉田絃二郎論（評論）	文章世界〔一四〕		四	八	宮島新三郎
吉田絃二郎論	早稲田文學〔・〕		二一八	三	伊藤貴麿
室生犀星論	新潮〔三四年〕		一一	一二	同人
豐島與志雄論（評論）	文章世界〔一四〕		四	六	白石實三
倉田百三論	早稲田文學〔・〕		一九〇	一〇	武藤直治
谷崎精二論（評論）	文章世界〔一四〕		四	七	細田源吾

ツ、芥川龍之介、菊池寛、久米正雄

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	揭載頁數	作者
私と創作（材料及時間・大正六年）	文章世界〔一二〕		七	三	芥川龍之介
龍之介とチェホフ	文章世界〔一四〕		四	六	岡野陽吉
芥川龍之介論	文章世界〔一四〕		四	七	石坂養平
芥川龍之介君の事	文藝春秋〔五〕		一一	一四	島崎藤村
作家としての芥川氏	文藝春秋〔五〕		九	八	片岡鐵兵
芥川龍之介氏の作品（作品の材料を諦視して氏の心持を考ふ）	國語と國文學〔二〕		六	一八	片岡良一
芥川龍之介氏の死	三田文學〔二〕		九	八	水上瀧太郎

芥川龍之介の手紙から　三田文學〔二〕一〇　南部修太郎
芥川龍之介全集の事ども　三田文學〔二〕一〇　小島政二郎
芥川龍之介　改造〔九〕九　一三　恒藤恭
故芥川龍之介氏の事ども　文藝〔五〕九　六　文壇諸氏
芥川龍之介論　早稲田文學・二一八　三　宮島新三郎
芥川龍之介氏の追憶　早稲田文學・二六〇　六　伊藤貴麿
芥川龍之介の美神と宿命　大調和〔一〕六　七　小林秀雄
芥川龍之介氏の自殺について　大調和〔一〕六　七　井上哲次郎
芥川龍之介論　新潮〔三七〕七　一〇　伊福部隆輝
文化の化け物（芥川氏の印象）　新潮〔三九〕二　三　津田光造
最近の芥川龍之介氏、　新潮〔三九〕五　一二　菊池寛外九名
「私」小説論小見（藤澤清造君に）　新潮〔四三〕五　五　芥川龍之介
芥川龍之介の人と作　新潮〔二四年中〕七　一八　室生犀星
芥川龍之介氏と河童　新潮〔二四年下〕九　六　永見德太郎
菊池寛氏の人と作品　國語と國文學〔三〕一一・三　三六　片岡良一

菊池寛論　藝〔五〕三　三　中野駿太郎
菊池寛論　早稲田文學・二一八　三　長谷川清
菊池寛氏について　三田評論〔一二〕九　九　堀木克三
菊池寛氏の一面觀　文章世界〔一四〕三　四　石井誠
菊池寛論　文章世界〔一四〕四　六　相田夢南
菊池前田河兩氏の態度　新潮〔三八〕五　四　本間久雄
最近の菊池寛　新潮〔四〇〕四　一八　津田光造
菊池寛の打ちあけ話　新潮〔四二〕四　九　豐島與志雄外五
自傳　新潮〔四二〕一—六　六九　新潮社記者
久米正雄との一問一答　新潮〔四一〕四　一二　久米正雄
最近の久米正雄　新潮〔四〇〕一　一四　生田長江
小説家としての久米正雄氏　文章世界〔一四〕一　七　里見弴外九名
久米正雄論　文章世界〔一四〕四　五　藤森淳三
正宗、芥川、吉田、菊池　早稲田文學〔・〕一九三　七　柴田勝衛
廣津五氏の作品　伊藤貴麿

ネ、小川未明

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
小川未明論	新小說	〔一八〕	五	一二	本間久雄
小川未明論	文章世界	〔一〇〕	一〇	六	中村孤月
未明楠緒子二家の作物	中央公論	〔二二〕	八	四	磯のや
小川未明論	早稲田文學	〔・〕	二一八	六	新井紀一
小川未明氏の近業（小說集「小年の笛」に就て）	早稲田文學	〔大元〕	八〇	三	本間久雄
小川未明論（未明の作品の傾向）	早稲田文學	〔四五〕	七四	一二	相馬御風
小川未明論（主として童話作家として）	早稲田文學	〔・〕	二四七	九	井東憲

ナ、其他

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
文人合評（樅山庭後）	三田文學	〔六〕	九—二	二三	荷風、廉吉、井川

加藤昌雄のこと	三田文學	〔一〕	八	三	葛目彦一郎
松本泰氏の作品	三田文學	〔四〕	一	一〇	井川滋
相馬泰三論	文章世界	〔一四〕	四	八	藤森成吉
藤森成吉論	早稲田文學	〔・〕	二一八	六	和田傳
藤森成吉論	新潮	〔三四年〕	一一	五	藤森成吉
藤森成吉氏と人生と藝術を語る	新潮	〔四三〕	一	五	新潮記者
宮地嘉六論	新潮	〔三四年〕	一一	四	宮地嘉六
長谷川、加能、藤森、他三氏の作品	早稲田文學	〔・〕	一九三	九	小島德彌
前田河廣一郎論	早稲田文學	〔・〕	二一三	九	小島德彌
驚異　久野豐彦の表現（昭和三年）	三田文學	〔三〕	二	四	藏原伸二郎
葉山嘉樹論	文藝	〔五〕	五	四	中野正人
新居氏の作品とモダンガール	解放	〔五〕	二	六	木村毅
文壇新人論（岡田三郎）	新潮	〔一四年上〕	二・三・四・五・六・七	九・九・八・八・八・七	藤森淳三
瀧井孝作氏の文章に就いて	新潮	〔三九〕	二	三	角田恒
二人の新進作家（十一谷義三郎と伊藤靖）	新潮	〔三九〕	一	五	林正雄

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
最近の牧野信一氏	新潮	〔四一〕	三	一七	水守龜之助外六名
山本鼎と正宗得三郎	中央公論	〔三二〕	一〇	一三	横山健堂
須藤鐘一氏の藝術を論ず	早稲田文學	〔・〕	一九五	八	木村毅
新春創作評（犬養健氏の三作に就て）	新潮	〔三八〕	二	六	川端康成
横光利一論	新潮	〔昭二〕	三月	・	藤森淳三
横光利一の描寫（「無禮な街」の解剖）	新潮	〔四一〕	六	四	堀木克三

ラ、作家一般論

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
明治の戯作者（傳記）	新聲	〔八〕	一・二	五	内田茂文
政界の文學者（西洋及日本の政治と文學者）	太陽	〔六〕	一一	四	鳥谷部春汀
文壇の三偉人	國學院雜誌	〔五〕	一―二	九〇	栗島山之助
明治二十年前後の二文星	早稲田文學	〔・〕	二三二	六	幸田露伴
山房放語	しがらみ草紙	〔・〕	二四	六	森鷗外
山房論文其六附錄	しがらみ草紙	〔・〕	二五	四	森鷗外
山房論文附錄（公衆の批評、一匿名について、正太夫連を難ずるについて）	しがらみ草紙	〔・〕	二八	五	森鷗外
山房論文・自評について（漣山人、正太夫等についての評）	しがらみ草紙	〔・〕	二八	一六	森鷗外
民友社の才人（明治文壇における幾多の光景）	文章世界	〔七〕	一四	六	記者
三田派文士の今昔	明星	〔辰歳〕	二	五	摩天鶴
赤門文士について	新文藝	〔一〕	八	五	大町桂月
赤門派の文士を評す	新文藝	〔一〕	七	一三	久保天隨
新進作家	文庫	〔三二〕	四	三	富永笹舟
我文庫より出でたる作家	文庫	〔二九〕	一	二	鳥水
予の眼に映じたる十四作家の長所	趣味	〔三〕	一二	一〇	小栗風葉
文藝素人漫談（諸作家に對する批評）	新潮	〔四三〕	三	七	高畠素之
當今の女流作家	文章世界	〔五〕	一五	一〇	德田秋江
漱石門下の人々（評論）	文章世界	〔九〕	四・五	二三・七	三井甲之
白樺派の人々	文章世界	〔一〇〕	四	一六	三井甲之
巴里で會つた日本の文學者（島崎、石川、吉江三氏）	新潮	〔三八〕	二	六	小牧近江

明治の大衆文藝作家　文藝〔五〕七　志賀晃泳
現代女流作家及び詩歌人概論　解放〔五〕六　生田花世
「文叢」前期の諸秀才　文章世界〔一一〕七　山田秋生
貝殼追放（諸名作家論）　三田文學〔一六〕一　水上瀧太郎
昔の人の心になりて（古名家を引き その心を察す）　改造〔六〕一　吉田絃二郎
新進作家の人と作との印象　新潮〔四四〕四・五六　芥川龍之介外七名
現代作家論　詩聖〔・〕一〇—一四　土田杏村
文藝家自殺史　新潮〔二四年〕一〇　千葉龜雄
新進作家二十氏を評す　新潮〔四二〕四　木蘇穀
プロ作家凝角個人評　文藝〔五〕五　飛田與太郎
プロレタリア作家と其作品　中央公論〔三八〕七　野村吉哉
プロレタリア作家總評　新潮〔二四年〕一〇　青野季吉
蝸牛角上の爭ひ（プロ文壇作家と作品に就いて）　新潮〔三八〕二　新井紀一
新興文壇の先驅者（戸川、犬養、横光、牧野氏等とその作品）　新潮〔四一〕五　小島德彌
文藝評論壇の諸家（片上伸、吉江孤雁、河邊次郎、柳宗悅諸氏の價値）　解放〔三〕五　千葉龜雄

三、日記隨筆

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	揭載頁數	作者
紀行文の變遷（各紀行文を列擧して批評）	國文學	〔・〕	三〇	八	芳賀矢一
紀行文について	文章世界	〔二〕	七	五	記者
旅行家の見たる紀行文家	文庫	〔三六〕	八	三	某旅行家
机上卓上（隨筆）	文章世界	〔一〇〕	一〇	六	田山花袋
いやとこよ（伊勢旅行の記）	しがらみ草紙	〔・〕	二六	三	堀秀成
いやとこよ（伊勢旅行の記）	しがらみ草紙	〔・〕	二八	五	對山山人
山塾夜話（維新當時の感想）	精華	〔・〕	五一六	六	革堂居士
有渡の濱日記（詩文、旅行日記）	國學院雜誌	〔一〇〕	五	九	武島羽衣
「十千萬堂目錄」と日記雜感	手紙雜誌	〔八〕	一	五	市島春城
奈良土產	精華	〔・〕	一六—一九	一四	中綠亭
藝苑日記（小說脚本文學評論等の日記なり明治三一年九月より）	めざまし草	〔三三—五四〕	毎號連載	毎號約十頁	正直正太夫

私軒君の菅公論を讀む（明治三十四年）明星〔・〕一七　五　明星同人
黄金泥土（原文金の如く譯文泥の如し）精華〔・〕一六　二　清水谷臣
雨窓（死、梅、の感想）精華〔・〕一六　二　安龜龍
日本人の氣宇　精華〔・〕一八　二　關以雄
福備於我の說　精華〔・〕一六　四　中村敬宇
九日紀行　精華〔・〕一八・一九　四　佐々豊水
播磨風土記物語をよむ　心の花〔三一〕一二　二　武田祐一
矢筈の山ふみ（藤原光親卿の跡を尋ねる紀行）やまと叢書〔・〕七　二〇　萩原正平
みちのくの日記（紀行文）やまと叢書〔・〕一五　一二　伊能穎則
東北御巡幸記（路中における木戸、岩倉、高崎氏等の歌より）わかたけ〔一五〕二　五　近藤芳樹
「われから」（批評）（内海月杖の文）明星〔午年〕八　・　茅野蕭々
半生の文章　文章世界〔二〕一一　六　大町桂月
桂月君の菅公論を讀む　明星〔・〕一〇　二　内海月杖
閑窓偶筆（款冬、西游記の作者及び「れ」は何ぞやに就いて論ず）思想〔八〕四二　一一　露伴學人
一瓶の中（瓶花の道を述べ、其の間仙傳抄に及ぶ）思想〔四〕二・三　二七　幸田露伴
閑窓偶筆（連歌、繩あみ、柏梁臺、蘇武と野鼠等に就いて述ぶ）思想〔七〕四〇　二六　幸田露伴
濱木綿　隨筆〔一（改）〕一　四　佐藤春夫
隨筆文學について（大正十三年）國語教育〔九〕五　七　延川直臣

四、詩

1 總記

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
詩學蓬原	わか竹	〔五〕	一・五	九	祇園南海
阿氏詩學	明星	〔七〕	一	七	上田敏
「阿氏詩學」の後に	明星	〔七〕	一	四	竹友藻風
日本詩歌の眞相（雜報中のもの）	帝國文學	〔一〕	四	二	編輯者
純日本詩歌	三田文學	〔六〕	九	二八	野口米次郎
聯詩について	層雲	〔一七〕	四	三	佐藤惣之助
俳諧詩	明星	〔七〕	二	一一	堀口大學
我が國の散文詩	文章世界	〔三〕	九	四	蒲原有明
詩と散文	太陽	〔二〕	一	一〇	大町桂月
詩歌の精神及餘情	國民之友	〔六〕	六九	四	石橋友吉

倭歌、和語詩、賦等の事	わか竹	〔二〕	五	五	木村正辭
戰爭と詩歌	早稲田文學	〔・〕	二五七	六	河井醉茗
我韻文の二傾向（明治四十五年）	わか竹	〔五〕	二	七	青木苫汀
日本韻文の長所及短所	わか竹	〔五〕	一	六	武島羽衣
日本詩の發達せざる原因	新聲	〔一六〕	一	四	蒲原有明
民族詩としての詩歌俳連衡	詩歌時代	〔一〕	三	四	川路柳虹
民族の運命と詩人の夢と	太陽	〔一〇〕	一一	六	姉崎正治
日本詩歌に現はれたる氣分象徴	帝國文學	〔一五〕	一・五・七・八・九・一〇・一一	四一	岡崎義惠
生の象徴と（創作は人間の胸奥にある切實なる欲求から生れ出づ）しての短詩	國語と國文學	〔一〕	二	一一	岩城準太郎
詩歌の分類法について	わか竹	〔三〕	五	九	井淵野人
詩歌―科學的研究（科學の意味を説明し歌學は美學修辭學と共に規範的科學に屬すべし）	國學院雜誌	〔九〕	九・一〇・一二	四三	三浦邦雄
詩歌の道德的効果	わか竹	〔一〕	一	四	有馬祐政
野蠻未開人の歌心	心の花	〔一〇〕	二	一三	坪井正五郎
詩歌と天然	ホトトギス	〔二六〕	四	六	佐藤肋骨
音樂的詩歌と文學的詩歌に就いて	懸葵	〔二二〕	四	四	吉田冬葉

東西の自然詩觀（自然に對する東洋西洋の比較）	早稲田文學〔・〕	一六四	八	厨川白村
日本詩史	聖〔・〕	五號ヨリ連載	每號約一〇頁	河井醉茗
新體詩史	國文教育〔大一五〕	十一月	・	湯地孝
日本詩歌の變遷	文藝春秋〔四〕	一一	七	日夏耿之介
新體詩（新體詩の變遷）	國學院雜誌〔一〕	四	三	
詩壇の推移（明治以後の詩體研究）	短歌雜誌〔三〕	二	五	河井醉茗
日本詩壇發達の經路	早稲田文學〔・〕	二〇〇	一〇	河井醉茗
「新體詩」壇の回顧（文壇回顧の六）	文章世界〔一〇〕	九	四	兒玉花外
新體詩創瓶とその背景	早稲田文學〔・〕	二二九	一二	日夏耿之介
新體詩の初期	文章世界〔二〕	一〇	七	岩野泡鳴
新體詩時代の追憶	心の花〔二六〕	一一	二	川田順
詩の最初より梅花透谷まで	早稲田文學〔・〕	二三二	一二	河井醉茗
詩學勃興時代	淨瑠璃雜誌〔・〕	六四	三	志田對山
西詩飜譯の嚆矢	心の花〔二六〕	九	三	彌富濱雄
日本現代詩史	詩聖〔・〕	一七一八 二一二四	四三	川路柳虹

自然主義的な詩歌の發生	早稲田文學〔昭二〕	六月	・	日夏耿之介
日本近代詩の浪漫運動	中央公論〔三九〕	一	七	日夏耿之介
日本近代詩の象徵思潮	中央公論〔三九〕	四	一四	日夏耿之介
日本輓近詩潮の鳥瞰景	中央公論〔第四〇年〕	五	一一七	日夏耿之介
詩文學系統	帝國文學〔六〕	九	九	畔柳郁太郎

2 詩論

イ、本質論

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	揭載頁數	作者
韻文に就いて	文章世界〔一〕	一	六		山口桐葉
韻文學の生誕	韻文學〔・〕	一	三		池田殘月
詩歌の本質	明星〔・〕	四	六		茅野蕭々
新體詩の本質	國語と國文學〔・〕	三六	五		岡崎義惠

詩歌の骨髓　太陽〔一一〕　一八　大町桂月
散文詩の本質　文章世界〔三〕　一四　河井酔茗
和歌及新體詩論　歌學〔・〕　二・三・四　五・五八　萩野由之
純粋詩論　三田文學〔三〕　五　八　アンリ・ブルモン　中村喜久夫譯
「詩歌の骨髓」とは何ぞや　明星〔巳年〕　二　一一　新詩社同人
詩歌の創造（詩歌の思想、美の觀察）　短歌雜誌〔二〕　六　五　三木露風
詩の爲めの詩　明星〔六〕　三・四　一三・一〇　佐山榮太郎
詩歌の根本疑を解く　明星〔未年〕　七　二　茅野蕭々
日本詩歌の精神と歐洲詩歌との比較　帝國文學〔一〕　三　七　カールアドルフ　フローレンツ
再びフロレンツ先生に答ふ（フロレンツ氏の答に對しての揶揄）　帝國文學〔一〕　九　四　上田萬年
上田文學士に答ふ（上田萬年氏の駁論に答ふ）　帝國文學〔一〕　七　・　カアルフロレンツ
石橋忍月君の示教に對して（醉沈香に就いての意見（韻文としての））　しがらみ草紙〔・〕　四　三　美妙齋主人
韻文論を嘲る（美妙の韻文論を駁す）　しがらみ草紙〔・〕　一四　二　美天狗
答忍月論幽玄書（詩美陶玄の本質につきて）　しがらみ草紙〔・〕　一四　九　鷗外
美天狗氏に（美天狗氏の「韻文論を嘲る」を駁す）　しがらみ草紙〔・〕　一四　三　山田美妙

詩の思想的要求　詩歌〔一〕　二　六　服部嘉香
山房論文（美妙齋が韻文論）　しがらみ草紙〔・〕　二五　一九　森鷗外
「太陽」記者に與ふ（高山樗牛の「詩歌と人體美」の駁論）　新小說〔四〕　六　一四　後藤宙外
歌詩區別並勝劣論　明治歌林〔・〕　五九―六三　一五　横井千秋
文學の基礎的要素としての詩歌　早稲田文學〔・〕　一八四　六　川路柳虹
詩の夢幻味　詩歌〔一〕　一　四　服部嘉香
詩的眞、詩的美（眞善美について）　詩歌〔一〕　四　五　服部嘉香
文海の藻屑（新體詩論俳諧論について）　しがらみ草紙〔・〕　一三　九　蒲臺
詩に於ける理智的要素に就て　詩聖〔・〕　二一二　三　佐藤清
韻文進化論（序論詩想進化、詩形の進化　韻文及音樂、結論に別つ）　帝國文學〔三〕　五六八　一〇・一一　約八五　建部遯吾
時代と詩歌（時代と藝術との關係）　短歌雜誌〔三〕　八　・　福士幸次郎
詩歌の時代意識　詩歌時代〔一〕　三　三　服部嘉香
傳統的詩歌と解放されたる詩歌　詩歌〔七〕　一一　三　百田宗治
詩の位置（詩が他の諸藝術に對して如何なる位置を占むるか）　新潮〔三八〕　二　七　石井誠
詩歌の所緣とその對象（論說）　帝國文學〔五〕　二　二九　高山林次郎

難者に答ふ（詩歌の所縁と其對象に關して）　太陽〔五〕　六　七　高山林次郎

ロ、日本詩歌論

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	揭載頁數	作者
日本韻文論	國民之友	〔七・八〕	九六―九八 100―103 104・107	四五	山田美妙
「日本詩歌論」を評す（大正三年）	帝國文學	〔一一〕	一二	五	山宮允
「日本詩歌論」を評す（大正四年）	三田文學	〔六〕	一二	一五	增野三良
國民詩史論	わか竹	〔七〕	九	五	折口信夫
大和詩のこと	青樹	〔二〕	三・四	一〇	奥島欣人
日本の新體詩を評す（日本人が西洋の文壇に通じてゐない以上に、西洋では日本の文壇に通じてゐない。この評はその一例なり）	文章世界	〔七〕	四	一	ド・バンゼモン
新體詩論（句法、段落）	太陽	〔一〕	八	五	中邨秋香
新體詩論	太陽	〔四〕	一二	二	中邨秋香
我邦の新體詩	太陽	〔五〕	七	二	淺野和三郎
新體詩緊縮論	太陽	〔五〕	二一	一	堺枯川

新體詩論（新體詩の解剖的評論及將來への希望）	帝國文學	〔三〕	一・二	約三七	井上哲次郎
新體詩につきて	新國學	〔二・三〕	・	一一	高橋龍雄
近時の新體詩（論評）	新小說	〔一〇〕	六・七	一二	後藤宙外
新體詩の前途	韻文學	〔・〕	二	六	繁野天來
新體詩管見	心の花	〔八〕	一	五	上田敏
新體詩の將來、軍歌の流行（明治二十八年頃の風潮）	帝國文學	〔一〕	一	四	編輯者
新長詩歌俳の現實的任務	懸葵	〔一六〕	一〇	三	北峰青圃
詩歌改良の方針	國民之友	〔一二〕	一七九・一八二	一九	井上哲次郎
詩歌の將來	太陽	〔五〕	一〇	一	大町桂月
最高にして民衆的なる詩歌について	詩歌	〔八〕	八	四	百田宗治
日本詩人の二大弊（日本詩人の題を限ること、と、意を限ることの弊）	しがらみ草紙	〔・〕	六	二	太田好則
國民的詩人を翹望す	文章世界	〔一三〕	三	六	白鳥省吾

八、作詩內容論

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
詩的述作の對象	帝國文學	〔五〕	三	二二	十時彌
新しい詩の內容と樣式	文章世界	〔五〕	四	四	人見東明
聯想上の詩美	層雲	〔二〕	九	五	井泉水
詩境と詩語	文章世界	〔六〕	六	六	長井金風
三つの詩境	文藝	〔六〕	五	七	大鹿卓
落月（詩境について）	松かさ	〔・〕	二	二	松浦一
作詩の態度（自己即詩歌の論、ロマンチックの問題、情知の問題等を三氏が論したもの）	詩人	〔・〕	六	・	葵村、嘉香、蘆華
自然美に就いて	ホトトギス	〔一〕	九	四	霞城山人
叙景詩とは何ぞや	小柴舟	〔一〕	四	一一	平田露花
隱者的詩人の自然觀	東亞の光	〔一二〕	一〇二	二〇	金子健二
寫生叙景詩について	詩歌	〔八〕	六	三	三井甲之
詩と土の精神	早稻田文學	〔・〕	二四七	七	白鳥省吾
類性と個性（類性と個性の問題解說）	詩人	〔・〕	五	四	森田草平

二、作詩形式論

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
新體詩作法	文庫	〔三六〕	六	一	伯人
新體詩作法	文章世界	〔一〕	七・八	四・四	片岡哲
詩形論	國學院雜誌	〔二〕	七	二	同人
詩歌の形式を論ず	短歌雜誌	〔三〕	四	一二	青山霞村
詩形上の一疑問（新體詩の詩形について）	天鼓	〔・〕	一二	二	佐藤芝峰
忍月が再び我に答ふる書を見て（詩の外形內面論）	しがらみ草紙	〔・〕	一五	四	鷗外
簡潔なる詩形	層雲	〔二〕	三	五	井泉水
日本の詩形を論ず（音律的考察）	帝國文學	〔四〕	五	一二	大町桂月
プロムナアド（詩集五冊より文學種類形式の消長を論ず）	三田文學	〔二〕	四	六	井汲清治
二行詩の試に就て（二行詩の由來、俳句と二行詩との關係）	層雲	〔八〕	四・五	四	荻原井泉水

未來派詩　明星〔二〕　三　二　東郷青兒
定まりたる詩形と定まらざる詩形　ホトヽギス〔二九〕　一　一二　樂雪、淺茅堂、虛子
自殺か短縮か（詩形の短縮と形式破棄）無意味か　早稲田文學〔四一〕　二九　八　相馬御風
日本短詩に於ける五七形式の美的意味（短歌、俳句の音數律について）　國語と國文學〔・〕　三七　一〇　渡邊吉治
散文詩の成立　帝國文學〔五〕　三　一七　淺野和三郎
散文詩の實例的說明　文章世界〔一三〕　四　一二　岩野泡鳴
散文律　明星〔六〕　一　二　矢野峰人
俳體詩論　ホトヽギス〔八〕　一　二　虛子
自由詩の理論と効果（自由詩の無法則的法則）　早稲田文學〔・〕　一四四　八　川路柳虹
口語詩のおこれる所以　文章世界〔三〕　一四　一　櫻井天壇
口語詩の出發點　文庫〔三七〕　五　三　服部嘉香
詩文の格調　韻文學〔・〕　二　四　上田敏
詩の格調　明星〔・〕　一七　二　武田木兒
詩の印象律（氣分と言語のリズム、主觀と言語の意味）　早稲田文學〔四三〕　五三　一五　服部嘉香
詩作の傍より　詩歌〔六〕　八　四　三木露風

請教放語（詩歌の韻について）　しがらみ草紙〔・〕　三　八　幸田露伴
新律格の提唱　日本詩人〔五〕　三　二〇　川路柳虹
詩のリズムを檢して　石楠〔七〕　三　一二　福士幸次郎
新律格三章　明星〔六〕　二　四　川路柳虹
調子本位の詩から　詩歌〔七〕　五　四　萩原朔太郎
リズム本位の詩へ　東亞の光〔一二〕　四　七　小倉博
本邦韻文の韻律について　詩聖〔・〕　一〇　五　佐藤清
言葉と韻律に就いて　青樹〔一〕　九　六　棚橋諄
日本詩脚韻不可能論　文章世界〔一三〕　一二　三　岩野泡鳴
詩の語勢論を駁す　日本之文華〔一〕　二三　五　徒然坊
假名の詩のこと　帝國文學〔二〕　三　二　編輯者
新體詩と雅俗語（雜報欄中にあり）　東亞の光〔一七〕　六　二六　鼓常良
詩の言葉と科學のそれ　火柱〔一〕　九・一〇　六　火柱記者
口語詩と文語詩とに就いて　韻文學〔・〕　一　五　大町桂月
新體詩と日本語　新文藝〔一〕　一　二　荔舟
詩歌音調の研究

詩の描寫　詩歌〔八〕八　土田杏村
詩の吟出、筆力、材料、觀相　文章世界〔三〕一四　一〇　岩野泡鳴
新詩壇の新技巧　詩人〔・〕八　三　生田長江
詩界漫言（新體詩漸縮論その他）　大帝國〔一〕五　六　島村抱月
格調、神韻、性靈の三詩論を論ず　藝文〔二〕七—一〇　一一〇　鈴木虎雄

ホ、詩壇評論

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	揭載頁數	作者
國詩以前の詩壇	詩歌時代	〔一〕	四	九	萩原朔太郎
今世の詩人に望む（主として漢詩について）	しがらみ草紙	〔・〕	六	八	市村瓚次郎
新體詩壇の一異象（明治二十七年）	文庫	〔二五〕	五	二	高須梅溪
詩辨—美妙齋に與ふ（明治二十八年）	國民之友	〔八〕	一〇五・一〇六	三・三	K・U生
新體詩（時文・明治二十九年）	國學院雜誌	〔二〕	一	七	社同人
明治廿八年の新體詩界（雜報欄（明治二十九年））	帝國文學	〔一〕	一	三	編輯者
新體詩壇（議論・明治三十年）	國學院雜誌	〔三〕	六	六	編輯者
新體詩界（新體詩につきての論（明治三十年））	國學院雜誌	〔三〕	五	四	同右
新體詩の沈靜（明治三十一年）	國學院雜誌	〔四〕	一一	二	同右
詩壇の頑迷振（雜報・明治三十二年）	帝國文學	〔五〕	二	三	同右
我が詩壇（明治三十三年）	文庫	〔三一〕	二	三	藪重臣
輓近詩壇の傾向（明治三十四年）	新聲	〔一二〕	二	二	片山天弦
詩界の根本的革新（詩の用語、詩調、形式の制約破壞を主張す）	早稲田文學	〔四一年〕	二八	四	相馬御風
自ら欺ける詩界（新體詩人の形式に捉はれたるを難ず）	早稲田文學	〔四一年〕	二七	六	相馬御風
最近文藝史上に於ける明星諸派の位置	明星	〔・〕	一〇	五	太田水穗
鐵幹に學ぶ（雜報欄中のもの（明治三十四年））	帝國文學	〔七〕	五	二	編輯者
詩文界の病理を論ず（審美學上より（明治三十四年））	帝國文學	〔七〕	七・九　一〇・二	七	畔柳郁太郎
新詩社（明治文壇における幾多の光景の十五）	文章世界	〔七〕	一四	一〇	窪田空穗
情緒主觀の文學（現詩壇に對する情緒主觀の要求）	早稲田文學	〔四〇年〕	二〇	三	島村抱月
詩壇漫言（明治三十六年）	文庫	〔三四〕	一	二	紫藤朗
詩の新時代を作るもの（明治三十六年）	文庫	〔三四〕	二	二	丘山生

詩界の新事實（明治三十六年）	文庫〔三四〕	三	四	北斗星
三十六年の詩界	白百合〔一〕	四・五	九	雛菊
詩界小言	白百合〔一〕	九	二	逸名生
鹿子木孟郎君に與ふる書（明治三十八年）	明星〔巳年〕	二	五	和田英作
三十八年の詩界	白百合〔三〕	四	四	△×生
前田林外君に與ふ	白百合〔三〕	一一	二	野口米次郎
野口米次郎君に答ふ	白百合〔三〕	一一	六	前田林外
野口米次郎君に答ふ	白百合〔三〕	一二	六	相馬御風
プロレタリア詩の領域（明治三十九年）	文藝〔五〕	五	五	小野十三郎
月評戰開始のベル（詩論）	文藝〔五〕	四	五	萩原恭次郎
現代の詩人に與ふ	文藝〔五〕	一一	六	中野駿太郎
胎生期にある日本詩壇	文藝〔五〕	三	三	三枝幸夫
新興詩人に告ぐ（詩論）	文藝〔五〕	四	四	田邊耕一郎
詩壇の風潮について（明治四十年）	新聲〔一八〕	一	三	武藏の守
崩壞過程を辿れる現詩壇の批判と進展性（明治四十年）	文藝〔六〕	五	二	松島國雄

四十年の新詩界	文庫〔三六〕	二	八	記者
新體詩壇瞥見（明治四十一年）	國民之友〔二一〕	三六三	四	桂陵生
詩壇の回想（新體詩・明治四十一年）	文章世界〔二〕	一	八	蒲原有明
現今詩壇談議（明治四十二年）	文章世界〔三〕	一一	四	與謝野寛
四十二年の詩界	聲〔一〇〕	一一	四	兒玉花外
現今の詩と詩風（明治四十三年）	新聲〔一一〕	一	二	蒲原有明
詩壇に對する希望（明治四十三年）	文章世界〔四〕	八	四	相馬御風
新體詩壇の復活を促す（大正三年）	東亞の光〔九〕	三	三	社說
何故文壇は詩歌を重視せざるか（小說萬能の創作壇を難ず）	短歌雜誌〔二〕	一	五	川路柳虹
生きる言葉と生きる詩（「現代詩壇の人々に送る」（大正四年））	詩歌〔五〕	四	三八	福士幸次郎
輓近の詩壇を論ず（大正四年）	文章世界〔一〇〕	七・九・一〇	二三	柳澤健
自由詩社と自由詩の精神（大正六年）	詩歌〔七〕	四	五	加藤介春
現今詩壇に對する私見（大正六年）	文章世界〔一二〕	三	六	福士幸次郎
三木露風一派の詩を追放せよ（大正六年）	文章世界〔一二〕	五	六	萩原朔太郎
詩壇の民主派人道派（大正七年）	文章世界〔一三〕	四	七	川路柳虹

詩壇に對する私の辯明と主張（川路柳虹の「神秘象徴本格」三木露風の「文藝上の批判道德」白鳥省吾の「國民的詩人を翹望す」に對して（大正七年））　文章世界〔一三〕　四　一一　福士幸次郎

大正六年の詩壇（昨年の詩境はいかにも寂しい荒野であつた（大正七年））　文章世界〔一三〕　七　七　西條八十

近時の詩界（大正八年）　帝國文學〔二五〕　一一　六　矢野峰人

新詩壇の勃興（最近詩集の概觀・大正八年）　文章世界〔一四〕　五　六　川路柳虹

新詩壇の覺醒と民主運動（論說・大正八年）　文章世界〔一四〕　六　七　白鳥省吾

現詩壇の否定（新興批評壇への要望（大正九年））　新潮〔三八〕　二　九　伊福部隆輝

若き詩壇の現在未來（大正十年）　新潮〔三九〕　四　七　橋爪健

銅貨の詩人（詩壇より詩壇へ（大正十二年））　新潮〔四一〕　四　・　中山啓

一九二四年の詩壇瞥見　讀書人〔二〕　一　四　三川秀夫

詩壇一年（大正十五年）　早稲田文學〔・〕　二五一　四　川路柳虹

雜へ、

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	揭載頁數	作者
現代の詩（現代詩に對する所感）	詩人	〔・〕	六	三	島村抱月
詩話數則	文友	〔一〕	三	六	與謝野鐵幹
詩の話	新聲	〔二〇〕	四	・	與謝野寛
評論三則（「詩は行爲」「作家と評家と」「二種の暗示」について）	詩歌	〔六〕	二	六	三木露風
根底なき詩論を排す	詩歌	〔七〕	六	三	白鳥省吾
詩の論爭を批判して	詩聖	〔・〕	一六	八	佐藤清
井底獨語（詩歌漫錄）	心花	〔一〕	四・五	八	大町桂月
余の感想（新體の詩歌と外國文學とについて）	明星	〔・〕	一〇	七	厨川白村
詩界雜感	明星	〔・〕	五	一	島村抱月
抒情詩に於ける月（東西の抒情詩にあらはれたる月）	太陽	〔三〕	六	一一	姉崎正治
詩文に現はれた七色及雜色の象徴	東亞の光	〔一五〕	二・三	二六	藤浪由之
哲人と詩人（カント及びバイロンを主にして）	我觀	〔・〕	五	二八	三宅雪嶺

星に關する詩歌　白百合〔三〕　一〇　三　櫻井天壇
アイヌの叙事詩について　東亞の光〔一九〕　三　一四　金田一京助
詩と戀と婦人　明星〔辰年〕　一〇　九　大井蒼梧
桃花詩美論（和漢桃に關する詩、歌、俳句について）　心の花〔一七〕　三　一一　次田潤
新體詩及び朗讀法（萬葉、謠曲文等より新體詩の形に到り遂にその朗讀法に及ぶ）　帝國文學〔二〕　三・四　約三〇　外山正一
新體詩並に朗讀法　東京學士會院雜誌〔一八〕　三　四〇　外山正一
詩と俳句とについて（北原白秋に）　詩聖〔・〕　一四　二一　荻原井泉水
革命と詩人　明治評論〔六〕　三　二　北條愛軒
詩人の生命　中央公論〔二二〕　四　三　峽雨生

3　評釋

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
詩の評釋	文章世界〔五〕	八	一〇	岩野泡鳴	
詩の觀賞上の自我	詩歌〔三〕	三	八	服部嘉香	
新詩月評（明治三十九年）	文庫〔三七〕	一二	四三	中澤水鳥	
詩の啓蒙（最近の詩壇の勞作を評す（大正九年））	新潮〔三八〕	三	・	川路柳虹	
春鳥集講義（蒲原有明の春鳥集について）	文庫〔三〇〕	一	三	針明坊	
解釋「花冠」（上田敏譯詩「花冠」の評釋）	詩人〔・〕	二	三	詩人同人	
註釋「おえふ」	詩人〔・〕	五	四	記者	
解釋「わがゆく海」（薄田泣菫の「わが行く海」の評釋）	詩人〔・〕	六	三	詩人記者	
解釋「薄暮の曲」（ボドレエルの譯詩解）	詩人〔・〕	五	三	詩人記者	
解釋「月のおちぼ」（「月のおちぼ」は蒲原有明の作）	詩人〔・〕	一	三	記者	
有明の象徵詩（評釋と研究）	文章世界〔五〕	一一	六	岩野泡鳴	

4　詩集

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
「少女と蝴蝶」を讀みて（城南評論の大西操山の詩の評）	しがらみ草紙〔・〕	四五	三	春霞生	
「天地有情」を讀みて（明治三十二年）	太陽〔五〕	一四	四	太陽同人	

薄田泣菫の古語詩　文章世界〔六〕七五　岩野泡鳴
「行く春」をよむ　明星〔・〕一八三　武田木兄
「行く春」を讀む　明星〔・〕一八五　山崎紫紅
「行く春」を讀む　明星〔・〕一八一二　羽川隱士
「行く春」を讀む　明星〔・〕一八六　前田林外
「行く春」を讀む　明星〔・〕一八三　蒲原有明
禿筆論評（詩集「まひる野」と史詩「近藤重花」）（明治三十二年）　文庫〔三〇〕一四　紫劍
詩集合評（明治三十三年）　文庫〔三一〕二二　士農工商
「黒百合」を讀む　明星〔二〕五六　内山懷天
日本國歌を讀む　明星〔三〕四三　前田林外
日本國歌を讀む　明星〔三〕四五　前田翠溪
日本國歌を讀む　明星〔三〕四四　瀧澤秋曉
日本國歌を讀む　明星〔三〕四三　山崎紫紅
日本國歌を讀む　明星〔三〕四六　前田林外
「うもれ木」を讀む　明星〔三〕四二　内山懷天
「澄子」を讀む　明星〔三〕六二　内山懷天

「心中お小夜新七」（明治三十五年）叙事詩　明星〔二〕四九　小島烏水
獨絃哀歌を讀みて　明星〔三〕一一四　門外生
獨絃哀歌を讀む　明星〔三〕九三　辰巳
獨絃哀歌を讀む　明星〔三〕九二　大井蒼梧
詩集「日蓮上人」を讀む　明星〔三〕一二四　瀧澤秋曉
詩集「日蓮上人」を讀む　明星〔三〕一二三　山川延峰
詩集「日蓮上人」を讀む　明星〔三〕一二七　吉田伴
詩集「日蓮上人」を讀む　明星〔三〕一二四　武田木兄
「青果集」合評（大正二年）　文庫〔三六〕二五　MMM
青果集を讀む　新聲〔一八〕三二一　編輯同人
青果集を讀む（明治三十六年）　中央公論〔二三〕三六　生田長江
「夕潮」の作者に寄す（明治三十七年）　白百合〔二〕四二　平出露花
「夕潮」をよみて（明治三十七年）　白百合〔二〕五三　御風生
「夕潮」をよむ（明治三十七年）　白百合〔二〕五二　古佛
「夕潮」を讀む（明治三十七年）　白百合〔二〕四三　しこう

「夕潮」をよみて（明治三十七年）　白百合〔二〕　四　蒼狗子
「夕潮」を讀みて（霜川の評）　白百合〔二〕　五　三野尻抱影
藤村詩集前記　書物禮讃〔・〕　一　三　廣瀬南雄
藤村詩集の研究　國語と國文學〔五〕　四三・四六　三八　江口彰次
「微溫」と「藤村集」（明治四十三年）　趣味〔五〕　二　一一　七　蒲原有明
新しき聲（若菜集と抒情詩）　文章世界〔二〕　一一　七　蒲原有明
若葉集の感想斷章　青樹〔三〕　一〇　五　江口彰次
春鳥集を讀む　白百合〔二〕　一一　五　御風生
餘燼（文學評論・明治三十七年）　明星〔辰〕　八　九　山の人
文藝雜俎　明星〔辰〕　八　九　秋冬、籃星梅溪外五名
青海波を讀みて青春詩人に望む（明治三十九年）　文庫〔二九〕　三　三　烏水
「塔影」と「青海波」と（明治三十九年）　文庫〔二九〕　三　四　横瀬虎壽
「塔影」及び「青海波」（明治三十九年）　文庫〔二九〕　三　四　秋曉
「悲戀悲歌」と「塔影」とを讀む（明治三十九年）　文庫〔二九〕　五　四　古佛生
詩集三卷（二十五絃、金帆、悲戀悲歌について（明治三十一年））　文庫〔二九〕　三　・　一　記者

詩集「悲戀悲歌」其他　明星〔巳年〕　七　五　平出修
「花守」の序文について鐵幹氏に答ふ（明治三十八年）　文庫〔三〇〕　五　二　秋曉
近刊詩集合評（「花守」と「まひる野」（明治三十二年））　文庫〔三〇〕　六　四　士、農、工、商
風呂唄（花守を讀む・明治四十年）　文庫〔三〇〕　六　三　伊勢三郎坂東太郎
「天馳使の歌」（批評）（明治三十七年）　明星〔辰年〕　一二　四　指玉
「あこがれ」をよむ　明星〔巳年〕　六　三　辰巳
海堡技師を讀む　明星〔午年〕　二　二　山崎紫紅
連翹を讀む（明治三十八年）　明星〔巳年〕　六　五　森田二十五絃
「夏花少女」を讀む（明治三十七年）　白合〔二〕　七　三　蒼狗子
「夏花少女」を讀み（明治三十七年）　白合〔二〕　五　六　古佛生
て林外君に寄す
「夏花少女」を讀む（明治三十七年）　白合〔二〕　五　一〇　御風生
「夏花少女」を讀みて（明治三十七年）　白合〔二〕　五　五　抱影生
夏花少女」をよむ（明治三十七年）　白合〔二〕　五　五　しこう
「夏花少女」を讀みて（明治三十七年）　白合〔二〕　七　三　木兄子
「戀ごろも」を讀む　明星〔巳年〕　二　八　生田星郊

明星所載「蒲鞭」を讀む　文庫〔三二〕　六　三島なつ
「二十五絃」を讀む　明星〔巳年〕　八　四　蒲原有明
不二山（評論）　明星〔巳年〕　七　一　山崎紫紅
拙作「海潮音」に就て　歌伎〔・〕　九八　四　しぐれ女
「睡蓮」を讀む（明治三十八年）　白百合〔三〕　二　五　乃帆流
「伶人」をよむ（明治三十八年）　白百合〔三〕　八　二　暮鐘子
「花妻」を讀む（明治三十八年）　白百合〔三〕　一一　四　御風生
「花妻」を讀む（明治三十八年）　白百合〔三〕　一〇　三　乃帆流
「千代紙」を讀む　明星〔未年〕　六　二　茅野蕭々
紅塵合評（紅塵を讀みて諸氏の感想）　趣味〔二〕　一一　八　生田長江、吉江孤雁、藤井孤峭、前田木城
「白羊宮」をよむ（明治三十八年）　白百合〔三〕　一〇　三　のぼ流
詩集二卷（白羊宮、孔雀姫）（明治四十一年）　文庫〔三一〕　六　四　高山石秋
鏡塵錄（詩集ささぶえの批評）　文庫〔三四〕　五　四　清白生
「わがおもひ」を評す　文庫〔三四〕　三　三　渡邊光風
詩集「頌榮」を評す　文庫〔三四〕　一　六　同人

「月に立つ影」を讀む　中央公論〔一二〕　一　三　椙除生
「二十八宿」を讀む　詩人〔・〕　一　六　白羊生
日本の小供の歌　白百合〔四〕　三　二二　小泉八雲、大谷繞石、編譯
「斧の人」合評　文庫〔三五〕　五　四　泊人、哀鳥、花生、無果
「凋落」について　文庫〔三五〕　三　二　德田秋聲
日本人の詩文集　文藝春秋〔六〕　一　二　土肥慶藏
「綠髮」小評（大正二年）　文庫〔三六〕　六　二　哀鳥
泣菫の「落葉」　文庫〔三六〕　六　一　泊人
「有明集」合評　文庫〔三六〕　三　八　松原至大（以下四名）
有明集を讀む　新聲〔一八〕　三　二　同人
「雁雲」を讀んで孤綠氏の作物を評す　文庫〔三八〕　三　三　田中落村
最近詩壇の二大收穫（「砂金」及び「流れの秋」を評す）　文章世界〔一四〕　九　一〇　柳澤健
最近詩壇の收穫（「黑衣聖母」と「水の面に書きて」）　早稲田文學〔・〕　一九一　七　竹友藻風
最近詩壇の收穫（「展望」と「愛する者へ」の合評）　早稲田文學〔・〕　一八〇　五　白鳥省吾
野口米次郎氏の「林檎一つ落つ」　詩聖〔・〕　八　一〇　佐々木指月

「散華樂」を讀んで　新潮〔三八〕六　三　西條八十
詩集「火星」を讀んで　新潮〔四一〕一　・　松本淳三

5　詩人

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
當今の新體詩人	文章世界	〔一〕	六	一〇	櫻井天壇
早稲田詩社と詩學社	文庫	〔三四〕	三	三	哀鳥生
明治詩家評論	太陽	〔一〕	四・九	四・四	大江敬香
明星の詩人	太陽	〔七〕	一	二	大町桂月
燒燭雜記（西氏詩論）	明星	〔巳年〕	七	三	大白子
我國將來の詩形と外山博士の新體詩（主として詩形問題に關して）	帝國文學	〔一〕	一〇	一九	林斧太
北村透谷の文章を評す	文章世界	〔六〕	七	六	三島霜川
北村透谷君と私（透谷の人格とその文學）	改造	〔九〕	二	三	戸川秋骨
北村透谷の短き一生（明治文壇における幾多の光景の六）	文章世界	〔七〕	一四	一一	島崎藤村
北村透谷の人と事業とを憶ふ	早稲田文學	〔・〕	二二〇	一一	本間久雄
フユマニスト北村透谷	國文教育	〔昭二〕	十一月	・	齋藤清衛
詩人朽葉	人間	〔四〕	三	二五	增田篤夫
故上田博士（上田敏氏の思ひ出）	三田文學	〔七〕	九	一四	與謝野寛及三田文學同人
明治末期の諸大家（上田敏氏に就て）	新潮	〔第二五年〕	八	三	佐藤春夫
上田敏につき	改造	〔一〇〕	五	一	永井荷風
無名會時代の上田敏君	藝文	〔第一九年〕	一二	五	木戸忠太郎
詩人としての藤村氏	人間	〔三〕	四	六	蒲原有明
最初の國民詩人として（藤村について）	人間	〔三〕	四	二	秋田雨雀
與謝野晶子夫人（生活の藝術化の實行者としての夫人）	解放	〔三〕	五	一三	橋田東聲
堀口大學の藝術	明星	〔一〕	二	六	日夏耿之介
井上通泰子よ（通泰子の詩風を駁す）	しがらみ草紙	〔・〕	一一	四	幸田露伴
我が見たる有明及其詩	新潮	〔一四〕	三	三	蘆谷蘆村
薄田泣菫の詩	明星	〔七〕	一	四	竹友藻風
横瀨夜雨論（明治、大正、昭和に渉る詩人横瀨を論ず）	改造	〔九〕	九	一一	河井酔茗

自然詩人としての河井醉茗氏　詩聖〔・〕一八　八　佐藤清
詩壇の二星（北原白秋、原田ゆづる）　文庫〔二九〕四　三　伊勢三郎
野口氏の詩　三田文學〔一二〕一一　五　西脇順三郎
生活詩化の詩人野口米次郎氏　早稲田文學〔・〕二二三　七　赤松月船
川路柳虹論　詩聖〔・〕一七　一四　橋爪柳虹
三木、荻原氏の氏作態度を論ず（時論）　文章世界〔一二〕九　六　川路柳虹
現代藝術家評論（詩人萩原朔太郎（大正十三年））　隨筆〔二〕一一　二　渡邊清
萩原朔太郎君の詩　三田文學〔八〕五　一〇　野口米次郎

五、和歌

1　總記

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	掲載頁數	作者
短歌の本質に對する考察	短歌雜誌	〔三〕	二	四	松村英一
和歌の精神	歌學	〔・〕	四	四	小中村義象
歌の定義（歌とは如何なるものか、何と定義すべきかを論ず）	國の花	〔・〕	七六	五	彌富賓水
日本固有の一大無形美術（和歌の本源、變遷、風格について）	日本之文華	〔一〕	一五・一六	一三	父水風人
我が和歌觀	わか竹	〔四〕	六	八	三輪田元道
和歌管見	新聲	〔一〇〕	二	三	喬村生
短歌の本質	國語と國文學	〔・〕	三六	二六	坂口保
和歌管見（「和歌のかたち」「和歌に於る誇張」などについて）	心の花	〔一〕	二	六	武島羽衣
和歌に對する感念	心の花	〔二〕	九	四	黑田清綱
和歌に對する私見（論說）	心の花	〔六〕	一一	二二	島田三郎

國歌について　東亞の光〔一二〕一〇　吉田白甲
アストン氏の和歌論　明星〔・〕一—四　梅澤和軒譯
歌　東亞の光〔八〕一　三浦守治
フローレンツ先生の和歌歐詩比較考を讀む（フローレンツ氏論の反駁）　帝國文學〔一〕三　上田萬年
和歌について（論）　わか竹〔二〕九　芳賀矢一
和歌につきて（感想）　心の花〔一〕二　石榑千亦
歌につきて（論說）　心の花〔一〕七　宮地嚴夫
歌の要點　心の花〔二〕八　高崎正風
短歌の區域について　心の花〔三〕四　久良岐
華道三才の型と和歌の三十一文字（論說）　黑潮〔三二〕三　吉澤義則
歌道の特色と音無草　わか竹〔八〕七　佐伯重夫
歌の本質を捉へ得ざりし千年間　文章世界〔六〕一六　窪田空穗
日本文學と和歌　心の花〔一七〕一　芳賀矢一
和歌の田園　歌學〔・〕五　小中村義象
作者述者の辯（詩詠歌文章の古より劣つた理由）　日本大家論集〔二〕三　川田剛

ひとごゝろ（和歌を以て人心を遠す）　國學院雜誌〔一〇〕九　小林靜軒
言靈の佐くる國（國歌の尊重論ともいふべきか）　國の花〔・〕五六—六〇　鳥野幸次
歌の三段階　わか竹〔一〇〕五　武島羽衣
長歌と短歌　わか竹〔二〕二　本居豐穎
和歌の現在と將來　あさみどり〔八〕一　懷山莊主人
和歌の運命を論ず　あさみどり〔八〕八　山脇充夫
國歌衰微論　明治評論〔六〕三　時文記者
しきしまのみち復興　詩歌時代〔一〕二　三井甲之
明治大正短歌研究　水甕〔昭三〕一月・　山崎敏夫
過去を顧みて今に及ぶ（日本の短歌の歷史的變遷）　短歌雜誌〔一〕一　太田水穗
和歌の進化　わか竹〔九〕一　高安月郊
明治和歌史話斷片　改造〔八〕一二　齋藤茂吉
大正短歌史の一節（アラ、ギ派の批評）　潮音〔一四〕一〇　太田水穗
明治の歌日記　わか竹〔三〕二・四　萩の里人
歌の誕生　心の花〔六〕一　芥舟漁郎

明治短歌史論　潮音〔九〕五・七―一一　五二　太田水穂
歌壇の胎動と苦惱（明治歌壇の進化史）　短歌雜誌〔二〕一〇　五　太田水穂
國歌流派の變遷を論ず　歌學〔二〕三―五　七―一〇　一―二　四〇　佐々木信綱
明治の歌　新小說〔三一〕五　六　平野萬里
明治の和歌　わかたけ〔四〕六　四　記者
上苑の西嵐（維新前後の我國と歌道の關係）　わかたけ〔七〕九―一二　一一　佚名生
和歌の略史　わかたけ〔七〕七　三　池袋清風
掌編日本短歌史　青樹〔三〕四　四　三谷草夫
和歌を論ず（漢詩との比較論究）　國民之友〔三〕三〇・三一　三五　一八　森田思軒
近代人よりみらるべき古詩歌の價値　わかたけ〔一〕七　四　尾上柴舟
歌の精　明星〔五〕二　三　竹友藻風
短歌の詩的價値に就て　帝國文學〔七〕二・五　二一　樋口秀雄

2　歌論

イ、詠歌論

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	揭載頁數	作者
詠歌總論	わかたけ	〔一四〕		九―一三	黑川眞道
詠歌論	歌界	〔二五〕		五・六―六	木村正辭
作歌法	文章界	〔一〕		三・四―六	三輪杉
歌よむわざを學生にもどく	精華	〔・〕		八―三	甕臣
詠作態度についての私論	水甕	〔昭三〕		三月―・	金澤種美
作者のために（歌の作者の爲に）	今文	〔二〕		一―二	服部躬治
作歌上の告白	心の花	〔二六〕〔二七〕		四・五―九	川田順
予が作歌の經驗（作歌講話）	短歌雜誌	〔一〕		一―四	半田良平
詠歌の事について（歌道講話）	若むさし	〔一〕		三―九	木村正辭
詠歌について		〔五〕		五・六―五	高崎正風

詠歌論　皇典講究所講演〔一一〕一〇五　一五　木村正辭
作歌の體驗と感想（述者の作歌體驗及びそれに因みし感想）　國語と國文學〔一〕五—七　三四　小山龍之輔
先哲歌訓　わか竹〔五〕五・六　八—一二　一九　武島羽衣
短歌私削（作歌研究）　短歌雜誌〔二〕一　四　北原白秋
六則（歌よむために守るべき六則）　あさみどり〔八〕二—三　六—九　三三　富士谷成壽
洛日靜語（初學の姉妹に與ふ）　心の花〔三〇〕一・二・四　五・七・八　一六　山下陸奥
歌の手引　わか竹〔五〕七　五　黑田清綱閲　熊谷直興稿
歌を學ぶ者は先づ情を養へ　心の花〔一〕二・三　四・五　大口旅師
歌はいかにして研究すべきか　わか竹〔三〕七　九　武島羽衣
短歌講話（初心者のため）　詩歌〔七〕六　二　前田夕暮
歌人は心を清く高く持て　あさみどり〔六〕八　一　木村成蔭
斯くもせば（歌をよむ方法と其の例を擧ぐ）　歌〔二七〕一　四　大町五城
古人の四季の心得（歌よむ人たちの心得）　心の花〔二〕二　四　黑川眞賴
予が歌の方針　あさみどり〔五・六〕九・一二　一三・二　八　堤盛道
短歌入門　アラ、ギ〔一一〕一一—一四　一二　土屋文明
歌を作るに必要なる豫備書　わか竹〔八〕一　四　諸家
歌を詠み初めた人に寄する書（統一した味ひといふことに就き）　短歌雜誌〔二〕一　四　窪田空穗
歌は若々しき完成であれ　文藝〔五〕一一　四　並樹秋人
歌をよむ人へ　歌〔二四〕二　二　記者
初心うたまなび　わか竹〔四〕一〇　五　記者
實驗心理學と作歌と　詩歌〔八〕七　三　三井甲之
作歌添削について　あさみどり〔七〕七　二　琵琶仙史
歌の手ほどき（論講）　わか竹〔三〕三　五　井淵野人
歌の暗合　心の花〔二〕六　二　高崎正風
詩を作り歌はよめ（評論）　國學院雜誌〔一〕一　四　坂正臣
作歌故實　歌〔四〕七　一四　小山田與清
短歌に於ける主觀の表現（同人寄合話）　アラ、ギ〔一二〕四　・　茂吉、迢空、赤彦
短歌と感動扶殖の方法（論說）　心の花〔三〇〕七　五　齋藤瀏
歌を識ると云ふ事について　あさみどり〔九〕三・四・五　七・九・一二　一八　青木清高
素材と表現　詩歌〔九〕三　五　前田夕暮

歌を產む心を見つめて表現に及ぶ（生命活動の中に強調されて居る要素の指示）　國語と國文學〔一〕　四　二七　小山龍之輔
和歌と構想と　あさみどり〔九〕　二　四　山脇充夫
歌境の撰擇　アラ、ギ〔一五〕　四　二　土田耕平
短歌に現はれる感動　アラ、ギ〔一七〕　四　二　竹尾忠吉
和歌の進境　心の花〔一〕　三　四　武島羽衣
自分の歌の境地　文化生活の基礎〔四〕　二　四　木下利玄
歌境と歌材　わか竹〔一三〕　五　六　福井久藏
深い感情の表現について（作歌に於る沈潛といふこと）　詩歌時代〔一〕　一　四　橋田東聲
歌の進化　歌學〔・〕　五・六・七　一七　青木清高
短歌の內容と技巧　短歌雜誌〔一〕　二　五　和辻哲郎
歌の標準　わか竹〔一・二〕　七・八・二・三・四　三二　武島羽衣
歌にあらはすべき感情（論說）　心の花〔五〕　三　三　武島羽衣
和歌の想を論ず（論說）　國學院雜誌〔七〕　八九　二一　渡邊文雄
短歌の趣向（論說）　心の花〔三二〕　二　三　齋藤瀏
ましら玉　わか竹〔八〕　九　二　跡見花蹊

叙景歌に關する一考察（論說）　心の花〔二九〕　五　三　齋藤瀏
背後の世界と寫生の歌　潮音〔七〕　二　一　太田水穗
歌壇に誤られたる子規の寫生觀　青樹〔二〕　六　八　日比修平
短歌に於ける寫生　アラ、ギ〔九〕　二　七　土屋文明
緣起論に依る寫生の意義　アラ、ギ〔一一〕　七　三　河西青五
寫生の意義につきて　アラ、ギ〔一一〕　六　三　河西青五
歌の題目　心の花〔二〕　三　二　武島羽衣
歌の想像　心の花〔二〕　一　二　武島羽衣
短歌思想の一端　明星〔三〕　一一　二　根本三紅
齊東野人の語（歌の表現態度につき）　わか竹〔七〕　四　六　塚本浦の人
短歌に於る人事と自然（同人寄合語）　アラ、ギ〔一二〕　九　九　茂吉、迢空、耕平、達三、赤彥
短歌の範圍（同人寄合語）　アラ、ギ〔一二〕　一〇　四　齋藤茂吉、釋迢空
短歌の取材範圍　アラ、ギ〔一五〕　七　二　土田耕平
我國の古歌は花鳥風月を吟詠したる者に非ず（論說）　日本主義〔五〕　二八　三　芳賀矢一
歌の種　わか竹〔一三〕　七　四　羽生永明

短歌に含まれたる藝術味　文章世界〔八〕四　六記者
技巧に就きて（同人寄合語）　アラヽギ〔一二〕八　四耕平、達三、赤彦
歌の用語　明星〔五〕一　二竹友藻風
漢詩和歌の將來如何　歌學〔・〕一—三　三三井上哲次郎
井上哲次郎の漢詩和歌論を駁す（論議）　城南評論〔・〕一　三高良山人

ロ、形式論

題目及備考	雜誌名	卷數	號數	揭載頁數	作者
短歌の原始形について	新小說	〔三〇〕	七	五	板橋倫行
三體和歌	歌學	〔二〕	二	三	同人
歌の形式につきて		〔二三〕	一〇・二	六	下田歌子
朦朧體	心の花	〔一〕	四	九	下田義天類
歌の活用（唱和の歌を主唱す）	國文學	〔・〕	七八	六	大口鯛二
短歌形式の成立	詩歌	〔九〕	四	八	阪口保
歌體	あさみどり	〔六〕	一一	四	小中正弘
字あまりの歌	わかたけ	〔六〕	五	三	大口鯛二
歌の內容と形式	わかたけ	〔一三〕	六	八	福井久藏
短歌發展の容式（短歌の意義、發展の意義、發展の容式、古今の開發的發展、新古今の綜合的發展）	藝文	〔第二年〕	一	一七	小笠原秀實
短歌に適應したる體といふ事について（論說）	心の花	〔六〕	二	三	森田義郎
歌句歌體の說	しがらみ草紙	〔・〕	二四	二	海石榴舍
短歌は六句の說	しがらみ草紙	〔・〕	三	二	海石榴舍
和歌の十體	わかたけ	〔二〕	五	五	大町五城
短歌の形式を論ず	明星	〔三〕	一—三	一六	竹友藻風
短歌の構想につきて	わかたけ	〔五〕	八	五	大口鯛二
短歌形における象徵	わかたけ	〔三〕	七	七	花輪卽義
尺土漫筆（短歌三行形式に就て）	短歌雜誌	〔二〕	一〇	四	西村陽吉
五七、七五比較論	歌學	〔・〕	一〇	六	岸本宗道
歌の聲調につきて（主として、桂園翁の歌體につきて）	しがらみ草紙	〔・〕	三六	二	皆無齋主人

詩歌に於ける擬聲音に就いて　詩歌〔九〕　三　松村又一
破調について　詩歌〔三〕　一〇　細谷明
歌のしらべの事　あさみどり〔六・七〕　一二・二　海野遊翁
國歌の韻　わか竹〔一四〕　一二　佐藤誠實
調子の研究　わか竹〔一一〕　六　武島又次郎
想と調　わか竹〔八〕　九　下村千別
しらべの說　心の花〔二〕　一〇　林陸夫
しらべのせつ（歌は理るものにあらずして、調ぶるものなり）　心の花〔一〕　九　林陸夫
歌のしらべの事　韻林〔一〕　二　海野遊翁
國歌の韻　韻學〔・〕　六・七　佐藤誠實
歌の妙用は調にありといふことのあかしぶみ　わか竹〔一〕　八　鎌田正夫
詩歌に於ける音意の諧調　明治評論〔五〕　六　武島羽衣
歌と調　心の花〔三〕　七　福地櫻痴
歌の調子　わか竹〔二〕　三　武島又次郎
歌の律格　わか竹〔三〕　四　井淵野人
皆無齋主人が歌の聲調につきてと云へる說をよみて　〔・〕　四〇　五　翠松園主人
歌の澄濁について　竹〔三〕　一〇　六　大槻文彥
歌の妙用は調にありといふことのあかしぶみ　心の花〔二〕　五　四　八杉貞利
和歌と語法　心の花〔二〕　一二　二　松野利敎
歌言葉について　あさみどり〔・〕　一二七　久松潛一、齋藤瀏、山下陸奥、山上和三、石樽茂、栗原潔子、前川佐美雄
歌語の筐　心の花〔三〇〕　一二　七　現代著名歌人
短歌と叙事（諸說集）　短歌雜誌〔四〕　一　三二
現代歌人比較作法集　心の花〔一〇〕　二　四　小杉榲邨
作文には昔も習慣語をつかひし事について　詩歌〔三〕　一一　三　服部嘉香
譬喩と官能描寫　あさみどり〔八〕　九　四　山脇充夫
和歌と修辭と　短歌雜誌〔二〕　九　三　三井甲之
今日に於て（短歌の用語問題）　短歌雜誌〔二〕　九　四　窪田空穗
如何なる古語も現代語（短歌の用語問題）　短歌雜誌〔二〕　九　四　竹尾忠吉
短歌と言葉　アラヽギ〔一六〕　三　四　竹尾忠吉
短歌と現代口語（短歌の用語問題）　短歌雜誌〔二〕　九　五　青山霞村
しがらみ草紙〔・〕　四〇　五　翠松園主人
青樹〔二〕　三　・　竹中皆二
心の花〔二〕　三　五　八田知紀翁遺稿
わか竹〔三〕　一〇　六　大槻文彥
心の花〔二〕　五　四　八杉貞利
あさみどり〔・〕　一二七　二　松野利敎
心の花〔三〇〕　一二　七　久松潛一、齋藤瀏、山下陸奥、山上和三、石樽茂、栗原潔子、前川佐美雄
短歌雜誌〔四〕　一　三二　現代著名歌人
心の花〔一〇〕　二　四　小杉榲邨
詩歌〔三〕　一一　三　服部嘉香
あさみどり〔八〕　九　四　山脇充夫
短歌雜誌〔二〕　九　三　三井甲之
短歌雜誌〔二〕　九　四　窪田空穗
アラヽギ〔一六〕　三　四　竹尾忠吉
短歌雜誌〔二〕　九　五　青山霞村

決定的に言ふを排す（短歌の用語問題）　短歌雜誌〔二〕　九　二　尾山篤二郎
短歌用語問題雜話（短歌の用語問題）　短歌雜誌〔二〕　九　四　松村英二
傳統的の力と現代の欲求との交渉（短歌の用語問題）　短歌雜誌〔二〕　九　二　土岐哀果
現代語の主張（短歌の用語問題）　短歌雜誌〔二〕　九　七　西村陽吉
和歌の用語に就て（短歌の用語問題）　短歌雜誌〔二〕　九　一一　芳賀矢一
江東歌話（萬葉語を現代に活かし得る範圍に就き）　短歌雜誌〔一〕　二　六　服部躬治
杜撰なる歌言葉　わか竹〔九〕　一〇　七　大町主城
誤り易き歌ことば　わか竹〔九・一〇〕　七・三・四　六・一〇　一八　武島羽衣
和歌の章句的解剖　わか竹〔九〕　四・六　一二　高崎龍雄
和歌と語法　わか竹〔一三・一四〕　一〇—一三　二—八　八四　三矢重松
現代語論補遺（短歌の用語問題）　短歌雜誌〔二〕　一一　四　西村陽吉
古歌の句法につきて　大八州學會雜誌〔一四五〕　・　三　平塚松之助
文法眼から見た歌　あさみどり〔九〕　三　五　一記者
子規左千夫の歌論より（子規左千夫の規語論）　短歌雜誌〔四〕　一　五　古泉千樫
短歌連作論の由來　アラヽギ〔一二〕　七　八　齋藤茂吉
長歌うひまなび　わか竹〔一一〕　三・三・四　一一　武島羽衣
長歌の作法　わか竹〔八〕　四　三　海上龍子
再び歌の連作趣味を論ず　心の花〔五〕　四　八　伊藤左千夫
和歌連作論　心の花〔五〕　二　五　大伴輟負
道歌について　わか竹〔二〕　三　四　有馬祐政
短歌の樣式を論ず　明星〔三〕　一・三・三　一三　竹友藻風

ハ、藝術論

題目及備考　雜誌名　卷數　號數　揭載頁數　作者
和歌辭　わか竹〔一一〕　一〇・一一・一二　一一　森田思軒
新歌論　心の花〔四〕　三—六　二〇　伊藤左千夫
續新歌論　心の花〔四・五〕　一一・一五　一・三　一六　伊藤左千夫
新歌論をよむ（伊藤左千夫の新歌論に對して）　心の花〔四〕　七　三　山田源子
和歌新論　わか竹〔二〕　三　六　三輪田元道

歌論　日本學會雜誌〔・〕三　高崎正風
歌論　文海〔二〕一　井上文雄
歌について我今日の考　大帝國〔三〕八・九　伊藤左千夫
歌論　わか竹〔一四〕六　秋山光彪
歌疵　わか竹〔一四〕八　堀秀成
國歌新論　〔三三上〕四・五・六・八　末松謙澄
詠歌邪正論　〔三上〕六・七　春日敬三
詠歌邪正論　〔二二〕一〇　飯田武郷
詠歌邪正論　〔二二〕八　久米幹之
短歌立言　潮音〔六・七〕二—一三　一—四六　太田水穂
短歌小言　ザンボア〔四〕三・七・九　河野愼吾
歌論研究（諸家の意見を擧ぐ）　心の花〔二八〕一—一〇　角鶴東
歌道及び辨正　わか竹〔一四〕四　大國隆正遺稿
和歌論　わか竹〔一三〕一・二　森田思軒
歌學の精神（眞の歌を研究するにあり）　わか竹〔一五〕三・四　池邊義象
言葉の塵塚　わか竹〔一六〕七・八　一一　十二樓主人
和歌の十弊　わか竹〔八〕九　六　武島又次郎
眞の歌　わか竹〔一〕五　四　森本樵作
渡邊氏一派の作歌標準について　心の花〔四〕六　・　森田義郎
新袋草紙　わか竹〔四五〕一三・三　一三　千朶山莊主人
代表的短歌　趣味〔三〕四　四　尾上紫舟
歌論　わか竹〔九〕一　四　臼井治堅
小出翁の歌論を評す　わか竹〔一五〕九　・　一記者
現代口語短歌論者を嗤ふ（反駁論）　短歌雜誌〔二〕一〇　三　半田良平
短歌小觀　アラヽギ〔七・八〕一〇・一一—一四　一九　土屋文明
歌に對する心　青樹〔一・二〕八・九・一　二二　風卷景次郎
世良田氏の歌評につきて　あさみどり〔八〕八　三　青木清高
意義の分らぬ歌　あさみどり〔七〕七　三　横津良春
短歌道一家言　中央公論〔第四十年〕五　二四　齋藤茂吉
得庵居士の歌論　心の花〔四〕一〇　・　葦原青外

井上花圃花散里三氏の歌論を評す　城南評論〔・〕一二　石松健投
竹の里人に與ふる書（手紙）　心の花〔三〕九　心の花一記者二
彈氏評論を駁す　明治歌林〔・〕四七・四八　橘守部九
漢學者の歌論　わか竹〔五〕三　一記者五
歌に對する予が信念　心の花〔六〕一二　森田義郎五
短歌の將來　新聲〔二〇〕五　尾上柴舟・
和歌の將來（將來短歌の進むべきみち及びその方面）　早稲田文學〔四〇年〕一九　佐々木信綱四
和歌の將來（短歌不振を否定す）　早稲田文學〔四〇年〕一九　金子薫園二
短歌の現在と將來　趣味〔三〕五　尾上柴舟三
短歌の將來　新聲〔二〇〕四　三井甲之二
和歌の將來（論說）　わか竹〔三〕一　武島羽衣五
再び短歌運命につきて（短歌は前途漫々たり）　心の花〔二〕四　久保猪之吉六
短歌の運命　心の花〔一〕四　久保猪之吉七
駁歌調說　わか竹〔・〕八　金子元臣四
現代の和歌　好學雜誌〔・〕二二　田上操峰三

賤機（歌論）　明〔未年〕二　與謝野寛九
短歌雜感　アラ、ギ〔一六〕四—六　竹尾忠吉八
預撰歌と私撰歌　わか竹〔一五〕二　小倉博五
最近歌論の研究（鳥木赤彦、花田比露思、吉野並二、古河俊雄、若山牧水、奥島欣人、平岡葉平、の說をあぐ）　心の花〔二八〕一　角鷗東五
生活派短歌の一典型　文藝〔五〕一一　山田清三郎五
短歌の統一世界　音潮〔一〇〕三　太田水穗三
歌は洒落より出るか洒落は歌より出るか（歌は洒落より出るといふ論）　日本文學〔一〕三　土子金四郎二
教育者と和歌　あさみどり〔七〕三　堤成堂二
評論の價値　あさみどり〔七〕五　宮脇義臣二
花田氏の短歌私見を讀む　あさみどり〔七〕二　懷山三
短歌私見　あさみどり〔七〕一　花田比露志四
筆のすさびはしがき（歌論）　あさみどり〔七〕四　記者四
短歌雜感　詩歌〔三〕一〇　古泉千樫二
歌壇の綜合藝術　詩歌〔八〕一　三井甲之二
文法學か心理學か　詩歌〔八〕九　三井甲之三